川柳塔

昭和五十九年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六八八号

日川協加盟

No. 688

九月号

59年度 同人総会と 二賞発表本社句会

日時　昭和59年10月7日（日）午後一時開場

会場　なにわ会館
地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町下車南
電話　06・772・1441番

▼同人総会　午後2時～3時30分
〔議事〕①会計報告・高杉鬼遊　②事業経過報告―樫谷寿馬　③役員改選　④質疑応答

▼二賞発表句会　午後5時30分から
おはなし　西尾栞
路郎賞・川柳塔賞表彰
兼題　「手段」　板尾岳人選
「ぴったり」　西田柳宏子選
「新鋭」　大坂形水選
「道」　西尾栞選

席題　当日二題　各題三句
会費　五百円

川柳塔社

NEW FORMAL COLLECTION

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF ORIGINAL DESIGN

株式会社大一エスケー
〒540　大阪市東区南新町1－13
☎ 06(941)8015

ハーモニカ

西尾　栞

一ヵ月先どりのこの欄を書いていると、気忙しくって、気忙しくって、今年もあと四ヵ月となった。九月と言えば、大正十二年の九月一日に関東大震災のあったことである。私は中学三年生の十四歳でラジオ（鉱石ラジオがあったか）もテレビもない時で、号外で読んだが、災害の程度が解らなかった。日が経つにつれてその凄惨さに驚いたものである。

西条八十はこの日、淀橋の理髪店で散髪していて被災し、その夜は上野の山内で多くの避難者と夜を明かした。その夜不安にかられている群衆の心を、一人の少年が吹いたハーモニカの旋律がしずめたのを見て、八十が歌謡に目をむけることになった。不忍池畔に八十作の「唄を忘れたカナリヤは」の童謡の自筆の歌碑が昭和三十五年に建てられた。

九月十一日は井上剣花坊忌である。

かの有名な

　咳一つ聞えぬ中を天皇旗

の作者で、句碑が鎌倉建長寺の境内にある。

また遠祖柄井川柳忌は九月二十三日である。墓所は浅草竜宝寺内にある。始祖ではあるが、滅多に川柳を作らなかった。

　めかんちの蛙桂馬にとんでみせ

が一句あるだけときく。成程作らなかった筈である。

　川柳忌だからつき合う下戸の猪口　　茶六

残暑まだまだ酷しいが、おいおい秋草も咲いて虫の声も楽しい夜がくるだろう。

×　×　×　×

「誌寿還暦記念句集」の出来栄えを褒めて下さる声を沢山きく。おかげさまでという言葉を本当に心から申上げる。秋の夜長をゆっくりと御愛読の程を……。

あの句集に、あとがきがなかったが、編集部の薫風さん、史好さん、会計の鬼遊さん、それに天笑さんのご尽力は多大で、改めて茲に感謝申し上げる次第である。その他、若い女性軍の応援を忘れてはならない。多謝。

座右の句

一歩出ずれば我れ旅人となる心　（栞）

私の句

句碑五年喜寿金婚の旅やよし　大路美幸

川柳塔　九月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

ハーモニカ……西尾　栞……（1）
懐古……工藤甲吉……（2）
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選……（4）
自選集……（30）
■川柳太平記(76)　川柳の群像　村田周魚……東野大八……（34）
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（十七丁）……（36）
「折句式大成」について〈4〉……阿達義雄……（38）
水煙抄……黒川紫香選……（42）
秀句鑑賞「同人吟」……八木千代……（33）
　　「水煙抄」……西出楓楽……（41）
路郎賞・川柳塔賞候補作品中間発表……（57）
愛染帖……橘高薫風……（60）

懐古

工藤甲吉

「年寄りの昔話」などとよく言われるが、やはり年寄りには「懐古」がつきまとって離れないもののようだ。

昭和二一年に発行された川上三太郎編の「新川柳壹萬句集」は、私の川柳の基礎をなした唯一のものであるが、この句集をたまたま用があってひもとく時など、一層それ（懐古）が強まる。

何せ、今はあの世の句座にいる数多くの先輩、知人の句が、在りし日のその人達の面影を活き活きとよみがえらせてくれるほか、どのページを繰っても往時を回想させてくれる句がいっぱいあるからだ。たとえば、「人の生活（職業）」の項を開くと

火から火を引きづり出して鍛冶屋打ち　三太郎

張物屋越して空地に草が生え　路郎

蹄鉄屋素直な馬を撫てやり　紅衣

に「提灯屋」「傘屋」「炭屋」「桶屋」等々、今では青森でさえ見れなくなった商売の句が次々に出て来て、それが一連の風俗史ともなっているのである。

詩と革命と活山水……東野大八…(63)
「漢詩」……田中正坊…(65)
十郎ファミリーの温かさ……野村太茂津…(66)
大矢十郎句集「みかん船」編集に当って……川上大輪…(67)
「迷う」……野呂鵜汀選…(68)
一路集「得意」……舟木与根一選…(68)
「溝」……浦野和子選…(70)
初歩教室……本田恵二朗…(70)
柳界展望……(72)
悼　草深酔升さん……児島与呂志…(74)
大矢十郎句集「みかん船」出版記念本社八月句会……(75)
各地柳壇（佳句地10選／赤木和子選）……(79)
編集後記……薫風・鬼遊・史好…(91)

座右の句

銀髪になったら着たい色があり　（満津子）

私の句

母の選った柄は後から好きになり　岡田ふみ

ところが昨今の川柳界は、詩性川柳指向や川柳革新に熱心のあまりか、このような分野を放置しているように思えてならない。「昔は昔、今は今」といえばそれまでだが、はたしてそれでいいものかどうか？

もちろん独断、偏見は許されないが、川柳は川柳の特性からも世相、世俗、風俗等を忘れるようなことになれば、大変な事だと私は思う。これも「年寄りの愚痴」？

×

さて話は移るが、北国の夏は短く花火のようにはかない。「ねぶた」「ねぶた」も終わった津軽は、すでにさわやかな秋風

別れ来て派手な浴衣に身を包み　飴ン坊

嬌慢な浴衣を脱いで三十三　盈光

浴衣の糊よ肩がはしるよ　山雨楼

など、昔このように詠まれた浴衣も役目を終えた。私も近く仕舞い込むが、この浴衣は師・路郎が、自分の「恋の罠あの眼だろうか眼だろうか」ほか三句に雄筆をふるって染め上げたいわゆる「川柳浴衣」である。

昭和三十七年、師が青森県川柳大会へ招かれたさい戴き、亡妻が宝物のようにしまって置いてくれたもので、葭乃奥さんが、てずからお縫い下さったと聞いたが、そのとき大阪の鯨尺と青森の曲尺との違いから〝甲吉は外人じゃない筈だが―〟と師が言われたという笑い話もついている浴衣なのである。

川柳塔

西尾栞選

カラシレンコン忘れ物の中にある　豊中市　安藤寿美子

悲しい人が公園のベンチに坐る

大阪の虹は半分だけかかる

梅雨の夜の真赤な月が森に出る

ひとまずは逃げて野良犬考える

昼寝するエリマキトカゲに罪はない

熱心な人その他大ぜい持てあまし　松原市　谷垣史好

切られても動く愛想のいい尻尾

雨降りに出したハガキが泣いて着き

無花果の嘆き生れが賤しくて

肥えすぎの女は蚊帳に入れませぬ

八月の三分の二は無為無策

軽い気持であなたの肩に触れただけ

胃に沁みる匂いも何となく九月

かごめかごめ背中ばかりの他人なり　八尾市　高杉鬼遊

京都ゆきの切符を私鉄の駅で買う

縄のれん通天閣に空がある

日の当る道で眩暈を立てなおす

踏切のベル聴きなれる秋ざくら

冷凍の鯛が韓国語をしゃべり

かぶと虫まちの夕日に売れ残り　大阪市　小出智子

のんびりとしてはおれない萩が咲く

夏の海少し若さが残っていた

びっくり箱ぐらいで妻は驚かぬ

明日のことわからないから種を蒔く

地下道で繋がっているけもの道

浄土からの風に出会うた墓の道

往く夏へオーデコロンを一つ買う

米子市　八木千代

紫陽花の闇にゆくすえ問いつめる
ドライフラワー長い漫画に飽きてくる
空箱を明日は捨てれるかもしれぬ
笑い袋の疲れがありありと見える
月見草私ふつうの女です
片手鍋明日は中身をかえて煮る
まぶしくても朝陽に向うほかはない

新宮市　川上渓水

職安の列に貧しい顔が無い
犯罪のイロハを教えているテレビ
金借りる恐さを金貸す人に聞き
絶好のチャンスに先立つものが無い
身投げする名所も観光客覗き
探し物何を探すかのも忘れ
育児書の通り育てた子の非行

岸和田市　高橋操子

立体首振乙女のスカートからめくり
エリマキトカゲドジな男に似ておかし
デパートのトカゲエリマキひろげない
つゆ明けぬまますず虫が鳴いている
倖せな部屋山百合の香にむせる
感謝する日々倖せだなと思う

桜井市　岩本雀踊子

うたぐればきりない男と女です
燃えつきる様な女にまだ逢えぬ
すて石になる父親の弁当箱
老兵の意地葬式代はためてある
蛍火をすかせば遠い日の女
吹殻に怒りと悔いと哀しみと

大阪市　川口弘生

お守りを毎年送る寺の知恵
月給へ石の心になっている
百発百中百一発は外れるか
カネなくてカネの要らない友と居る
美しい闘いである新体操
二柱の神の新居は3DK

倉敷市　小野克枝

手術日を大安とするカレンダー
説明にうなずくだけのレントゲン
三度目の手術笑って生還す
点滴で三十日を生きた頬
十キロも痩せて大言壮語なり
ああ夫婦酸素マスクが重く見え

岡山県　嘉数兆代賀

負けて勝つ事にも馴れた日のドラマ
白足袋の白が妥協を許さない
背く日の風鈴心の奥で鳴る
それからの女に重いくろかみよ
奥歯かみしめて明日の陽へ誓い
余生いくばく椅子とりゲームしておれぬ

兵庫県　遠山可住

入院と聞けば酒のみ酒にされ
宝くじすんでに当る賑やかさ
陳情で通った道で村が荒れ
天気予報実はわたしも傘を持ち
泥棒か恋かさかんに犬が吠え

ふろんぼ句会深謝

「ふろんぼ」へ浪速の夜はあたたかし　下関市　国弘半休門

大根の白が波立つ清い川
計画の先頭に立つ風当り
ママの午後スーパーまでの紅をつけ
耳鳴りの耳に小言は良く聞え
聖職へ汚職が目立つ昨日今日
漬物を善光寺から土産にし　伊丹市　樫谷寿馬

梅雨の河一期一会を押し流す
すまし汁三ツ葉の自律神経症
ネクタイが弛むと男であることも
和魂洋オレオナルド熊という男
シャープペン一押しごとの余命かな
敬老へ小さく愛の字も欲しい　大阪市　西森花村

振り返る過去は黒子も眼に這入り
表向きに皆官庁は建ってます
サボテンは刺さずにバラのツルが刺し
風の音か弱い離れは祖母が住む

計算の合わぬ信念だから好き
起すまで玩具のように妻起きず　富田林市　岩田美代

意地になる女へ美人だなと思う
さわぐ血があるので本音しまっとく
ビフテキの厚さを悔むひとり言
馬鹿ばかしい苦労話はせぬ事だ
季感はたしか河内の茄子の浅漬で
私今日楽しく老いて冷やっこ　大阪市　天正千梢

他人さまは小さい傷と言うけれど
しあわせは八分目でよしおらが春
モーツアルト聴きたくなりぬ渇いてる
山海の珍味でにがい酒のまされる
精いっぱい働いて惨めとは言わず
大臣の鞄つめたい偽りつめてある　京都市　松川杜的

永らえてイロハかるたにある矛盾
言いたい事が一つだけある葱坊主
七月某日気の早いうろこ雲
オチンコもある人形の眼がきれい
ムクが来て鳩が来てこれっぽちの水溜り
墨の末路ピラミッド型になり　京都市　都倉求芽

女のおしゃべりへ句読点うたされる
これ以上喋ると嘘になる茶をすする

デジタルの一分間がハタと過ぎ
年順でこぼれる水になっておく
高僧はオールドを買う新幹線
出勤のあいさつ訃報が待っていた

竹原市　小島蘭幸

噴水の虹ヒロシマに夏が来る
ほどほどに生命線がある私
エリマキトカゲの後姿が笑えるか
ゴキブリのひげ淋しさが少しある
えこひいきではないけれど次女が好き
おとうさんは力持ちだと信じてる

藤井寺市　児島与呂志

難民の飢餓に平和と言うとれず
妻にだけ知らせぬ嘘を積んだ部屋
本心が顔に出ている善人で
只一歩ゆずって野心を疑ぐられ
相槌をうっとくだけのいい父で
ありのまま妻が分母で居る平和

松原市　玉置重人

貝となる口が真実知っている
法善寺仲居の無理を聞かされる
ややこしい話新幹線で来る
戦争を知らずに捨てるパンの耳
水中花別れた過去をふと思う
道草がとっても好きなベレー帽

堺市　藤井一二三

人間不信見上げる犬の瞳が救う
生きてゆく哀れを虫の声に聴く
職のない顔かも知れぬサングラス
こどもらが昔を呉れる四季の歌

七　夕（二句）

親にハッパかける願いも笹に吊り
子にまじり凡愚の願いも吊っておく

八尾市　宮西弥生

いとしくて哀しくもあり夏の花
一匹の蛍に男と女の夜が更ける
リーダーにされて喫茶で昼寝する
いやな性格になりたくない絵筆
わずらわしさ逃れた貴船水の音
三人の女に貴船瀬の音水の音

八尾市　内海幸生

鳴き疲れ蟬に悔いない陽の沈む
雑草よ来世は花壇に来るでない
剪られても枝は明日の陽へ伸びる
あほらしい筈の松茸買うてくる
投げ返す吹矢を亡母に止められる
落選の味も知ってる祝酒

大阪市　津守柳伸

酒とろり三帖ひと間のお大尽
奥の手が判る大人の酒あそび
乾盃の酒が素直に効きはじめ
わる酔いがいっ気に治る電話ベル

恋しさが募るけじめをつける酒
酔うほどに淋しさが増す雨の音

藤井寺市　吉岡美房

退職の本当の友の声をきく
幕切れはいつも喜劇となる誤算
緞帳がおりて喜劇に泣いていた
ある別離青大将がすり抜ける
平等の基準男女で違いすぎ
ここだけの話で戻って来た噂

岡山市　時末一灯

人泣かすも泣かされるもさだめ
怯えては肌の温もりたしかめる
少し愉快買いかぶられた一日を
打ち水をすれば些細なことだった
今だから言えるひとこと傘の中
八月の空からきこゆ海征かば

兵庫県　河原みのる

お国柄ナポレオンの血が騒ぎだし
臨教審またまた血税無駄使い
ありようはサツもグリコに飽きちゃった
うたぐればデカにも尾行要りそうな
死刑囚でっち上げるより現在のホシ
兼農やがて嫌農になり土亡ぶ

出雲市　原独仙

海開き孫等へ見本抜き手切る
先頭の騒ぎ先生蛇が居る

慰労会階級のない宿浴衣
ネクタイを直して上げたらキスを呉れ
読み差しの頁をめくる青田風
立て鏡ああもう少し背が欲しい

島根県　堀江芳子

そしてまた血よりも濃き縁もある
斐伊川の水こんこんと蛇口満つ
ボールペン人間陶冶の祈り添え
おとうさん満月ですよと酌いであげ
友情に飾る言葉などいらぬ
祈るだけの空しさにいる自己嫌悪

熊本市　有働芳仙

逢うてきたらしい娘のケーキ食う
遊園地恋のもつれを解きに来る
追いついた途端に風の向き変る
入歯外すと年金の顔になり
熟年とおだてオジンとけなされる
呼び水が無いとお金を出さぬ人

奈良市　森田カズエ

廃坑の闇にながれるおけさ節
老人会義歯とはみえぬ喋りよう
福耳の男について馬券買う
実感にまだまだ遠い寡婦の夜
津軽三味線老母の瞼が濡れてくる
票田へぼつぼつ肥料撒きはじめ

大阪市　河井庸佑

術中に落ちたと見せる手を使い
おどおどとするからよけい見透かされ
沈黙が賢明策と逆らわず
知らぬのか知らぬ振りかを見極める
参観日うちの子ほんとに知らんのか
助け舟予定通りに出ずあわて

美祢市　安平次　弘道

泥試合互いにつかむ言葉尻
罪深い女が未来図を笑う
ノルマなどないがサボらぬ蟻の列
ライバルのペースを乱す王手飛車
ジンクスに弱い女の泣きホクロ
計算も確か赤字もまた確か

仙台市　川村映輝

再審無罪真犯人は北叟笑む
北方領土弾頭祖国に向ってる
行方知れぬ馬鹿な息子の夢を見る
サラ金が自己破産とは面白い
やることもやらずに暇を持て余す
つぎつぎに片付忙中閑があり

今治市　越智一水

その日暮らしは隣の花で息を抜き
嫁ほめる姑で姑またほめられる
嫁がすと決めた夫が飲めぬ酒を飲み
前向きになろう肩の掌温い
国道で蛙が死ぬも梅雨なるか

紫陽花へ足をとめるも寺の坂

鳥取県　川崎秋女

少年よ森へ行こうよ祈ろうよ
三面鏡の一つが恐い貌をする
受話器の向こうから聞えてきた噂
そして夏昨日のテスト子が忘る
お茶漬がすき妻も子も捨てられぬ
大物を釣る日の竿はしゃべらない

七尾市　松高秀峰

川の字のやすらぎ知らぬ子に育ち
ライバルの誤字を見つけた日の笑い
別居さす農業させぬと嫁探す
金脈も人脈もなく硬い椅子
異動期に太いパイプのある強味
仏壇に向い姑の独り言

松江市　恒松叮紅

犬・小鳥・金魚に孫の兜虫
介護妻だから月月木金金
衝動買いがまだ治らない子無し妻
亡妻の夢か真夏の昼寝莫蓙
老いらくの野心がのぞくループタイ
肩書がOB会で蘇えり

松江市　小林孤呂二

御赦免を待つ病床の窓をあけ
麦藁帽子もけっこう似合う定年後
人生薄暮いろはにほへと繰り返す

風見鶏のような役人で太られず
退いて見るとずるかしこい狐達
他人の死は美しく聞くことにする

松江市　柳楽鶴丸

仇討ちと知らずに入った露天風呂
「スナック美人」十の顔揃え
妻出張グラスの中に天の川
万緑の津和野城址を人妻と
一日一日毛糸へあみこむ癌患者
工具を銃に変えるなロボットよ

松江市　舟木与根一

路地に住み器用貧乏身につける
古き良き風習田畑とともに消え
新聞の隅をほじくり無職です
被爆日の朝に似ている蟬しぐれ
小さい字でごちゃごちゃ暑中見舞来る
腹の立つＣＭなりにＰＲ

米子市　小西雄々

義理堅い母を素直な瞳でみつめ
修羅の面とれば好々爺かもしれず
ドライブへ貧乏県とわかる道
偽りの灯は裏町ですぐ消える
納得をせぬ良心へ不整脈
ロボットに手作りされてたるものか

米子市　石垣花子

おしゃべりの鳥が森をもめさせる
裏切りへ森の泉は涸れました
あじさいが聞いてる土の一人言
あじさいの未練話も聞きあきる
未熟児も居てあじさいの苦労性
あじさいも噂話に乗りたがり

米子市　林瑞枝

乱菊の懺悔静かに雨が打つ
泣きに来た浜で一会の風に会う
葱坊主ひとり叱ると一斉に
夕顔のおんな星から抜けられぬ
半分のレモンと痛み分ち合う
口下手の貌を忘れぬ曲芸師

米子市　桑原伊都

王座についた時から射程距離に立つ
父の時計今日もリズムをくずさない
あたたかい愛を待ってる花言葉
罪の壺私を責めて重くなる
北風よ津軽の喉の艶やかさ
十字路で鳴らしてみよう母の鈴

米子市　菅井とも子

的しぼる危険な弓が多すぎる
青蚊帳に放した蛍語りつぐ
のらくろが今も生きてる父の画布
フレッシュマン朝はことさら靴鳴らす
小さいうちに傷を探そう鐘が鳴る
紙コップ車中で主役になっている

米子市　田中亜弥

紫陽花の本音が今日は聞かれそう
七色が終わりあじさい母となる
形身わけの聖書時には風をやり
日記帳の余白に罪を意識する
百度石必ず母の灯をともす
ちぎり絵の夢からさめて米を磨ぐ

米子市　雑賀美世

弱点を隠す帽子を連れて歩く
分校に仲間がほしい蛍とぶ
捻子捲けばまだまだ鳴るよオルゴール
うろ覚え助ける妻が居てくれる
八十のバッグへ秘めたコンパクト
この年で籠を出る夢まだ捨てぬ

米子市　野坂なみ

指先にうすい情の糸ごより
亡母の忌やあの紫陽花も濡れている
盆終えて静かに白い帯を解く
蓮の葉の艶にも迷いあるものを
鏡台に老母の指貫置いてある
子に見せたくて蛍の里を探してる

米子市　政岡日枝子

神様の命を少し下さいな
祈り通すと籠から出られるアヒルの子
税金を納めてからのいいねむり
忘れたい過去を他人が覚えてる

三面鏡三つの答をたのしみに
小さなトゲが日に日に深く胸を刺す

和歌山市　西山幸

受話器から聞くいやな世の風の音
お世辞も嘘も下手な味方が居てくれる
コンパクト自己弁護など止しましょう
息切れを知られぬように従いてゆく
もう一人のわたしを縛る私の手
鳩尾に気ままを溜めて病んでいる

和歌山市　浦野和子

マンネリのよかれ悪しかれ風を待つ
さるすべりあの日の空も青かった
浮き浮きと赤ペンいたずらしたくなる
主客転倒夫がしみじみ礼を言う
終章やここに候うものは風
倖せを分け合う泪に嘘がない

和歌山市　福本英子

約束をしたのは小指あなたです
紫陽花の色あせてゆく平凡に
食欲が少し出てきた夫婦星
客馴れのせぬ民宿の銭太鼓
分家してから二男負けていず
相手にはしてないけれど負けそうで

和歌山市　堀端三男

手の鳴らぬ方へ行きたい天邪鬼
県境を越えると川の名も変わり

夕焼け小やけ手をつなぐ子が減っている
老いの意地鳴らぬラッパを抱いている
民宿の長押に槍が架けてある
落書のセンス惜しいと思うトイレ

和歌山市　松原寿子

風は罪レモンの恋へ火をつける
愛ひとつ冴えてむらさき深くする
愛し続けて悔いは残さぬ花の首
愛のスイッチ切る指先に棲む炎
以心伝心風の流れは避け切れず
断ち切れず生きるさだめの石つぶて

和歌山市　坂部紀久子

自販機の前でも女喧しい
前身は毛虫と言いたくない蝶々
許し合う気持になった別れ時
エスカレーター追い越して行く人もあり
留守勝ちの隣へ中元よく届き
昼下り一人トマトの丸かじり

島根県　小砂白汀

耐え抜いたマスクメロンにある香り
誰にでも読ませる手紙なら書かぬ
やまびこの返す言葉を真にうける
うこさべんせぬ一匹が蹴飛ばされ
納得のいかぬおじぎをして帰り
ぬけぬけと同じところへ蜃気楼

島根県　榊原秀子

真実は一つの一つがあかせない
境遇が同じでうまの合う同志
結局は一人で歩く知恵探し
珍らしく星がきれいと夫がいう
淡い思慕ふんわり包む合歓の花
海猫の旅立ち近くこころ病む

島根県　錦織文子

うす紅を裾に廻してまだ女
独り居へとんぼ安心したように舞い
逢える日は心素直な花菖浦
偽りは見せてはならぬ昼の月
冷しビールにだまされて見たいのも女
何時迄も咲かせて見たい人のエゴ

島根県　松本はるみ

それならば内ポケットに果し状
格子戸へ殺し文句をかけておく
向きあった北斗に素手をさしのべる
逃げ水が笑う別れの十字路で
夏ごろも紫色に染めようか
言いたいが熱いコーヒー飲んでから

大阪市　本間満津子

お月さまと昔の話する芒
稚さを残して野菊背が伸びる
友手術の日いちにち掃除して居たり
顔洗うだあれも知ったこっちゃない
言い残しまだありそうな長電話

どの枝もみんなかわいや花鋏　倉敷市　小幡里風

梅酒とか妻がメモ帳繰っている
捨てるもの若干あって旅に出る
風鈴の去年の釘にぶらさがり
捨てるもの捨てて男を主張する
分ち合うよろこび倖せだなと思う
油断なく構えて枇杷の実が熟れる　岸和田市　福浦勝晴

妻（二句）

四ん拾年妻にも言えぬ事がある
白髪染め妻を見直すことに決め
かいだるい民事訴訟へ運ぶ足
催促もせんのに爪と髭は伸び
日記にはとちったことなど書いてなし
封筒を開けると薬のコマーシャル　岸和田市　島崎冨志子

五分五分の勝負へ鬼になりきれず
誉めているちょっぴり妬み持ちながら
かどとれた夫へ歯がゆく思うてくる
よくなつくインコ私の言葉盗る
日記帳の空白私を攻めてくる
友遠方より来たるおしゃべりをしに　竹原市　森井菁居

日曜の皿来週の虹を盛る
敵七人持ち歯磨きは念入りに
トンネルを出るシナリオは妻が書く
白いもの干し干し傷が癒えてゆく
みどり緑みどりが好きで農を継ぐ
ひとり来て海岸線が他人めく　唐津市　浜本久仁於

共稼ぎ妻には妻の時刻表
母だけの暦の中に水子仏
からくりの中を覗いた子の不思議
雨しきり宛名の長い便り書く
母が来て土産話も見て帰り
ちちははが耐えた苦労を子に背負い　唐津市　田口虹汀

鬱憤を話す相手の胸がない
日永さを話上手に聞き上手
流暢な話は耳を通るだけ
少年は童話の姫を忘れない
意気込んで来たが話はせず帰り
錐で揉むような痛さのある法話　唐津市　久保正敏

どの灯より暗く悩みを待つ易者
妻の目に油断のならぬお手伝い
非行児に策無き国と日教組
実印を押すと重たい紙になり
三姉妹男まさりが先に嫁く
法律を破る政治の中に住む　唐津市　浜本義美

九州がんセンター入院（六句）

人生を一寸地獄へ廻り道
グラマーが笑顔をカバーする婦長
手術台ああまないたの鯉にされ
全身麻酔暫しこの世とお訣れか
禁煙のガン病棟で煙草売る
病室の孤独に耐えて句想練る

唐津市　仁部四郎

何捨てた昔話のぬるま湯に
年輪が指紋を消した母の指
前兆は数え直すと数が合い
必要が有るから在るさ機動隊
兄弟に合理主義者が一人要る
校庭の闇で軍歌をうたわない

吹田市　西川景子

涙腺はうれしいなみだにも弱く
ある秘密へその緒カタカタ鳴り止まぬ
華やかな話に目立たぬ嘘一つ
あの人の話は鳴り物入りでくる
話好きなひとが隣の指定席
過去の恋宇野千代ほどじゃないけれど

高石市　牛尾緑良

父親の愛はむこうで待っている
Uターン村に笑顔がよみがえる
出世して故郷に遠くいるくらし
慰めにとまどいがある気の若さ
愛一途対角線を押し通す
通勤の電車を下りる無表情

西宮市　林はつ絵

開かない傘を想ったことあるか
今は庭に二つの傘が干してある
号泣をしばらくそっとしてあげる
骨錆びてこれしか持たぬ父の傘
あじさいの思案は雨のせいだろか
少年がいて鶏一羽飼ってある

松原市　北野久子

引き受けたもののしんどい夏休み
美人やと誉めてくれたは嫁のこと
何のしるしか来月の暦まで
まだ若い夫へ五官だけは冴え
補聴器の人の心を読んでいる
カラオケは縁無いものよビール飲む

弘前市　波多野五楽庵

プライドを洗えば酒の味がする
皿洗う明日は離婚と決めた夜も
八月の涙に濡れる原爆碑
青写真思い出だけの村にする
美しい願いでほしい絵馬の人
コーヒーを割勘でのむだけの仲

兵庫県　辻文平

一歩退く勇気男の逞しさ
悔い一つ二つ足音早くなり

感激を妻と分け合う金婚譜
真っ白い角封筒の助け舟
待つことに慣れてしまった男の譜
故郷からの便り祭りが近うなる

西宮市　奥田みつ子

長男も三男もなし姑を看る
やさしくて時々いけずする姑で
愚痴言わぬ姑の瞳の美しく
姑の色染まり切れずに二十年
逆らった日も遠くなり姑の背な
忍従の亡母より自立の姑が好き

富田林市　藤田泰子

裏窓は私の影の出入口
ライバルと思ってくれる人がいる
私のあしたに母の今日がある
生きている証にときめく胸がある
百円の落ちる早さよラブコール
空の旅あしたが少し遠くなる

尼崎市　西村かすみ

敬老の今日も矢張り孫の守り
その先の話がわかる苦笑い
秋の虫タクト振るのがいるらしい
ひとり寝の紙人形と旅の宿
過去帳に女盛りの亡母がいる
またひとり敵をつくって出世する

西宮市　津山冬子

あけすけに暮せる路地が性に合い
プレゼントされた指環も過去になり
暮し向きのランクが分るお茶の味
自家用で借金の言訳もって来る
サングラス外して欲しい里帰り
試着室少し鏡に欲しい嘘

尼崎市　角野かず子

釘を打つ音で励ます災害地
てるてる坊主二つ吊して信じよう
漫画よむ若者達の静けさよ
待ちぼうけの畳で蟻とたわむれる
花の名を頼りに宿の部屋さがし
夕焼けのバス停で待つ姉いもと

鳥取市　両川洋々

飽食のヤングで米の値は知らぬ
金持ちの苦労の一つ税に触れ
血税で戦争ごっこさすまいぞ
不況です金庫もあくび噛み殺す
三面鏡裏切る顔が三つでき
不景気と別にきっちり税は取り

寝屋川市　柴田英壬子

負け犬がぬるい水呑む昼さがり
繰り言は胸につまっているけれど
唇が乾く疑うのはよそう
バイオリズムが思考消去する
粗衣粗食とても涼しい夏すごす

珍客へリズムが狂うトイレット

豊中市　田中正坊

憲法にひときわ光る愛の文字
出発の合図が恐い小休止
エリートが逆さに落ちる乱気流
プライドを封筒に持つ新社員
花飾る何とはなしに寂しき日
回峰を終えた行者の無表情

八尾市　宮崎シマ子

浴衣着て旅の踊の輪にまじる
市場篭ポストの用も先にして
検診に付合う友が居てくれて
宿の朝何故だか早く目が覚めて
日曜の外出嫁に先越され
還暦に人工呼吸法など習い

倉吉市　奥谷弘朗

惜しいけどオッチョコチョイの所がある
ぴったりの妻と道づれ四十年
筆勢の見事な軸を見て飽かず
逆境に愚痴を言わないたくましさ
恩返しする人生に張りがあり

浜田市　中川幸一

行倒れみたいな顔で昼寝する
血統書付きと雑種が深い仲
鐘鳴らぬ今朝は和尚の二日酔い
ホステスが遠慮せず飲むナポレオン

三面鏡齢相応が気にいらぬ

島根県　西村早苗

つめ立てて猫も逆ろう性をもち
酔うてきた口方言が出はじめる
メロドラマ終り内職場に戻る
孫二人居ますと齢を避けておく
着せたなら似合うだろうと秋の柄

島根県　堀江正朗

月も星も無いけど僕もビヤガーデン
想像と現実草の芽は伸びる
同じ血で年の開きもなく話す
まだ欲が見えもせぬ目をまるくする
赤い血が音の世界に負けそうで

平田市　久家代仕男

田植機が上手に真似た蟹の爪
有事には殊更寒い需給率
農は枯れ先端技術咲き競う
誰に聞かすともなく姑の愚痴
一炊の夢そら耳に返事する

大田市　藤田軒太楼

世の乱れ郵便小包爆発し
世の乱れ人命軽視の記事ばかり
世の歪サラ金地獄に落ちる人
年輪の刻みに想う人生譜
人生の浮沈にあった数え唄

倉吉市　渡辺独歩

お喋りの母が好きな鳳仙花
メリハリが効いた若さを買いたいな
斧知らぬ森は涅槃図抱きこんで
澪標(みおつくし)母の想いが鐘となる
住ひ古りて鏡に聞きたいことばかり

倉吉市　渡辺菩句

自業自得とじっくり話し合ってみる
負けた味ゆっくり噛んでたしかめる
おみくじは吉半月はすぐに過ぎ
友人としての鶏頭植えました
夜光型の僕をとがめる人の無し

倉吉市　野中御前

全盲の指に神の眼が宿る
酒場の灯聖徳太子がとんでゆく
負けて勝つ妻のカードの強いこと
番号で呼ばれた女囚の乳がはり
出陣のカラス鏡で羽繕い

笠岡市　松本忠三

年寄りの冷や水俺のことかいな
言葉尻つかんだだけで悦に入り
脇役のままで定年迎えたり
お互いの年を素直にふれている
ギブアンドテーク内緒にしてあげる

鳥取県　清水一保

おお蛍お前も耐えたか貧しい灯
今日だけはしんみりと聞く雨の私語
風鈴が鳴り出し人間暑くなる
鬼も蛇もみな極楽の方を選り
何事も急がば廻る歳を愛で

松原市　本多洋子

花の芯少し嫉妬が見えてます
カボチャの蔓の説得力には負けそうで
一つの出逢いを大事に思う葱ぼうず
恋愛結婚ですかと不思議そうに言う
おし黙る父の骨母の骨兄の骨

松原市　佐藤藤子

雑巾を絞るしぐさも母に似る
三分粥梅干そえる娘にあまえ
針もてば母の顔妻の顔
本心が屑籠にある一行詩
つながれて将棋倒しにならぬよう

東大阪市　斉藤三十四

両親も敵にまわして愛つのる
世話やける人ねと愛はうれしそう
写真機は恋のはじまり知っている
修学のカメラは富士をたんと撮り
いかついが涙もろいは親ゆずり

東大阪市　森下愛論

上役の悪口を言う飲み心地
青簾打水もして囲われる
起きぬけのコーヒーの味も旅のもの
うまい水汲んでポケットウイスキー

蛙にもリーダーがいる鳴き競べ　大阪市　土岐トク子

墓に眠る子は年とらず母の胸
孫思う祖母の心情プレゼント
バイブルに重荷ゆだねて身の軽し
アッコちゃんタエちゃんとくちゃんクラス会
仏花手にしきりに亡夫のこと憶い　吹田市　藤村〆女

アンケート粗品どっさり積んである
純粋な男炎を抱いて老い
風流なご趣味と皮肉な顔がほめ
紳士録へ父の名前があった過去
終電車星がきれいな甲山　綾瀬市　大山と金

もつれ蝶もつれながらに遠ざかる
父よりも他所から聞いたこと信じ
妻はまだ若い気でいる更衣
お天気と喧嘩もできず肘枕
傘取りに行って飲んでまた忘れ　大阪市　中川滋雀

かくれんぼ鬼の情がいま判り
かくれんぼ良寛さんになりきれぬ
かくれんぼ妻の目線に負けそうで
嫌な話になりそうホットにして貰い
ページ繰る指できき耳立てている　倉敷市　藤井春日

麗しく老い度し定年ついそこだ
曲り角亡父に教えを乞いたい日
妄想の中に自分を見失い
仁の道守れば嗤う世ぞ悲し
ひっそりと咲いてはかなく散った恋　岡山市　川端柳子

泣きにくる泣きよい胸のあるらしく
全力投球あとの疲れが心地よい
虫も好きわたしも好いた着物干す
人差指むずむず賞めることお下手
カラフルな雨脚花壇のドレミファソ　大阪市　江城修史

踏み台の置かれた位置を知っている
精一ぱい生きて浮世に妥協する
子に賭ける夫婦が虹に憧れる
裏切りへ心豊かに持つ別れ
浮草の流れる果てにある墓標　大阪市　神夏磯道子

石切さんの札を見つめる聴診器
睨まれる憶えなどない体重計
鳩ほどにゆっくり待てぬ雨宿り
快方へ苦しみの過去虹になり
大波を越えていのちの重み知る　寝屋川市　宮尾あいき

みちのくの旅

しとやかに白糸の滝雨を恋う　（最上峡）

芭蕉翁により添うて撮る羽黒山
はやる心年齢が押えた立石寺　（山寺登り口）
みはるかす青田のはての地平線　（新　潟）
冷蔵庫のカボチャで食べる旅がえり

和歌山市　若宮武雄

職安を労働市場という立場
パーセンテージにものを言わせる冷たい目
覗き窓鬼の涙を見てしまう
あなたへの錠をかけない窓ひとつ
ぬるま湯で殺し文句を練る女

和歌山市　内芝登志代

どの枝も剪られたくない蕾つけ
何よりも若さが欲しい夏の海
満点を望まぬ生活にあるゆとり
銭湯で時事放談の高笑い
あの時の眼とおんなじの眼に出逢う

和歌山市　坂口公子

ビヤガーデン私が浮かれる小ジョッキ
一本の傘が演じるドラマかな
よもぎ餅あげると亡母が笑います
天狗の鼻添えて招待状が来る
小男の直ぐに去就を決めたがり

和歌山県　天満三千代

青春の残り火校歌の声となり
誇るもの持たぬ夫婦の口喧嘩
梵鐘の余韻へ合す老夫婦
正直に生きて望みのある明日
折れている妻へこぼした苦笑い

和歌山市　細川稚代

擂胡麻の香りがこもる梅雨の窓
計の家みかんの花が今盛り
聞き上手今日も本音を喋らされ
本心は夜空の星に聞いてくれ
義侠心また又悔いが一つ増え

米子市　林荒介

酒場から兄貴の髭がのびて来る
相聞歌消えて岬に灯がともる
腹立ちよマリオネットと我が手あし
飼い犬と痛みを分けて入り陽見る
噴水の裸像と僕のアバラ骨

米子市　青戸田鶴

迷い道つかず離れぬ月の弦
せき止めて流れかえたい日のあせり
森の奥歩かぬ道の跡がある

シンガポール五日間の旅

膚の色溶け合う街のジューンブライド
ターバンにだまされながら買い急ぐ

米子市　澤田千春

わけ合った半分だからある温み
みがくほど鏡の亡母が近くなる
転んでも転んでも空離れない
亡夫の樹をさがせば森が逃げてゆく

底ぬけに笑う女の泣きぼくろ　米子市　寺沢みど里

うどんげの花にしあわせ盗まれる
梅漬けて女の肩が軽くなる
一坪の空をうずめる星の数
真夜中のベルを一生忘れない
大安の晴れ着にわたしを見違える　岸和田市　原さよ子

六十になっても燃える夢があり
夏草に孫の背丈を見失う
嫁がきて今日もうれしい言葉聞く
お日様がこんなに嬉しい梅雨晴間
せせらぎの音湯の宿の月も冴え　岸和田市　清野こう

北海道六泊七日の旅（四句）

サロベツの野に影落し雲走る
白鳥も旅立ちクッシャロの湖しずか
最果ての海なぎ凜と利尻富士
札幌の夜景に浮ぶ時計台
黄金色に実も熟れびわの雨にぬれ　岸和田市　古野ひで

何も彼も許してしまう雨上り
野の花は野にありてこそ愛でたけれ
野草展心優しき人にあう
新米のセールスマンに知恵を貸し
好人物ほかに取柄が無いと言う　岸和田市　芳地狸村

出迎えにいい顔してる福狸
重文のゆがんだ壺を見てかえり
大切な人の名前が残る寺
通訳が出てくる友の電話口
頼まれた釣書封筒に入れたまま　岸和田市　吉水照江

お好みやき女同士の気が揃い
ゆずり合う嫁と姑で有難し
七夕に願いも空し雨となる
灯籠の軒端で雀雨宿り
すだれ越し風鈴の音についまどみ　東大阪市　崎山美子

雰囲気に負けた財布の紐ゆるめ
考えに世代のずれを思い知る
セールスの根気へボーナス持ってかれ
親ゆずりのヘラ台があり寡婦生きる
店じまいサクラに混じる客があり　西宮市　妹尾春江

故里の味でもてなす祭ずし
笑い声ほどに気持は弾まない
保津峡の景もさながら棹さばき
亡母の声五十路の思慮を深くする
亡母の齢越えて亡母恋うことしきり　西宮市　草刈堕駄

妥協癖右も左もすぐ仲間

マルクスを砂浜に埋め工場建て
蝙蝠の楽しき恋の超音波
駅に来てつくづく無常を覚えたり
燃えつきた線香花火で火傷する

貝塚市　行天千代

姉逝きて早や一周忌今日も雨
珍しく素顔で市場へ買いに来る
ビヤガーデン今日の疲れを置いて来る
炎天を行かねばならぬ用が出来
久々の百貨店で眩暈がし

神戸市　仲どんたく

梅雨けむる京の画廊の壺を愛で
五右衛門の昼寝の雨の南禅寺
タレントの勲章となる離婚歴
釣竿の戦果を息子分けに来る
みそ汁がうまい達者へ合掌す

芦屋市　竹中綾珠

新築へ鬼籍の夫の額をかけ
銀行だけ近火見舞にはせつける
耳鳴りのメロディに慣れ気にならず
留守番へ小鳥色々来て倦かず
嫁の機嫌悪い日があり時計見る

尼崎市　奥山美智子

くちびるにやさしく触れるサクランボ
姉なのに小さい方でよいと言う
瓶詰で水が売られている平和
ポケットに今日の秘密がひとつある
狙うほど的がかすんでくる焦り

尼崎市　春城武庫坊

ごきぶりよお前も単身赴任かい
ビル谷間蝶は高さを知ってるか
下駄履くと軽くなる足持っている
皿乾き河童素直に無理を聞く
頭刈る時計が逆に回ってる

尼崎市　春城年代

それとなく会うきっかけを珈琲館
お名前をうっかり今更聞けますか
お隣の夫婦の電池切れたまま
出窓から世間が見えてはかどらぬ
それはもうきっと好意の旗でしょう

尼崎市　伊藤春子

窓際の椅子の乾きを知らぬ妻
口止めを守り気まずい風になり
ひょっこりと梅地下で会う手の言葉
カルチャーセンター年を忘れた女坂
握り箸気ままにさせる蒼い空

諫早市　原田明春

金でする孝行人目によく目立ち
物騒な世の中ライオン飼うたろか
口達者ボケましたとは恐れ入り
ざまあ見ろ日曜タクシーの暇なこと
お見合いを福引きに行く気で出掛け

河内長野市　井上喜酔

国鉄へ飲ませてみたい虫下し
魔術師のシルクハットに遠い夢
切り札は下手に出したら生命とり
殺しても逃がしても嫌な油虫
滑走路かけこみ乗車とはいかず

羽咋市　三宅ろ亭

亭主を隅に追いやり土用干し
健啖を示してくれた孫七人
旧盆の帰郷に出した蒲団乾す
残された核の二人は無言劇
八朔の相撲すませて村は秋

和泉市　岡井やすお

七夕や米ソ衛星にらみ合い
募集難徴兵論者が狙ってる
老健法黙って本人自己負担
長距離はあまり得意でないグリコ
教育をつければ悪事もうまくなる

守口市　野呂右近

笑うまい七十肩にはりやいと
むなしさは題名の無い老いの日日
世の中の恩知り初めて深む老い
最後迄物欲抜ける日はあらじ
旬の味賞でて梨むく午後三時

寝屋川市　江口度

開発へ里の水車が回らない
選ばれた鶴が悪さをして困る
いつも煙草がうまいとは限らない
看板思う目立ちたい目立ちたい
蹴とばされても目覚ましの果す義務

寝屋川市　堀江光子

或日ふと一人のときに聞く鼓動
今度こそ休みに逢いに帰ります
ポスト迄花の途切れぬ好きな道
さわやかな滝音がして八合目
さわやかな風にぶらんこ止めない子

大阪市　北勝美

来年も意地で咲かせる花しょうぶ
無駄もよしそれで世間がよくなれば
万人の声に時間がかかり過ぎ
四捨五入すれすれ人生の浮き沈み
無駄な金それで助かる人もいる

大阪市　吐田公一

紙一枚ハンコを押して他人です
夕立ちが好きな女の迎え傘
退職金只今人気上昇中
居眠りの美人に肩を貸す車中
クールさが買われた藏り仁左衛門

大阪市　西出楓楽

愛深き人からもらう柿の種
クーラーの風からもらううすなさけ
涼風が遊びごころを弄ぶ

距離置いて好きになる余地とっておく
奥の手はひらきなおりと決めてある

大阪市　黒田真砂

せいでもの苦労背負った鬼あざみ
忙しいひと日始まる朝のコーヒー
苦く苦くコーヒーいれて朝ひとり
夫が敷くレールに合わぬ子の意見
愛を盛るとてもすてきな春の籠

大阪市　藤田頂留子

年に二度盆と祭りに帰る亡兄
散らかして一人住まいをまぎらわせ
一人かと貧乏神が戸をたたく
明後日もあると図太いひとり言
上を見て暮してはまる水たまり

大阪市　長谷川春蘭

車椅子押さねばならぬ絆もち
遠くから渡り鳥にもある追慕
遠い里亡母がうたった子守唄
あの空の下はふるさと母も居て
ためらいの余裕あたえぬ棒グラフ

大阪市　杉本智慧子

英会話ワープロ花嫁修業中
ギヤマンの抹茶茶碗が涼しくて
ひおうぎを活けていそいそ祭り待ち
渓流と緑生命のお洗濯
よしず簾我が家涼しい日本調

大阪市　柳原静香

頬杖をこっそり猫が覗きこみ
食欲がないとはうちの猫のこと
血液検査医者が厳しい貌になる
一円を拾って母の貯金箱
寂しさを見せてはならぬ五目ずし

大阪市　鈴木節子

ギャル神輿パンツルックで盛り上げる
長生きの秘訣など考えぬことだ
やせること信じサウナの砂時計
お客さんが去んでせんべい湿り出す
編棒の先九月の旅を選っている

大阪市　山根いつを

そのときはとても言えまい世話の礼
やせるのに昔は効いた恋やまい
相和せば光陰さらに矢の如し
子が言うと出所不明の妻の金
レントゲン美女の乳房もあらばこそ

大阪市　鍛原千里

女三人ひとりはいつも後向き
天秤にかけたその日が別れ道
沈黙で決して罪は消えぬもの
洗濯機今日の気分でよく廻り
まだ痛み残して九月の風が吹く

羽曳野市　佐野白水

難聴は聞き耳立ててる待合室

元も前も会長六十三で逝き
敬老の日よ人生も九月半
敬老の日も電車バス立ったまま
暑さ一番寒さ一番秋風が吹き

枚方市　稲葉星斗

赤い帯花火の方へ揺れて行き
クーラーの故障に社長癇を立て
香水の匂う扇子の横に座し
堂守も昼寝がさめず蟬しぐれ
大の字に寝てて戦火の夢を見る

寝屋川市　稲葉冬葉

嫁になる人かも知れぬ糸電話
縄とびの数が少なくなってゆく
自分だけ落ちぬつもりのおとし穴
終着駅で人生の付録つき
知恵袋破れて世間騒がせる

兵庫県　藤後実男

髪形を変えて恋から遠ざかり
札束を抱いて結局ノーと言えず
念押して来たのに時間間違えて
上着脱ぎ胡坐かいてから男
明日手術本のページが進まない

西条市　片上明水

病状の悪化伝える夏の雲
よくはやる店で奥行深くなる
寝そびれて昼の続きのページ繰る
ふるさとの縁は小さな墓一つ
ライバルの出足黙って待つ自信

名古屋市　越村枯梢

コマーシャルに唆かされた空財布
歩道橋に誰を待ってる夏帽子
墨染めの衣の下の色パンツ
置き薬の一つ一つに騙される
騙されてならないものに濡れまつげ

今治市　矢野佳雲

心得て妻厄年を口にせず
お迎えを待っていますと医者通い
憎らしい程ライバルの弁がたち
妻と子を宝に余り出世せず
例えばと言うと他人ごとだと思い

岡山県　岩道博友

退職の解放感が風と去り
人道を曲げて男出世の裏をゆく
迷惑な話に個性の仮面つけ
停年期地這いの職へも肩たたき
随筆を読んで心に小さい幸

唐津市　木塚素石

立ち読みが散歩に変わる出会の日
青い鳥赤い鳥よみ育った日
大の字に寝て見て撫でた青畳
働くの好きなんですとにくい奴
夏バラは隣に仁義惜しげなく

浜田市　佐々木　裕

太陽の季節に女の臍の胡麻
九十九まで算えて恐い百が来る
先輩を抜きん出てから「君」となり
ウインクは俺の後の奴に有り
寺の鐘ゲートボールに背かれる

高知県　松岡三吉

子に毒な本が大人におもしろい
避妊薬まじめな顔で売ってくれ
人情が絡むとまずい借用書
定年のそれから妻を待つビール
神様の結んだ後は知らん顔

高知県　赤川菊野

飲み残すグラスの底にある野心
愛された女海峡一つ越え
父の死へもう年齢だから年齢だから
裏表二つの顔でよく稼ぎ
孫を抱く姑の胸から鬼が消え

西宮市　野呂鵜汀

勉強はまるでダメだが容姿よし
縁談へ襖の奥で聞く気配
老妻にどれが似合うと尋ねられ
右岸から見れば左岸の美しさ
孫産れ一灯増やす月参り

倉敷市　斎藤通風

一と言を押えて茶席なれた客
一応は話しておくが暗い余韻
東京の砂漠に残る江戸姿
俺だけと許しておけぬ予報ずれ
適量を泰然と呑み駄弁さけ

呉市　槇田英詩

年金が俺を余生にしてしまい
風習の権化よ老父と鬼瓦
風船と子供は母の手に負えぬ
この辺で鏡と妥協してやろう
とことんの努力へ運という味方

守口市　羽原静歩

豊葦原瑞穂国の米不足
歳時記を知らぬ野菜を今日も食べ
ほら貝の視野に悟りが満ちている
バレリーナ秋の深さへ落ちてゆく
三千院秋の愁いを捨てて来る

橿原市　岩井本蔭棒

泣き給え九段の母を歌う時
逆吊りでよし点滴のくすり瓶
いつからか老人側でものを言い
還暦でまだなおってぬ人見知り
敗戦で良かったなどとよくもまあ

姫路市　大原葉香

世間様のお荷物となり車椅子

車椅子世間の白い目に出会い
寝た切りに来る人もなく日の暮れる
約百歩歩けて今日の日課終え
錨つけた様な足だが僕の足

出雲市　園山多賀子

聞き捨てにならぬ話補聴器に拾われる
デッサンは夫に任せて彩を撰る
平和です男が笑い袋提げている
万華鏡覗く女の流転歴
小走りの効く若さから指名され

桜井市　河合茂雄

てっぺんに話し相手のない孤独
夏やせもせずに私に職がない
働いた長さへ余生短か過ぎ
蚊トンボの細さ羨む肥満体
振る舞の後から恐い話くる

大阪市　中西兼治郎

母の背でする泣寝入り美しい
古里の遠さを語る荷のいたみ
通信で得た学歴を仲人ほめ
鯉のぼり上げるおなかにもう宿り
流れても水には妥協せぬ油

大阪市　欄蘭

葬儀屋の店番煙草吸うてるま昼
ギャンブルは惜しまず寄付は出し惜しみ
物言えば先祖の供養と又取られ
テレビ相談我が身でないから笑っとき
びわ湖巡りつかれるだけの秋の風

宇部市　平田実男

通の舌これは炭火で焼いた味
妻や子の知らぬ巣づくりして見たし
その筋の網は大物避けたがり
世辞一つ言って口下手汗を拭き
さまざまなドラマが落ちているホーム

玉野市　小谷仙山

その時が来れば解ると神が言う
平凡に暮して好きななす茶漬
潮騒に台風ニュース遠く聞く
なすきゅうり臍を曲げたら値が下り
むし暑い夜の風鈴は退屈す

島根県　大森孝華

叱ること日々にうすれて蛍光灯
芯えらびひと息入れて花に対す
道連れに出来ない風よ気の重み
道草のうしろ姿へ秋が吹き
待つ人は来ぬまま今日の宅急便

出雲市　石倉芙佐子

無防備に水引草はたおられる
偶然に妻という字の罠に落ち
筋金を入れぬ人形歩き出す

自画像に笑顔を少し浮かべさせ
陰になり日向ともなり三十五

島根県　松本文子

人憎む言葉は言わぬはにほへと
湖荒れてふるさとの友病む便り
鼻面に汗を浮かべて迷い犬
正座する老母お迎えを待つ如く
花の形で舞い込んだ果し状

京都市　山本規不風

貧乏性でゆっくり散歩がまだ出来ず
婿決めて女系家族の責果す
愛の時左手遊んでいませんか
悦ばす相手が元気にして呉れる
山が好き川が好きとて旅に逢う

鳥取市　森田熊生

決心がにぶって亡父へ灯をともす
頬杖の思案転寝してしまい
今日のこと話す子の声弾んでる
販売機気楽な酔いをひきうける
反省の時を待ってる父でいる

島根県　木村はじめ

言い訳をすれば惨めな己が影
幸せと思う向うに妻が居る
一泊の旅に喜ぶ妻を連れ
雲流る来し方語る老い二人

寄せ書の様に寝ている子沢山

神戸市　山口美穂

黄昏て合歓木の葉ねむり花静か
白木槿窓から風邪を見舞われる
撫子花の紅うれしくてたちどまる
紅バラを買うて夢みる夜である
ワイングラスのむこうの夢をひとり抱く

鳥取県　林露杖

栗の花亡夫恋う寡婦の句を思う
病院の待合笑顔は見当らぬ
わが胸の写真恐るおそる見る
指の数ほどの病いと同居して
再審の次々無罪割り切れず

岡山市　行吉照路

恍惚にならぬリハビリ少し汗
土に生き祭りの主役笛を吹く
極楽に行く貌老母の子守唄
肝っ玉母さん惚れたという絆
曲り角弛んだネジの軋る音

八尾市　山下みつる

欠け皿をふやして妻は達者です
頭脳派の無賃乗車はすぐからみ
目の奥でゆるしてやると返事する
消す度に相合傘がでかくなる
虫干しのつもりで春闘旗を出し

姫路市　丁坪サワ子

旅の宿女無雑作にかつら脱ぎ
雨悲し五ッ木の事故の子守唄
梅雨明けも聞かぬに続く熱帯夜
阿呆になる知恵をカラスにささやかれ
呆れたかエリマキトカゲ衿立てず

島根県　藤原鈴江

屋根ぬらす雨に午睡の夢もらう
血がたぎりアバンチュールをそそのかす
石段のひとつひとつにある痛み
レクエイムハイビスカスは血の疼き
色に色重ねて油絵みたされぬ

松江市　竹内寿美子

蛍飛ぶ闇夜の情農を継ぐ
嵐待つテトラポットは歌が好き
皮コート女体に馴染み嫁きそびれ
それなりの顔でマネキン毛皮着る
信号は赤ですライバルを待つゆとり

島根県　北川民子

いい月ね返事くれねば絵にならぬ
名曲を知ったふりして聴くもよし
ほんとうの涙がわかる女坂
同病の女どうしの高笑い
心澄む香でも焚いてあげましょう

岡山市　井上柳五郎

ふるさとは史跡の中に四季の風
脱皮したぬけがら女ふりむかず
ライバルという絆だけ君と僕
のし袋それぞれ絆寄って来る

和泉市　西岡洛酔

泥くさい顔がふる里抜けて来る
思い切り飲める平和に核いらぬ
久方の放言一献の座が開き
背くらべ柱の傷も無いマンション

出雲市　坂垣夢酔

引っ掻きほ爪武器として赤く塗る
むら起し先ずは蛍を呼び戻す
露天風呂一人で煩悩昂ぶらせ
プロポーション上手に褒めて裸婦にさせ

羽曳野市　中村優

札替り明治が近くなりにけり
肩書に汚点をつける銭の毒
本心を伝えてくれぬ社長秘書
ボーナスを攻めるチャイムの音がする

鳥取県　森田布堂

偽物に注意と売った薬事犯
震度5に手抜きの工事あばかれる
麻薬患者の幻想殺さねば殺される
不快指数梅雨の晴れ間の三十度

出雲市　吉岡きみえ

旗振って灼熱の中に父の道
またひとつ召された棺に雨しとど
人間ですロボットに妥協ゆるされず
老いふたり吊橋ゆれる日に堪える

町田市　竹内紫錆

タイムカード父の日からのネクタイで
昼の酒テレビ将棋もいい肴
負けつづけ似顔どおりの眉のしわ
もう疾走はせぬ監督の行き戻り

姫路市　松浦輝月

梔子や年増女と縁切れず
娘にだけは出て来る老母の電話口
愛の巣で日銭を稼ぐ御曹子
日銭ため人生設計着々と

交野市　山本テルミ

産み月の娘が帰って来た疲れ
あるときは魔女になりたい家事多忙
哺乳瓶胸の温みは伝わらず
よろこびの孫の笑顔に嘘はない

大阪市　岡田ふみ

金婚を銀婚の娘に祝われる
立て替えの善意無にする老いの呆け
お見舞が見舞うてほしい顔で来る
薬湯をたててほのぼの老夫婦

境港市　細木歳栄

草いきれああ若き日の体臭よ
畑では農婦の心になって佇つ
へだてなく育てたわが子みな違い
たった一人になりたいだけの願いを夏休み

奈良県　宮川古都路

親切が仇でこの身をせめられる
こけた児は根性で起きる血のにじみ
おとなりはジョークのうまい高笑い
チャッカリと割勘のすし皿を積み

島根県　岸本輝水

しつこさを知ってて狸になる夫
防犯灯だけが明るい早仕舞い
妻だけに分ってもらえた酒を酌み
あじさいの涙袋を持つ女

豊中市　上田登志実

美しさ死ぬまでそれを愛すだろ
懸案の用件はたす日曜日
山の相人の相にも似ておかし
一生を黒子のように生きた人

加賀市　細呂木魯木

浅学非才本音を別にみてほしい
下手なインタビュー選手を萎縮させ
大誤算株式欄が嗤ってる

岡山県　直原七面山

僻みで片付け
妻杖に喜寿の席
酔狂も人が居て

自選集

みちのくの夏至半袖は女だけ
青蚊帳の中に芙蓉の白い花
妻の星子の星竿が短か過ぎ
死んだ方がましという日も無くはなし
悟っては面白くない娑婆となる

工藤甲吉

孫生きる限りは核よ静かなれ
嫁がせて夫婦無口な日が続き
ドラマから喧嘩やきもち逆のぼり
金貸しの家に金貸すビラが来る
よその子が来て真ん中から喰うスイカ

大矢十郎

何故好きか嫌いか理由聞かれても
結果だけ捉えて白か黒を決め

野村多茂津

長い胡坐で男の涙盗み見る
非難した悔いか愚かな影おとす
一日を満たす楽しいスリル待っている

山内静水

被爆者の呻き真っ赤にトマト熟れ
頷いて聴いてくださる方もいて
僕一人手を挙げてない多数決
引き際を線香花火にふと思う
だぁまって妻灸すえている短足に

藤井明朗

みどり消す山峡にブルの音
若い失敗も二度とはゆるされず
おみくじは中吉婚約へゴーサイン
柏手が揃い幸せの鈴ならす
しげさ節隠岐の思い出あたためる

不仕合わせ当になるのは自分だけ
機械植もう村中の声がない
教養のある肥え方と痩せ方と
野次馬についなっていた火事騒ぎ
チアガールセンスも負けてなるものか

米沢暁明

その溝は喧嘩両成敗で埋め
指折れば或る日へ雲は流れ去り
こぼるるや素足に女夏を着せ
せせらぎの海の序曲を聞き給え
梅干に妻の祈りを聞きましょう

水粉千翁

体操でからだの不調整える
補聴器を買うふんぎりがまだつかぬ
他人の事だと思っておったガタがくる
打ち込むものを持ってる呆けはせんだろう
ホタルの灯人間共のエゴを呼ぶ

金井文秋

柳誌還暦瞼に初期の顔々々
値切られて課長の決をとる電話

市場没食子

古傷を脊に今もオッチョコチョイ
病院で馴染の顔も地下へ降り
まんが字でしんどい日記まめに書き

月原宵明

旅の果て亡妻によく似た人と逢う
金魚が鰭かざし女の味方する
晩酌を欠かさず酒の値を知らず
またたきを星が忘れた熱帯夜
袖机と別れてからの非常勤

黒川紫香

出雲路やそぼふる雨も景になる
緑茶出すつつましき瞳の女と会う
混浴で蛍賞で合う露天風呂
ひと言で馴染みのように言う女中
雨もよし狂うた鬼の舌震

本田恵二朗

喜寿劇を打ち上げちょっと一と休み
余生劇の台本十七文字で書く
観劇料は無料だよ余生劇
余生劇のサア開幕だ開幕だ
観客はどうやら老妻一人らし

野天の湯かるい嘘なら許される　正本水客

暑気払いに出好きな人を訪ねてみ

思い出を話す言葉を用意する

道草をして優しさが欲しくなる

城壁に大きな月がひっかかり　若柳潮花

まばたきも出来ぬ座禅へ来る藪蚊

ない袖を振っても子供出す舞台

杯洗へそっと流して妓立ち

握手したファンの汗は楽屋まで

笹舟に乗れば渡れる天の川　橘高薫風

ロス五輪げに失いしもの多し

サーカスに似て来た五輪大一座

宣誓は忘れはしたが金メダル

夏の風邪瀬古とマラソン走るなり

日の丸は坩堝勝者にも敗者にも

昭和59年度 大阪文化祭　第36回川柳大会

日時　**昭和59年11月17日**（土）　11時開場

金場　**大阪府中小企業文化会館14号室**

地下鉄「谷町九」下車南へ徒歩7分東入る

又は「四天王寺前」下車北へ徒歩7分東入る

宿題　「時事雑詠」　柏原幻四郎選

「或る日」　久保田元紀選

「亀裂」　神前　阿字選

「美」　定金　冬二選

「こころ」　岩井　三窓選

「顔」　野村太茂津選

席題　当日2題

各題2句・締切1時

（出句は出席者に限る）

賞　大阪府知事、大阪市長、大阪府・市教育委員長から「川柳賞」贈呈

会費　五百円（作品集代を含む）

主催　大阪府

大阪市

大阪府教育委員会

大阪市教育委員会

今年度は会場が変りましたのでご注意下さい。

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

八木千代

折鶴に生年月日書いてやる　西山　幸

独り病みながら折る千羽鶴は、翔びたくてもとべぬ紙の鶴。せめて生れ日を翼に書いていのちを持たせたいと願う、作者自身が女鶴の化身なのです。

ヒロシマの一草なにか呟けり　高杉鬼遊

この句のいのちは「なにか」。誰も「なにごとか」を説明しすぎぬようにと苦労して川柳をふくらませようとするのですが。

ふたたびは女に生れないように　小出智子

女の連作に見るかろやかな表現の中の女のかなしみ。つらすぎて重すぎてうとましき、と智子さんの述懐が響いてきます。でも私はも一度だけ女に生れて確かめたいと思うのです。

春霞みんな童話の絵にかえす　青戸田鶴

淡く美しい絵の句に見えながら、心も冷えきる長い冬の経緯が、川の音のように底を流れています。

八月の耳を紙ヒコーキがおどし　石垣花子

八月の使いかたも紙ヒコーキの採り入れかたもピタリときまって流石です。軽くいなしてあるけれど実はおそろしい川柳です。

猿島の中にたしかに居るわたし　西出楓楽

たしかに居る私と、それを見ている私と、その風景をたしかに見ている誰かと。猿島に材を借りて人生の俯瞰図をじっくりとみつめる眼がここにあります。

今晩は曇るそうなよ月見草
アダムイブから始まった隠しごと　土居耕花

ふわっとした詩情と大人の笑い。飾りがなくてたのしくて、その中にペーソスまで漂いますねえ。耕花さんのお若い感性に乾杯！

雨が上るとやさしくなりぬ仏の眼　小島蘭幸

この句の前編には雨のさ中で縋った仏のきびしい眼が書いてあるはずです。あのときの非情なまでの眼こそ実はほんとうの力を備えた優しさであったと気付いたとき、雨はくっきりと上りました。

単細胞なりに悩んだ言いまわし　内海幸生

花言葉去年の嘘を思い出す　津守柳伸

美人論少々妻とくいちがい　白岩文衛

どの句にも道化がちょっと顔を出し自己主張をしたいのにそれも見送って淋しがったり困ったり、拗ねたり。読んでいて共鳴するのです。

全快をすれば答がまたちがう　岩田美代

美代さんの体調が心配です。どんな答を出されたのやら。答えのない問いをくりかえしている私にも梅雨は長く、「胸のすく嘘」を信じたいという女のこころが痛いほどです。

一匹になると気さくな鬼になる　森井菁居

不本意にも鬼は誤解をされつづけています。もともと人間を愛し人に愛されたいのが本音の鬼でしょうのに。

薬だけは続けなさいと聴診器　弘津柳慶

これ以上お医者さんは何が言えるでしょう。病名を知らせなくていいものか、聴診器は烈しく揺れています。

子が船になるなら海になってやる　時末一灯

自叙伝に欲しい童話のひとかけら　渡辺菩句

友達にじっくり疵を見せてやる　林荒介

蟬の鳴き声さえも川柳にきこえる日です。

川柳太平記 (76)

川柳の群像

村田周魚

東野大八

東都川柳界というより日本川柳界の名門「きやり」吟社の総帥村田周魚は、本名泰助、明治22年11月17日東京は下谷車坂（現台東区上野）に生れた。東京薬専を卒業し、薬剤師で生涯を終り薬剤の業界紙も経営した。

祖父は雪門派の俳人で海輝、父もその血をうけ継ぎ俳号輝月。この家門の俳風に馴染んで、十二歳の折には俳諧書を読み渉り父祖の俳号にちなんで輝月と称し、のち暁雪と改めたが、十七歳の頃から雑俳に興味を寄せ、その頃東都各新聞紙上を賑わせた川柳欄に手を出し、川柳で賞金稼ぎをするうち、すっかり川柳のトリコとなり、本名をもじって鯛坊と自ら柳号をつけた。

この鯛坊を改め鯛を二枚におろして周魚と改号したのは昭和2年8月である。周魚の川柳作品の特質は俳句の季題川柳が多く、その傾向は全作品の四〇%を占めているのは、生家の俳風の影響によるものと思われる。

周魚の川柳上の体系は、はじめ花又花酔の紹介による柳樽寺同人からだが、この花酔が得意とする花柳吟が柳樽寺社中から強い批判を浴びたことから、花酔の同人辞退を招き、花酔と行をともにして周魚も柳樽寺派を離れ窪田而笑子についた。而笑子選の読売柳壇は他柳壇を圧倒したものだが、而笑子の風雅な俳味川柳は、周魚の川柳体質にぴったり適合したことに加え、而笑子も周魚の人柄と作風を愛したようだ。

而笑子の知遇を受けたことを機に、周魚は近藤飴ン坊からも川柳技法を身につけ阪井久良伎・川上三太郎・八十島勇魚（前号可喜津・杜若）とも親交を重ねた。なかんずく八十島勇魚こそは、終生またとなき周魚の女房役として、きやり吟社を今日あらしめた最大の功労者と目すべき人物であった。

きやり吟社の創立は大正9年4月1日で八十島勇魚（往時可喜津）方で周魚を加え同志六人が集ってスタートした。同時に機関柳誌「きやり」の発刊も決議された。吟社の名称と誌名は、きやり、花山車、纏等であったが

「川柳という行列の鼻っ先へ立つのに（きやり）は持って来いだ」

ということからきやりと決った。もっともこの日顧問に推された中心人物周魚の実父が、大工せ組の棟梁であったことも、江戸木遣りの勇み肌の呼称にも通じていた。

柳誌は「川柳きやり」で納札三つ折という掌上に乗る豆本で約30頁。しかし翌年四つ折袋10頁となり、さらにそのまた翌年はがき版となり、これが関東大震災に見舞われ、大正13年10月号の復活号を出すまで一年休刊する。

復活号は塚越迷亭が発行人となり、飴ン坊や三太郎、矢野きん坊、夢一仏、濤明らが寄稿し、折から柳祖忌ともあってその誌面は活

気に溢れていた。こうして「川柳きやり」が菊判64頁という面貌を一新したのが昭和3年1月号からで、川柳界の著名人が競って寄稿し、ここに同誌は川柳界の筆頭柳誌たる面目を発揮し黄金期に入る。このあと戦時下に突入し、昭和16年1月規格版に縮小されたが、よく苛烈な戦時中を乗り切り、昭和33年1月A5判に改まり今日に及ぶ。（川柳きやり50年史）

—稲光り何処かで猫の鈴が鳴り　周　魚

—ひれ酒の酔本当の事を言ひ　〃

「周魚作品には胸に応えるような穿ちの句も少なく、膝を叩くような滑稽の句もほとんどない。したがって強いて言えば軽味の句と言うことになろう。三要素のうちで軽み作品ほど評価の難しいものはない。とかく一般に見過され勝ちであり、あたかも『メシの味』のようなものである」

「周魚作品を一応軽みと呼んだが、前述の如く、近代川柳は三要素を超越して生活を詠う傾向になってきている。周魚作品はこの生活川柳と言った方が正しいかもしれない」

（「川柳平安」二百号記念特集〝巨星の光茫〟村田周魚篇・山本宍道郎）

「綿入り俳句という言葉をそのまま借用して、綿入り川柳などといった人もあったが、綿が多い程川柳に近いものだ。川柳は純木綿である、と言ったら青年作家諸君から文句が出るかも知れぬが、木綿の六尺が手軽に締められなくなった今日、純木綿の川柳を求める事に困難を感じている。何んの屈托も無く、奇もなく、巧みもなく自由にまとめる、かくしたものにはかるわざ的の見せ場が無いから新進気鋭の人達には喰い足りぬかも知れない。白いものを黒くないという詠み方を尊ぶ一派の諸君に面白くないかも知れぬが、そうした一派の人達も長い月日の間に必ず元の生地に還って来る。二十代から三十代を越えて先ず四十代に入ると、教養にもよるが、総てが素朴となり本当の自分に還って来る。平淡の中に長年経験した人生の味を包括している。此の一見平淡に見える所の妙味これが川柳の真価であろう」

きやり誌上に昭和十一年から連載され好評だった周魚の〝明窓独語〟の中の一文だが、ここには周魚の川柳観がよく出ていよう。

昭和32年4月7日上野東照宮境内に雄渾な

—盃を挙げて天下は廻りもち　周　魚

の句碑を建立している。多士済々のきやり社中の連中の心意気を象徴するものとして注目された。

句碑といえば昭和12年3月、浅草堀端の竜宝寺の柳祖碑〝木枯や…〟の句碑が破損しているのをきやり吟社発願にて建立（関東大震災にて破損）したが、戦災にあって粉砕された。これを昭和30年9月再建、この句碑は阪井久良伎の筆になるもので、周魚は知遇をうけた先輩久良伎の意を掬んでのものだ。また柳多留版元花屋久次郎遺跡の碑も建立している。

「句碑建設の前後から晩年にかけて、きやり誌上における巻頭言は「技巧よりも精神」「うまいまずいは別として」「現代に生きる」「今をだいじに」などという言葉がくりかえし登場してくる。（中略）愛・幸・生きるという文字をナマに使った作品が目に見えて多くなっている。」（前記・山本宍道郎記）

周魚の川柳愛と温和な性格が老境に入った彼を駆りたてたものであろうと筆者はつけ加えている。著書に「明窓独語」（昭16）、「周魚句集」（昭28）、「川柳雑話」（昭30）、昭和42年4月11日死去。享年78歳。

—生きる事のみにあくせくけうも暮れ　周　魚

★次回は「鶴　彬」

誹風柳多留廿六篇研究（十七丁）

八木敬一・鈴木　黄・石田晋一
南　得二・小野真孝・本多正範
石田成佳・大屋六郎・多田　光
故岡田　甫

274　**鶉聞〳〵手あぶりをこしらへる**

八木＝深草は『山城名勝志』によると、東は小栗栖、南は伏見、西は竹田、北は稲荷の間をいうと。また、鶉の名所であり、土器の産地として知られた。

句意は洛外深草で、名所のウズラの声を聞きながら、これも名物の土火鉢をこしらえるという句。どちらも深草名物でまとめた句。

多田＝賛。

岡田＝同。

275　**頼豪の外ヵハ供物をかぢる也**

八木＝白河天皇の御代、皇子御降誕の祈願を三井寺の実相坊頼豪がなす。敦文親王誕生。しかしその恩賞が思いのままにいかなかったため、持仏堂で絶食、死ぬ。皇子も四歳で死亡。頼豪の霊は大鼠となり叡山の谷に満ち、経文を食い破ったという。

句意は、頼豪の霊の大鼠は経文だけを食いかじったというが、他のもの、鼠はお供え物の食べ物をかじったであろう、という句。

南＝賛。

だい食キのかわり鼠に成てくい　一〇・13

叡山の鼠供物に手も付す　六一・10

多田＝賛。

岡田＝同。

276　**生酔の突当るたび花かちり**

八木＝花の山に酔払いはつきものとなる。桜の木に酔払いがぶつかると、桜の花が散る、という句であろう。

花の山よろける度に人がちり　安六・桜2

来て見ろと生酔花をふり廻し　一五・33

〔再考〕これは、生酔が桜の枝を折って持っていて、彼が他の花見の人に突き当るたびに彼の持っている枝から花が散る、と解した方

がよかろうか。

石田晋＝八木氏再考説に賛。

南＝八木氏前説に賛。

多田＝同。修学旅行のお伴で吉野に行った時桜によろけかかった人のいたことを思い出します。

岡田＝前説、後説どちらとも解せられるが、後説の方と考えていました。

277　**ひからびた餅を万歳内で喰ィ**

八木＝万歳は正月いっぱいで故郷へ帰る。国へもどれば元の百姓。

しゃうぞくを取ると水のミ弐人出来　傍一・45

正月一ぱいで家へ帰るから、その頃は餅も干からびている、という句。

南＝賛。

油かき合せて又来春とたち　二八・12

江戸おしぞ思ひ三河へ帰る也　篭三・1

万歳の女房霜月産をする　七三・2

多田＝賛。

淋しさは万歳村の松の内　ケイ五・23

岡田＝同。

278　**奥方に異名を付る切落し**

八木＝切落しの安い席の連中が、桟敷等上席の「奥方」階級の観客にいろいろ勝手なあだなをつけて喜んでいる、というのであろう。

天人が土間でみかんの花がふり　四五・5

みかんのかわのとぶ所にいい女　安八・義4

多田＝賛。

岡田＝同。

279　**かんばった諷御子孫も繁昌**

八木＝甲張った声で諷ふ、その文句は「御子孫も繁昌」というのに、諷の節を付けてうたったものであったらしい、とは『川柳と謡曲』の説明。

ところで、「御子孫も繁昌」というのは、何かの文句取りであろうか。考えるに、乞食能の常套文句だったのであろうか。

多田＝賛。

魚すくふように浪人かがんで来　五八・39

岡田＝乞食能の常套語です。

280　**ねからよめませぬとこてでほぢり出し**

八木＝『時代川柳大観』の略註には、「古論語は孔子宅の壁にかくされてあったので、秦の始皇帝の焚書の厄をまぬかれた」とある。

句意は、孝経等は孔子の家の壁にぬりこんであったので、焚書の厄を逃れたが、漢の時代、それを掘り出したとき、左官は「ねっから読めませぬ」といったであろう、という想像句。

よめねへ本か出やしたと左官いひ　拾五・9

始皇帝かべの中にハ気がつかず　二二・19

多田＝賛。

しかうしてのちをかんがへぬりこめる　四四・36

漢の書肆とんた掘出シ物を買ィ　五四・44

岡田＝賛。

川柳塔柳箋

一冊　二百円

送料　二百四十円

『折句式大成』について〈4〉

阿達義雄

『折句式大成』の句風

『折句式大成』に収められている句が、一句立にされた前句附の附句と上方折句との混成であったにしても、一応これを以て、上方の雑俳評者の選に成る宝暦三年頃の独立句の水準と見るならば、これは江戸における『柳多留』初編の川柳点に相応するものであって、川柳点に先行する上方雑俳の一句立の句が如何なるものであったかの好見本とも考えられる。

殊に川柳点が上方の一句立の句からも影響を受けていることを思うと、川柳点の特徴を考える上から、一句立の川柳点が成立する前における上方雑俳の一句立の句の存在意義を閑却することはできない。

このような観点から『折句式大成』の佳句と思われる句について、その大体の傾向を考究してみよう。

先ず『折句式大成』の中の秀逸句に見られる顕著な傾向は、人間の心や行為に対する皮肉、諷刺の句が目立って来ていることである。

例えば、

孝行で皆顕はれし親の恥
木綿物似合はぬ程の不仕合
世は夢と教へ住持の蔵ふしん
泣いた眼の互に光る記念分け
恥しめる度に娘の肝太り
起請文次手に二枚書いて置
心中が追剝に逢ひ生き延る

などの句がそれで、これは、人間や社会を単純に正面からだけ見ないで、裏面や弱点や欠陥などにも眼を注ぐようになった現われであろう。

即ち、これは、従来の俳諧的又は倫理的等の伝統から離れて、物の見方が人間的又は批判的になって来たことを語るとともに、自然諷詠の詠嘆的な立場や伝統肯定の観念的立場から脱して、町人的、現実的、唯物的な見方を忌憚なく表白するに至った時潮の反映であ

ろう。

これらの句の中には、人々の日常的な物の見方の盲点を衝いて、その底にある真をあばいているのも見られる。

同じ諷刺にしても、表現を即物的写生的にすることによって、痛烈な冷笑の句とし、

石塔に朱で書きし身は薬喰ひ（注1）

石塔の赤い信女がまた孕み

「朱で書きし身」は即ち「赤い信女」であるが、後者は、その即物的写生的な点を以て印象効果をあげている。

尤も、短句の場合は、表現技巧を避けて

病んで夫の心見あげる（注2）

のように、簡潔な表現で、複雑な夫と妻の心理に触れている句も見られる。

戦争、死、性などの交錯する人間性の暗黒面を象徴的に詠んでいる句、

落城の濠に張形浮いて有り（注3）

などは、性的なものが中心になっているために、客観的には可笑味を唆るものであっても、内容自体は深刻なものとなって来ている。

多少の諷刺があるにせよ、滑稽を主とした句には、

千人の中へ加はゝるかすり疵

道の記の消した所を問ふ女房

珍客が有て女房と仲直る

急用の丁稚惣嫁と摑み合ふ（注4）

掛乞が来れば和讃を長う引き（注5）

などがあり、これらの面白さは、急迫した場面における人間的な動作と心的態度が傍観的に見下ろされている処にある。

写実的な句に余り巧妙な句の見出し得ないのは、一句立の初期の句であったり、折句題の窮屈さの関係からと思われるが、それにしても、

合点した娘に母は手を合せ

知る人にばかり子供がすへるぜん

吸物一つ出して立聞き

などの句や、話体語の一部分を詠み込んだ

そんな事いふてかいなと糸通す

たれがいふたとツイ落ちにけり

右のような、折句として詠まれたとは信じられない自然的な句も見られる。

人情の機微に触れた句、特に人情の深い陰翳を詠み出した句となると極めて稀で、

我伊達に下女の髪迄結うて遣り

藪入が親の意見を小さがり

右の二句などが先ず佳作の方であろう。これが次の二句になると、いささか説明的になってしまったようである。

むつまじさ昼物いふた事がない（注6）

遺言にもれし妹は器量よし

具体的描写の巧妙さ、躍如たる写生というような句は、矢張り、最盛期の川柳点の出現を俟たなければならないと感じられる。

表現の面白さについて目に止まったのは、

又折も有らうと腹を立て残し

右の一句くらいのものであった。

なお、『折句式大成』の後編たる『類字折句集』は宝暦十二年刊行で、これも『柳多留』初編の未だ現われていない頃に、『柳多留』に先立って、上方において五七五の独立句を成立させていたもので、

おれがじゃないともめた子に掛り

悪口の方へ日傘をかたぶける

上着より下の見せたき歩行様

のうれんを俯いて出る髪の出来

洩れさうな口へ一歩をほうばらせ

新枕気にかかるふとい灯

など、なかなか優れた句も見え、表現的には前編よりも、やや進んでいるようである。

この『類字折句集』の刊行されたのは『柳多留』初編よりも三年前のことであった。

軽妙な洒落をものした句の見当らないのは矢張り折句という制約の所為であろう。

それにしても、川柳点に先行する『折句式大成』などから川柳評万句合に取り込まれる程、川柳点に近似した多くの句の発見されることは、川柳点成立史の上から注意すべきことである。

『俳諧折句式大成』の中には、川柳点にも劣らないような佳句が見られる。

だが、この書の序で誇称している「秀逸高判抜群の句」というのは、管見によれば、古今の前句附の附句の中から一句立として優れている句を抜いたものが多くあるに拘らず、如何にも多くの折句の中からだけ抜粋したように偽装したものであって、これについては幾つかの句によって実証してみたのであるが、このような偽装例は、まだまだ多くある筈である。

(注1) 薬喰ひ……江戸時代に滋養のため、体力をつけるため獣肉を薬として食したこと。人に隠れて食べるのが普通であった。

(注2) 心見上げる……この句の場合、「心の奥まで見てしまう」ことであろう。

(注3) 張形……べっ甲、牛角などで造った女性用の淫具。主として御殿女中、好色の後家などに愛用された。『犬筑波集』に、「東路や誰が娘とかちぎるらむ、逢坂山を越ゆる張形」とあり。

(注4) 惣嫁……上方で路傍で売淫する最下級の淫売婦、近松世話物には「十文色」として出てくる。

(注5) 和讃……仏や菩薩などの徳行を讃嘆した七五調の歌。

(注6) むつまじさ昼物いふた事がない……宝暦十二年の川柳評万句合の前句である「むつまじい事〳〵」に附けた句に「その手代その下女昼は物言はず」という句が見られる。

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

西出楓楽

昨日までの辞書がきびしい顔をする
藤井高子

人生の折返し点前後から、坂道を下っているのをいやでも自覚させられます。「辞書」の表現に奥行きが感じられます。

時々は母の相槌ほしくなり
松川芳子

このように気取りもてらいもない素直な句に出会うと、心が安らぎます。世の母親族がみんなこんな風であれば、積木もくずれないのでしょうが……。

その影を蹴って溜飲下げました
赤木和子

川柳のひそやかなたのしみに、いろいろな憂さを句にして、晴らしてしまえることがあると思います。このように腹の立つ人の影を蹴り、その上句にすれば、心の澱がすっかり出てしまい、いつも笑顔で世を渡れるというものでしょう。

妻の言う言葉にやさしい風が吹く
西本保夫

時々、抽象的な名詞をはめ込み、安易に逃げを打ってあるのに、奥深い句のように錯覚させられていることがあります。この句の「やさしい風」はいのちだと思います。

身勝手は他人任せで泣いている
佐藤令子

涙を武器とするのが理不尽と気付かない女の本質を、よく衝いています。作者のしらけた目が生きています。

追いかけて見ようと思う流れ星
神平狂虎

願いごとを聞きとどけてくれるという流れ星。しかし一瞬の間で消えてしまうものです。幸せを追いかけるとは、このようにはかないものだとわかってはいても、なお「追いかけて見よう」と思うのでしょう。

傾けたグラス別れを予感する
光井玲子

予感とは理屈でなく、言葉尻やしぐさから伝わってくるものです。作者のナイーブな感性が、読む者にも伝わってきます。

孤独と気楽は背中合せよ爪を切る
永田俊子

心が鬱々としている時、爪はよくのびると聞きます。割切ったはずの屈折した心境を、爪を切る動作に托した手だれを、心にくいと感じました。

小さじ少々私の味で決めてみる
後藤正子

翔ぶなどとは思いもよらず、夫の陰で生きている女が、或る日意を決し、ささやかな自己主張をする様子が、目の当りに出来ます。間接表現で、作者の人柄も境遇をも浮彫りにしています。

仲よしの三人三原色に生き
豊田貴美

正反対の性格を持った者同士が、気の合うことはよく見られます。どんな色でも作れる三原色を友と見立てたのは、ぴったりの表現です。上五、仲よしと言うやさしい言葉が、理屈に傾く嫌いのある「三原色」をカバーしています。

ライバルを倒し無口になるばかり
紀市郁栄

ライバルは、競り合ってこそ存在の意義を持つものです。完膚なきまでに倒し、快哉を叫んでみても、空しさがすぐにおし寄せてくるでしょう。「無口になるばかり」で、作者の複雑な胸中が語り尽されています。

いい天気僕も小石の中の石
田中叶

星形のこころで女病んでいる
前川千賀子

五九二句の力作を、何度も何度も読み返しました。六月投句分という季節柄、梅雨の句が多く、花、旅など自然を題材にしたものにも秀句がたくさんありました。ところが、選んだあとで気が付いたのですが、人にまつわる句ばかりを取り上げていました。

それが川柳の本質だからなのでしょうか。

黒川紫香選

倖せはすこうし鼻の低い顔
ふり向いた顔は素直な十五歳
騙された私を笑う三面鏡
白線の外に出たがるねぎ坊主
森林浴はしゃいでいるのは妻の声

大阪市　清水康恵

涙を飲んだ日から女は強くなる
凡妻で香水瓶が欠伸する
欠伸して闘う顔が消えている
よく見れば目的があるかたつむり
オーデコロンが少しこぼれて夏になる

尼崎市　福田礼子

すぐ汗になるのに女眉を引く
考えてみるとは脈がありそうな
世界地図娘の行き先を追ってみる
乗ってますねェと皮肉がちとまじり
将棋ちと休戦にしてかき氷

熊本市　宇野昭代

やさしさの輪から逃げ出すへびいちご
五線紙にパチンコ玉でドレミファソ
戎橋デートの姉とすれ違い
秋彼岸亡母知る人と寺の道
落陽へ白い手毬を追いつづけ

八尾市　高杉千歩

ゆるす目でうな重ふたつ運ばれる
落鮎のなさけをつなぐ箸枕
追越したうしろ姿がすばらしい
いい噂流れてくばるお赤飯
この島の慟哭赤い花が咲く

尼崎市　田中晴子

野に山に花ある限り愛すべし
眼鏡外せばあなたではない貴方
手紙から電話になって打ち解ける
男って可愛い五十も六十も
したたかな女よと思うかすみ草

藤井寺市　赤木和子

富山市　舟渡杏花

七福神のひとり気ままで絵にならず
保険屋の舌へいのちが見積られ
岩のりのうまさへ遠く海女の笛
衣食住足りる平凡物足りず
てっぺんで仰いだ天に底がない

熊本市　永田俊子

直線コースはずれて人情を拾い
噴水の律義さ笑う待ちぼうけ
コンマ以下のくらしでもいい星が降る
大切にルール守って芽が出ない
願い一途リンゴの皮を長くむく

和歌山市　後藤正子

八月の課題は熱い砂に描く
女には約束しない夏の雲
ささやかに女の沽券ふりかざす
まるで儀式蝶を曳っぱる蟻の列
玉子焼機嫌を損ねないように

和歌山市　福井桂香

言葉尻とらえ淋しい鬼の面
嘘つけぬ人で小鼻がすぐ動き
一陣の風に破れた午後の夢
おちょぼ口へ甘酢っぱーいさくらんぼ
女五人リーダー格はよくしゃべり

名古屋市　藤井高子

月見草ほどの優しさ持てたなら
わたくしの裏も見ているお月さま
アルバムに剝いであるのは傷のあと
ライバルの帽子が少し大きいな
許す日も憎い日もあり背を流す

近江八幡市　前川千賀子

送り火よ人の契りの短かさよ
夫は他人小休止から追いつけぬ
きのこ雲に時効許さぬ夏の空
のれんの味を盗んできたは妻でない
ペンだこの堅さは妥協などしない

宝塚市　丸山よし津

お人好しで胸のボタンを掛け忘れ
水割りの水まで買うて飲む奢り
故郷に懐かしくない過去もある
父の日があるから父へプレゼント
ついて来た筈の女が肩並べ

東予市　小山悠泉

真直ぐな父の気骨に背くまい
男にも女にもなり寡婦生きる
相合傘雨の舗道に詩がある
星占い少女の恋が叶いそう
腰すえて飲む気にさせた旅の雨

京都市　松川芳子

母の目がまだまだこわい威厳持つ
まだ残る空地へ値踏みして通る
水玉に思い出があり過去といる

いい事がありそうカーテンの色替える
無駄骨も明日への暮しの糧とする　高槻市　竹内花代子

ころばせば素直に動く置時計
七夕の笹をつるしているテラス
雑談を紋白蝶にこわされる
病院を出て薬局で買う薬
黒百合の花が津軽を越えて着く　岐阜市　市川鱗魚

裏腹を読んだ味方に担がれる
蜘蛛の子が走る構えの通り雨
翔べる日の割り符は持たぬ千羽鶴
尻馬にのって噂が風と来る
古い古い母でまな板詩がある　大阪市　上田柳影

溝一つ越えると敵が攻めてくる
すばらしい気概を持っていた日記
親類に大金持が居る話
北向きに寝るのも旅の宿のこと
ゆるい下駄宿は遠出を好まない　高槻市　笠嶋恵美子

平手打ちされた痛さで立ち上がる
聞き流すことを覚えてから肥り
飛んだとて所詮夫の掌の中で
扉を閉めてやがてひとりの淋しさよ
中年の日傘くるくるよくしゃべり　尼崎市　丹下玉子

三浦　グリコ　歯がゆいニュースに暑さ増す
地平線の彼方へ消えた馬賊の詩
素朴な人だが親しみが湧いてくる
御破算にしても出て来ぬ不足分　寝屋川市　平松かすみ

マイカーが止まりファスナー開いてます
コーラスへお疲れさまとシューアイス
ビールビンころころ美容健康法
捨てる話に時計が動き出す　尼崎市　児玉歌子

菜箸をタクトにしてる給料日
三人の脈を探りに寄るお酌
絵日記にやっぱりママが威張ってる
詰め将棋野次馬先手打ちたがる　熊本県　高野宵草

看板におじぎさせてる工事中
咳すれば龍角散の煙を吐き
幸せも教えた姑の塩加減
裏表知りつくしたので離婚する　滋賀県　安田志津

ＩＳＡホームスティーを引き受けて

箸使い上手な長身医学生
また来てね通じぬ言葉で送り出す
心ない風が噂をおいてゆく
梅雨しとど硝子の汚れが気にかかる

近道を選ぶ自分を見損なう　和歌山市　神平狂虎

闘いが済めば何でもない男
絵に描いた様な訣れへ流れ星
一行詩の中で自分を売っている　寝屋川市　岸野あやめ

老残の牡丹の願う安楽死
火遊びは虫も殺さぬ顔でする
子を逝かせ雨は背に降る顔に降る
紫を着れば貞女の様に見え　尼崎市　吉永伊三郎

義理立てて首の保証をする男
先に行くつもりの保険妻名儀
旅に出た奥さんずっと帰らない
あと一人待ってくれないコマーシャル　西宮市　松本一郎

背くこと知らず球根花をつけ
朝顔の種を二粒孫が呉れ
電話機もレースで夏の衣裳替え
ゴルフやめゲートボールにしようかな　吹田円茂見よ志子

友人が噂土産に持ってくる
兎小屋なれど公園神社端
公園の静寂老人連で明け
乱雑にもろもろ増える我が机　尼崎市　山田保蔵

定年かそうかと味のない返事
同期生商売敵の職につき
傘立てに見なれぬ赤い傘がある
料金を言わずに虫歯削り出す　吹田市　井上照子

盃を握りしめてる敗北感
絵心をそそる虫喰い山の柿
体重計狂っているといつも言う
厄はらいしても心配ごとつづく　大阪市　川原章久

点滴を打たれる様な顔で打ち
酒屋との交際迄も代替り
義理と欲悲喜交々の見舞客
月影を桶一杯に掬い取り　和歌山県　寺田裕美

泣く時に泣いて女になってゆく
先頭がだんだん遠くなる疲れ
七夕の竹を濡らした通り雨
いい風もあるさ閉ざした窓が言う　米子市　門脇晶子

夢に見た童話のヒロインそばにいた
蛇口から朝がはじまる母の指
紙風船行先決めてとんで行け
浮舟よ住みよい岸につけてくれ　今治市　月原つくし

謀り事我が身が落ちていた誤算

口笛を吹いて痛さを我慢する
数え唄好きな女が持つ慕情
別れ道童話の聞ける方を向く

竹原市　岩本笑子

脱皮するセミ重力に逆わず
むらさきを髪にさしたる面影よ
ゆかた縫う一針亡母がよみがえる
旅先の夫の電話のやさしすぎ

吹田市　栗谷春子

かみなりが梅雨明け宣言苦笑する
冷蔵庫の音だけ高い昼さがり
昼さがりいつ降ったやらやんだやら
夢の話もいと真剣に老姉妹

鳥取県　羽津川公乃

これも幸茶漬けサラサラ暑気払い
うろ覚えで有ってはならぬ原爆忌
あくびする椅子ロボットに狙われる
村平和点検だけの消防車

愛媛県　八塚三五島

赤提灯下戸もきれいだなと思い
ナースみな美人楽しく通院す
男ぬき女の旅のときめける
旧街道土塀の崩れ方に惚れ

八尾市　古川覚然坊

娘が呉れた新居で背伸びする孤老
鬼が島もう宝はないと手を上げる
お見合がすむとマナーもう忘れ
軽快な笑いがこだまするキャンプ

熊本県　大川幸子

隣席の欠伸素直にうけている
騙されるワイングラスの赤い色
カラフルな色はいらない影法師
海水浴孫の頭を見失う

伊丹市　樫谷郁子

梅雨に生き梅雨に驕れる花菖蒲
群生も一株もよい花菖蒲
水茎の跡に高貴が偲ばれる
カラオケが静かに流れ雨のバス

高石市　浅野房子

友と乗るローカル線は話好き
空財布猫の子ばかりが増えつづけ
雑音に迷って本音見失い
かけ馴れた眼鏡がいつかずれていた

米子市　茂理重代

臨月の娘と分ちたい暑に耐える
傾いた墓石絆を恋しがり
風鈴の気になる夜は故郷に書く
愚痴言って悔いて口紅そっとつけ

長岡京市　木本如洲

妥協した風につまずくちびた靴
柚子の里柚子のしずくにむせかえり
海苔茶漬女将の温い京言葉

楢山へ切符の無駄はそれでよし　山口県　高崎雀声

ふるさとの味はパックでとどけられ
追伸の方が大事な金無心
梅雨晴間洗濯にたりぬ竿
青春を戦地で過ごした日の日記　豊中市　満仲きく子

一隅を照らす灯になる難しさ
二人三脚一人こけたらみなこける
憧れは貝散らばっている渚
店頭のグリコ商品買う勇気　大阪市　古川美津枝

居候の朝顔どんと天めざす
迷い子は一直線をかけて行く
矢印へ一寸迷うて見とうなる
退院の目にはまぶしい夏の空　大阪市　町田達子

人工の滝でとなえる般若経
曲げられて壺ですねてる花もあり
七夕の逢瀬が見えぬ街の空
高原の旅で星屑受ける幸　大阪市　日阪秋子

教えてと賢い人におだてられ
教科書が手垢だらけの努力型
予期しない言葉が返る右の耳
旅土産母に好みの財布買う　弘前市　田中叶

それなりの貌にもならず妻と住む
管理者のある日吹きたいハーモニカ
四面楚歌なんとかなしい鼾かく
孫の掃く落葉に埋もれゆく老後　鳥取県　新家まさる

疲れたら話しに来いと海が待つ
哲学の森に踏み込むガン病棟
青空の隅にため息そっとすて
ネオン街はずれて星の流れ知る　唐津市　浜本ちよ

封をして裏に一行添書きし
思考ゼロテレビばかりを見ている日
孕み猫塀は飛ばずに遠廻り
他の彩の中で一際白の冴え　富田林市　植松慶子

送り出す靴も重たき雨続く
もうそんな子がおありかと話題変え
強くなった女から守る大峰山
マシュマロのような青虫愛しんで　和歌山市　山川克子

同じ過去あるからいつもやさしい瞳
邪魔になる時計が私を責めたてる
泣きながら濡れながらもと来た道を
馬耳東風やっぱり気になる耳動く　和歌山県　山田久子

気をゆるす結び目一つ解けていた
生き方の手本よ母がそこに居る
子育てのなんたるかなど論じ合い
瞼から消えないままに月日過ぎ

岡山県　牧野秀香

冗談の言える信じた友があり
一人言言うてうるおいある暮らし
何が気に入らぬかフグの顔となり
有線のおかげボヤだけだしてすみ

岡山県　伏見すみれ

イヤリング縁なく古稀も近くなり
肩車父の匂いが忘られず
学歴のない子が優しいので頼り

川西市　野村静雄

病床で嘘聞かされる番になる
劫を取り返しに今朝の靴を履く
特級は客の来た日の酒にする

熊本市　黒田緑

片袖を通せば夏の風が抜け
何気ない返事がかえるあたたかさ
理路整然と肩を凝らせて去った靴

米子市　足立由美子

手鏡の中に私の意地がある
ひいきめの鏡美人にしてくれる
貴重品扱う様にホタル飼い

西宮市　山片紀雄

盆踊り町内にあんな娘居たかしら
朝顔は垣根を越して覗いてる
蟬しぐれ子供の夢は木の上に

箕面市　坪田紅葉

寝ていても口だけ達者で退屈で
電話より会いに行きたい人がいる
借り傘を干す間もない雨つづき

守口市　森川まさお

船が着く時刻かもめが騒ぎだし
草いきれここから先はよその県
ダムになる予定の村の地蔵尊

守口市　結城君子

老姉妹どちらも詫びず仲直り
橋完成因島ゆれる程車
ソーメンの或日演出変えてみる

竹原市　信本博子

水槽の中で平和な金魚達
趣味が合いコレクション皆出して見せ
枯松がちらほら見えて山も病み

岡山県　杉本伊久栄

長生きをしてねと優しい孫の声
七人に刃向かう朝の靴をはく
熟年のまだ夢を追うイヤリング

羽曳野市　田中隆二

母の忌へ妻が作った五目ずし
男にも流す涙はたんとある

とんぼりのゴンドラネオンの波に揺れ
和歌山市　桜井千秀

顔なんて二の次男へ言う台詞
滴れる汗で匂わす健康美
三つ目の駅で気付いた乗り違い
出雲市　落合正江

丸い輪でみんないい顔して踊る
寂しげな少年に陽が暮れかかる
つぎはぎの思い出夫婦の彩となり
指宿市　渡辺伊津志

見かけとは違って使い良い鋏
そこまでという労りの線を引く
子放れの妻寝顔にも余裕出来
島根県　高尾よし子

山里も明日晴れるらし星の数
旅の膳開く旅情の箸袋
悪口はちゃんと聞える母の耳
姫路市　人見翠記

旧姓がピッタリとくるクラス会
卑下してる言葉の裏の自慢めき
〝只今〟の声に犬の大欠伸
愛媛県　石手武

また何処かヒューズが切れた医者通い
三次会僕が肴で皿に乗る
蜜蜂のいたずらが生む花の彩
羽曳野市　天崎只士

夢を持つ風船妻に奪われる
故郷を離れぬ母がひとり住み
母さんを立ててる父が好きになる
弘前市　眞喜内實

朝の駅あんたの笑顔がありがたい
たんたんと流れて小川清い水
老化した分だけ涙もろくなり
枚方市　二宮山久

針の穴ほどのヒントに刑事もえ
疲れてる靴は横に向いたまま
幸せな暮し妻子がいる我が家
青森県　福士トキ

りんご園赤子の声も援農し
新学期一人泣く子を持て余す
眠い目を孫に叩かれ火星見る
大阪市　板東倫子

住みにくい筈が寿命は延びて行く
莫大な遺産受け継ぐ受精卵
パーティーに幼児も時計はめて来る
唐津市　筒井朴竜

信仰の踏絵に惑う小羊群
ペンキ塗り梅雨晴れを待つボート小屋
海の唐津やっと梅雨晴れ人の波
大阪市　田中節子

孫に寝られ環状線をふた廻り
坂道がきついから御利益ありそうだ

どちらでもよいから迷わぬことにする　鳥取県　福田あや子

馬鈴薯の子持可愛く手掘りする

同趣味の気安さ貰う部屋の風

浮草の模索苦しい足が伸び　岡山県　戸田種子

不況にも強い歯医者の予約ずみ

ボーナスも行革進みおくれ出し

初なりの茄子仏前で拝まれる　芦屋市　上田佳秋

本音には触れぬ慰めだってある

マンションに日を奪われる低い屋根

素うどんの注文隅っこへ座る　熊本市　北川一進

威張ってるような妊婦の歩き振り

口紅の色が変った生活向き

単身赴任枕も持たす妻の知恵　寝屋川市　立床晴風

園児にも言い分があるママの見栄

圧力のショックに耐えて行く左遷

腕前を磨くに恋が邪魔をする　今治市　野村京子

指切りは乙女に甘い余韻おく

両のポッケに夢がいっぱいはたちです

女に突然ライトあたって狂いだす　桜井市　前山美恵子

靴下の穴もにっこり笑ってる

目覚ましの冷たい音に起こされる

日曜日だけのスケッチベレー帽　西宮市　飯森泰世

急降下かもめ何かを捕えてた

球場の前は黄色が目立ちすぎ

嫁きし娘の好きなコスモス見たくない　岡山県　山本玉恵

住職が無欲で白い歯で笑う

ときめきをもう知っているイヤリング

一葉のはがきの隅に愛が住む　大阪市　稲本凡子

一日のリズム狂わす迷い犬

割勘で女同士の大ジョッキ

娘婿あまり良すぎて肩がこり　新潟県　高野不二

減反がちとゆきすぎた米不足

愛情が薄れて嫌煙権を言う

酎ハイを売るからおしん嫌われる　益田市　里本たかし

隙の無いプランを造り風邪を引く

新築の廊下の幅に父を置く

疲れている妻が背を向けて寝る　唐津市　山口重郎

憚らず貴男に抱かれ川下り

憎い口利いて二人は惚れている

悪人も共に弁当映画村
島根県　福間芳枝

百姓の段取り慈雨に濡れながら
足早な夫へ断りいいそびれ
嫁が島壊すバックのビルの彩
岡山県　矢野山人

天体を子と語り合う夜があり
雑魚同士浮世の流れそうて生き
ほほ笑みの中に凡人ひとりすみ
大阪市　田渕晴子

味しめた泥棒二度目に逮捕され
手相見に褒められチョッピリ気を良くし
番組の時間に合わせ風呂に入り
八尾市　向井しづ子

葉の先に白いしゃくやくゆれ月下
三合を炊いて夫婦と夏雀
六ヵ月元気に動くと電話あり
岸和田市　奥礼子

病人を見舞って健康かみしめる
大師さま大覚寺にもいらっしゃる
六月の萩が目をひく大覚寺
島根県　岩田三和

親子しておなじ迷惑かけました
一滴のときは宝石だった水
新宅へネコが遊びに来てこまる
西宮市　朝山千世子

漫画本閉じ口笛の子が塾へ駆け
友情が欠けそう老いの僻みが恥かしい
バスツアーの誘いにゆれて旅を恋う
大阪市　平井露芳

神棚に供えて当らぬジャンボくじ
用ないとごろごろしてる砂時計
信長も驚く人間八十年
青森県　波ただお

服装が大胆になり恋の季節
当ったらあれもこれもと宝くじ
園児にも声かけられてすがすがし
倉吉市　淡路ゆり子

母親の主観で悪書と名づけられ
逝きし子の好きな花火の渦にいる
距離おいて傷の深さを確かめる
和歌山市　森敏子

疑いが本当になっていく不安
こってりと塗って道化に耐えてみる
きき耳へ表通りが騒がしい
鳴門市　八木芳水

愛情の亀裂繕う糸さがす
人生に嬉しい涙あってよい
つまずいてから世間との対話もつ
出雲市　小白金房子

よもぎ餅そえて嬉しい里帰り
末席の方から眠い集会所

追越した車を待たす交差点
岡山県　小林妻子

不景気を超うす切で乗り切ろう
アルバムの中には若い亡母が居る
一番星民話の森のてっぺんに
高槻市　梁川吉子

雑用に追われて今日も無事にすみ
命日が又来ましたと好きな花
亡母の齢踏む度同じ苦労知る
尼崎市　鈴木良征

父の日は雨でゴロ寝の粗大ゴミ
声の欄読んで意見の違い知る
打水の風情が消える京の町
西宮市　秋元てる

仲裁へ力不足を思い知る
心もち傘傾ける癖も好き
梅雨空よ亡父の大喝ふと恋し
大阪市　堀口欣一

東京をいつも追われるように去り
年中を祇園は紅提灯をつけ
デパートは魚のアラも売っており
島根県　森山英子

遠耳の二人屈託ない笑い
晴耕雨読まだうぬぼれを持っており
さよならも言わず燕が今朝単立ち
羽曳野市　吉川寿美

二人三脚再起を誓う夫婦坂
足枷になった夫の熱三日
合鍵を返して終止符打つドラマ
米子市　大田みさと

ライバルにあくびもらって苦笑い
炎天に蟻の愚痴だけ聞こえそう
漫画でも笑いたくない理由がある
泉南市　坂根流水

旅客機で故郷の谷間さがしみる
蜆汁名物ですと朝の膳
あけの靄親子のジョギングただ見とれ
和歌山市　玉井豊太

彼と居る夜道に磁石など持たぬ
子の唱歌明るい梅雨にしてくれる
矢印がなかなか見えぬ宝島
和歌山県　森三枝子

窓ごしに新緑萌える雨あがり
熱帯夜窓の向うで蚊が飢える
お喋りが敬遠されている女
泉佐野市　大工静子

里の土地ニュースにされて海開き
晩飲んだ苦い薬が歯に残り
新しいたたみに映る軒風鈴
大阪市　松本ただし

花道は自分で作るものと知る
胃カメラ覚悟と一緒に飲まされる

年毎に階段背を向けてくる　吹田市　山田里子

ネギ刻むリズムにハミング甘い朝

こぼれ種過保護でなくて花も咲く

ブラックバス帰化改名ですしのたね　兵庫県　円増貞子

食べ頃の彩つやつやと茄子畑

だしぬけの風が勝手にドアを閉め

値段見てあきらめ元の棚におく　竹原市　石原淑子

さりげない子の手助けが嬉しくて

地蔵盆子の歓声がこだまして　羽曳野市　麻野幽玄

雲の峰へ飛び込んで行く飛行雲

やがてねむりへ誘って呉れる甘い酒　島根県　深田ふさえ

苛立ちが素直に言葉となって出る

寛大さ過ぎて犬にも手を咬まれ　田辺市　染道佳明

舟虫の孤独ガサガサ這い回り

さあやるぞ入道雲が動き出し　京都市　森川春子

親竹に負けず若竹よくしげり

風鈴を置いて鳴らぬと泣く子供　出雲市　小玉満江

再会の庫裡にあざやか山つつじ

さくら草裏街通りを明るくし　兵庫県　脇田米朝

雲つかむ話に掛ける縄梯子

保母の掌が観音様によく似てる　高知市　北川竹萌

コップ酒推測論に輪をかける

書き易いボールペン蓋見付からず　兵庫県　野々口ゆう也

美しいお世辞で踊った自惚れよ

ひとすじの道より知らぬ靴のちび　広島市　望月晴彦

あきらめの涙心の中へ降る

本棚へ希望が並ぶ受験の子　八尾市　椎尾公子

病院のパンフレットマンションに似て

昔住んだ家に昔は何もなし　岡山県　藤瀬比沙子

水蓮の月のしずくを受けて咲く

ひたすらに君を待つ夜の月見草　兵庫県　奥野テル

朝の駅皆戦いに燃えた顔

すり鉢の底にしみてる母の味　米子市　光井玲子

産声に思わず神に掌を合せ

白い根をもてあましてる水中花　橿原市　西本保夫

ボクにだけまかしっきりのミニ菜園
一日中インコに妻が話しかけ
岡山県　二宗吟平

口止めをしてから辷る口の下
裏口に廻れとここも工事中
岡山県　後安江山

燃える花おとなしい花選ぶ人
若さとは地味でも派手でもよく似合い
吹田市　西岡豊

喝采のステージなれば笑みを売る
ここまでがぎりぎりですと水着の娘
大阪市　長岡周太

スーパーで一円玉はまだお金
クーラーは来客用です老夫婦
鳥取県　松本みをき

親子でも礼儀と歩幅まもらねば
針の穴欲が手伝う手内職
守口市　岸野キミ

針山に糸の通った針並び
試合前負ける話を虎ファン
倉敷市　赤澤沢の藤

煙幕の隙間にチラリ素顔見せ
金槌の水着ファッション陽を泳ぐ
米子市　堀江純子

くらし練るリズムで朝のパンが焼け
名場面廻り舞台で作られる
島根県　田中幸里

職安の門には春の門はない
歯医者にて椅子で見ている青い空
高槻市　芦田静江

つゆ草の紫香る白い蝶
千社札八右衛門さんにある祈り
大阪市　権安達一郎

都市砂漠病院だけが満員だ
溝一つ越えて町名変り行く
大阪市　山本炉斉

デジタルを買うて秒読む閑もある
諍いが元で隣と溝が出来
兵庫県　伊沢午郎

挨拶で大きい返事かえって来
味の店みんな知ってるよう流行り
鳥取市　武田帆雀

質問のトップに女性手を挙げる
亡母の味たっぷり姉が居てくれる
西宮市　待田麻黄

石仏が教えてくれた分れ道
再婚に迷う男の子沢山
岡山県　織田照山

夕立の音だけ置いて行く暑さ
老人会バスで埋めた観光地
米子市　本吉宗光

人命の行革健保法通る

人目避けガクアジサイが色を見せ　大阪市　山脇正之

迷い犬脅えながらも威嚇する
外務員ノルマを終えて縄のれん　岡山県　池田半仙

縦に振る首に仲間という意識
繋がれた犬も欠伸の陽の永さ　高知県　小沢幸泉

けだるさを預けたままの日が暮れる
沈黙がちょっと途切れた夕の膳　八尾市　松下蕉露

客の菓子子供盗みにやって来る
たんぽぽにお伽噺が乗ってゆく　新宮市　船越正

蚊の油断血を吸い過ぎて転げ落ち
好きだった今なら言える過去の女　鳥取県　林原一尚

居眠りとテレビと暮らす不倖せ
山彦が返って来ない不安の日　岡山県　笹井小安芸

ロボットも教えて貰ってものを言い
だんらんの仲よしみんな馬鹿揃い　岡山県　秋元秋月

信頼の医師簡単にメスを持つ
紫陽花の心変りに苦い酒　岡山県　後安ふさえ

相談がまとまりにくい金の桁
二級酒にして晩酌五勺増え　八尾市　葛幸子

逢うという相手わからず駅に立つ
猫好きは一泊がけを断って　岡山県　豆原千代女

庭石の苔を他人が見てほめる
あり合せ食べて話そう腰をすえ　大阪市　松尾柳右子

島国で海の汚染にあわて出す
愚痴ばなしゲートボールにつめて振り　和歌山県　北山凡太

賽銭箱置かぬお堂は淋しかり
ちぐはぐな歩幅で歩く親子連れ　豊中市　奥田満女

黙々とりんごかじって脳を病む
梅雨明けを今日出しますと言って雨　大和高田市　岸本豊平次

草臥れた脚に踏竹買うてやり
犬養節万葉人になって聞き　東大阪市　小林勇人

川柳をなさりますかと女医が問う
矢印の先へ先へと亡母が佇つ　大和郡山市　岡田すみれ

健康を知らせてもらい味のよさ
初夏となり生き生き家族野に山に

葱坊主六十路の心争わず　大阪市　塩田新一郎

門札の痕白々と過疎の里　島根県　園山世似

菜園もライバルが出来励まされ
老人は老人らしく草を抜き　岡山県　富坂志重

ゲートボール見ている方も気が疲れ
線香のにおいにはっと座を正す　島根県　堀江百代

物干しに足長蜂が巣を作り
太陽を背中に受けて孫の守り　島根県　岩佐富子

仏さま試食なさいと初物を
すがられて今ではすがる齢になり　島根県　田中ヒデ子

拗ねた娘も教育ママで顔効かす
確信は男を大きく送り出す　大阪市　今西静子

一言がマイナスになる里自慢
面接の答は均一個性なし　大阪市　北山悟郎

先着に行ったら受付座らされ
世話好きが居るから世間円くなる　和歌山県　西村重彦

知りすぎた事情のために溝ができ
この愛を誰にあげよか迷うなあ　兵庫県　市橋茂樹

妻帰り久々食膳楽しみだ
育児に迷う事なし自信もて　大阪市　亀井円女

川柳が教えてくれた意外性
苦笑する夫横目に句をひねり　島根県　喜島ノブ

山の峰入道雲が亡夫の顔
自販機のジュースコトンと落ちて出る　唐津市　相葉あき

二万本大見栄切った菖蒲池
源平の池にも花は競い合い（鎌倉にて）　富田林市　松本今日子

良心をかくす背中で返事する
反逆の旗も立ってる誕生日

ジュニアの部

おかあさんおこってわらっていそがしい　藤井寺市　赤木奈々

夏休みおばあちゃんとこ行きたいな　枚方市　二宮摂子（中1）

宅急便早くやさしくはこんでね
店前であいきょふりまきけいきよく　ひら方市　二宮正よし

いいテレビ見ようとするとコマーシャル
見上げればきいろい月がキラキラり

59年度

路郎賞 川柳塔賞 候補作品中間発表

自 59年5月号
至 59年8月号

路郎賞候補作品

（到着順）

正本水客

桃の花霞みこの世はすべて些事　谷垣　史好
嫉妬などしない妻だと思いこみ　堀江　芳子
誰にでも似合う喪服が恐ろしい　浜本久仁於
白を黒と言い切って負けたなと思う　中川　滋雀
アスファルト転んで握るものがない　松岡　三吉
帽子掛わたし一人を取り残す　石倉芙佐子
五分五分の夫婦で日々をゆるしあう　高杉　鬼遊
孝行を少しさせて母が逝く　藤村　〆女
風はみどりただ行先は勤め先　都倉　求芽
誰が泣いてくりゅうか五木ダムになる　柴田英壬子
雑草という名の草はないんだよ　田中　正坊
ばったりと子無しに遇うて羨まれ　北野　久子
バス停で年寄りだけが待って居る　松本　忠三
引き潮に海の素顔をみてしまい　大原　葉香
山の茶屋　山の花木が活けてある　上田登志美

黒川紫香

壁かけの少女と春の夢の中　宮西　弥生
フリージア活けると彼がきっと来る　奥田みつ子
手伝ってくれる子供に手がかかり　西村かすみ
小芋煮る再婚話あれっきり　竹内すみ子
三台のテレビ孤独を深くする　堀端　三男
黙ってた父がどなって事が済み　森田　熊生
片方はとても素直な耳である　春城　年代
尤もな話へ犬も座りこみ　久家代仕男
檸檬ただようと鬼が眼をさます　林　瑞枝
ひとこまの漫画の中で箸をとる　林　荒介
骨壺の軽さにことば見つからぬ　奥山美智子
折鶴に生年月日書いてやる　西山　幸
水の旅童話をひとつずつ離す　八木　千代
弓持つと大将が狙いたくなる　野坂　なみ
とんぼ返りすれば綺麗な鈴が鳴り　矢野　佳雲

若柳潮花

親の愛つっかえ棒をみな外す　江口　度
痩せている川に河童の愚痴を聞く　春城　年代
漬物の味がしみてる母の石　栂　みどり
羽根ぶとん絆も軽くなりました　谷垣　史好
髭をそる鏡代りの指が追う　堀江　正朗
さくら散るものの哀れが多すぎる　中川　滋雀

つつましい暮しの中で光る鍋　妹尾　春枝
太陽を信用してる花時計　沢田　千春
矢車が明けゆく街をはずませる　都倉　求芽
他人にはなり切れぬ血がまたうずく　藤村　〆女
都市砂漠やさしい男が増えてゆく　小出　智子
一字ずつ伏字をたどる崖の道　八木　千代
響くのは出る杭を打つ音だろう　西山　幸
勝てるまで上役牌をかきまわし　中村ゆきを
先頭が狙われている落し穴　田中　正坊

野村　太茂津

雪月花　夫の記憶を埋めよ画布　堀江　芳子
濡れ衣を着つづけている愛もある　西山　幸
許された場所で釘が一本抜けている　坂口　公子
老いの夢どこかでプツンと切れている　柳原　静香
髪切って胸に温めた名を捨てる　松本　文子
妥協せぬ女ふわりと煙吐く　西村　早苗
謝ってすむ話なら謝らぬ　岸本　輝水
緑みどりと気易く書いてサテ緑　堀江　正朗
ひとりになるときっと転んでばかりいる　鈴木　節子
わら灰の温みは母のふところか　春城　年代
大波のあとの小波に足とられ　内海　幸生
大金に縁なさそうな寝相かな　坂部紀久子
避けようのない不運を妻と嗤い合い　藤井一二三
なに羞しや洋食箸で食い　大山　と金
泣き癖のついた男は海に出る　越村　枯梢

橘高　薫風

軍備増強素肌に毛皮着る如し　谷垣　史好
人間の証明朱肉をつけた指　高橋千万子
菜の花が咲いてる春に違いない　八木　千代
単身赴任いよいよ堅き男かな　小島　蘭幸
死ぬる迄恥かく男にて候　柳楽　鶴丸
三台のテレビ孤独を深くする　堀端　三男
ライバルの頃をお寺で語り合い　土居　耕花
ふるさとへ帰るまでがふるさとで　宮西　弥生
相槌をうってたっぷりスパイする　羽原　静歩
走らせてもらえる時の犬の目よ　西口いわゑ
折鶴に生年月日書いてやる　西山　幸
長電話女はいまも恥多き　小出　智子
いまの良さ昔の良さの差し向い　堀江　正朗
風はみどりただ行先は勤め先　都倉　求芽
あこや貝が深く抱いてる誕生日　柴田英壬子
美人論少々妻とくいちがい　白岩　文衛

川柳塔賞候補作品

高杉　鬼遊

耳栓をつめて女の輪に入る　福田　礼子
妻という安全地帯であきたらず　福井　桂香
割り切った筈をつり銭なぞ数え　藤井　高子
ロボットがそのうち酒を酌ぎにくる　田中　隆二
ウインドウに見とれて夫見失い　竹内花代子
矢面に立つと男が生き還る　月原つくし
お互いに一つ叩いて仲直り　木村貴代子
子育てを終えて再び妻になる　奥　礼子
咲く時と散る時花は何か言い　平井　露芳
今生きる事しか草は考えず　安田　志津
秋刀魚かや春夫と千代になれぬ身に　赤木　和子
どちらかを落とす秤に掛けている　立床　晴風
父の形で一升瓶が横になる　市川　鱗魚
孤独と気楽は背中合せよ爪を切る　永田　俊子
四月馬鹿いちど嫌いと言ってやる　前川千賀子

板尾　岳人

土一升金一升に犬の糞　桜井　千秀
決心のつかぬまま汽車走り出す　茂理　高代
発想が少し違うた夫婦の絵　高杉　千歩
父の形で一升瓶が横になる　市川　鱗魚
お隣の時計も十時を打った音　岩本　笑子
耳よりな話が好きなピノキオで　中原みさ子
線と点からんで回る糸車　矢野　山人
引き潮の砂一っときの空を見る　野瀬　昌子

亡母からの合図はいつも風の中　淡路ゆり子
影法師そんなに俺は冷たいか　望月　晴彦
惜しまれて去ったつもりの砂時計　西本　保夫
おでんぐつぐつ夕刊読み終り　平松かすみ
海底でつぶやく貝の意気地なし　満仲きく子
句読点打って呼吸を整える　赤木　和子
なにもかも聞いてしまったロバの耳　田中　晴子

谷垣史好

割り切った筈をつり銭なぞ数え　藤井　高子
舞いおえて笛もごろりと横になる　林　荒介
泣き事を言うから石にけつまずき　市川　鱗魚
正面に山ありゴミを焼いている　田中　叶
正論を吐けば帰りは一人ぼち　八木　芳水
スイッチヒッター女に見抜かれる　吉永伊三郎
頬ずりの痛さで父の日が終り　寺田　裕美
外人のセールスが来る春うらら　満仲きく子
子を四人並べて足の爪を切り　岩本　笑子
クラス替え岸をはなれてゆく小舟　中尾まゆみ
奔放に生きて浜辺のもろい砂　松本ただし
背の順で並んでいると安心だ　二宮　摂子
星形のこころで女病んでいる　前川千賀子
その影を蹴って溜飲下げました　赤木　和子
眠くなると犬はお寺の門にくる　森川まさお

西田柳宏子

子育てを終えて再び妻となる　奥　礼子
少年の輝く瞳信じよう　二宮　山久
一生を楷書のような人で生き　後安ふさえ
自分自身にいつも卑怯なコップ酒　神平　狂虎
糸電話楽しいことはよく聞え　落合　正江
ランドセル終生の友に出会いけり　山片　紀雄
身竜らぬ花にも蝶がきて止まる　松本　元江
塾よりも落語を聞きに行かそうか　岩田　三和
無防備にポツンと姑の椅子がある　藤井　高子
葱坊主生きる喜び知っている　満仲きく子
雑草に育って太い指の節　松本ただし
それだけの視野で見落す海の彩　後藤　正子
口下手な男の握手信じよう　福田　礼子
美しいから許されるバラの刺　岸本豊平次
お互いに一つ叩いて仲直り　木村貴代子

河内天笑

なにもかも聞いてしまったロバの耳　田中　晴子
啓蟄や軍鑑マーチ鳴り響く　笠嶋恵美子
割り切った筈をつり銭なぞ数え　藤井　高子
四月馬鹿いちど嫌いと言ってやる　前川千賀子
馬鹿になる女で幸せのがさない　大川　幸子
鮮やかに男の折目見せて退き　永田　俊子
励ましてくれるぶっきらぼうな声　後藤　正子
クラス替え岸をはなれてゆく小舟　中尾まゆみ
上品な言葉で大根値切りはる　宮崎シマ子
体当りそんな策より浮かばない　神平　狂虎
美しい水が流れて村貧し　小山　悠泉
ギャルなどと呼ばれて女軽くなる　丸山よし津
恋をしてふと耳たぶを見てしまう　中原　汲香
頬ずりの痛さで父の日が終り　寺田　裕美
ダイヤルの指が確かになった孫　玉井　豊太

日本川柳秀句集
《59年版》
頒価　一、八〇〇円
送料　三〇〇円
発行　日本川柳協会
★川柳塔社にてお取次致します。

愛染帖

橘高薫風選

長生きをして中風をさずけられ　笠岡市　木山遠二
紫陽花の庭よし簾越しぞよし
だしぬけの訃報に酒だなと思い　大阪市　小出智子
ふる里の屋根もわたしも秋近し
一番星わたしに孫ができました　青森市　工藤甲吉
夏は赫赫ああ広島や長崎や
政治家は金を幽霊から貰い　寝屋川市　堀江光子
偽りの持つ饒舌と沈黙と
見納めと思わぬ迄も白い髪　岡山県　土居耕花
老妻のギックリ腰は放っておく
耳鳴りは軍艦マーチかも知れぬ　米子市　光井玲子
人形よ勇気を出して靴を履け
嫁がせた娘の身を想う旅の屋根　米子市　雑賀美世
散り際も蝶の訪れ待っている

金的を射とめぬままに老いた弓　吹田市　井上照子
拍子木で余生をおくる幕をあけ
パラシュート太平の世の技競う　寝屋川市　岸野あやめ
去る者は疎しと言いし君も去る
この年でバイトの口がかかって来　今治市　月原宵明
裏切りのせめては雨に叩かれる
満足な顔で洗濯ものを干し　米子市　菅井とも子
一つずつ森を尋ねて日が暮れる
暦通りに来ない私の春を待つ　米子市　政岡日枝子
村八分それでもパンにはバターぬる
五人囃の一人が何故か泣いてます　弘前市　波多野五楽庵
巻雲よおまえは空のつけまつげ
かたつむり石の仏の耳で寝る　米子市　青戸田鶴
子にも早や白髪が見える別れかな
南国の花は語りぬ秘話いくつ　鳥取市　武田帆雀
金が出る自動機右手左の手
前列で聴く講演に炎えるもの　米子市　八木千代
般若面の下に優しい首がある　兵庫県　樫谷寿馬
国を憂うと日の丸青く見えてくる　島根県　小砂白汀
誰がための黄金の盃月見草　鳥取県　福田あや子
三面鏡の一つに亡母が顔を出す　岸和田市　古野ひで
鏡さえある日突然矢をむける　川西市　野村静雄
これからは息子の臑を噛んでやる　藤井寺市　赤木和子
お立ち台女を甘く見るなかれ　和歌山市　神平狂虎
ゆでたまご明日の僕を見ておくれ　近江八幡市　前川千賀子
人の心は見とうはなくて心太　羽曳野市　天崎只士
初デート母の温みを持ってくる　和歌山市　浦野和子
ブティックで聞くイエスタディ・ワンスモア　大阪市　古川美津枝
矢印へ一寸迷って見とうなる　唐津市　浜本義美
病室の晴読雨読実が入らず　広島市　望月晴彦
待つ女道路が見える窓の椅子　東大阪市　つぐもはじめ
教養がないので涼をほしいまま　島根県　新家まさる
火宅逃げ西へ向えば油照り　西宮市　津山冬子
顔を見て混んでる席をゆずられる　吹田市　西岡豊
大役の台詞を胸にタイ結ぶ　弘前市　田中叶

抱いた児の重さ落とすによい高さ　京都市　都倉　求　芽

忘れ得ぬことごと日記などいらぬ　富田林市　藤田　泰子

今すぐに会えそうな声カナダから　高知県　赤川　菊野

頂上の風の怖さを知ってるか　和歌山市　西山　幸

泣き終えておもい直してメロン切る　松原市　佐藤　藤子

四等分して四つのリンゴの朱　大阪市　北　勝美

鳳仙花はじけ片鱗のぞかせる　羽曳野市　麻野　幽玄

買物の最後はいつも寄る花屋　大阪市　市場　没食子

親からのこなから桝で老夫婦　米子市　塀江　純子

ラブレター郵便箱が頬を染め　和歌山市　中尾　まゆみ

図書館へ晶子のほのお買いにゆく　和歌山市　松原　寿子

赦されぬ人へむらさき深くする　島根県　堀江　芳子

泣き虫のせいかも知れぬ梅雨しとど　唐津市　久保　正敏

天分が場末に朽ちるコネが無い　富田林市　岩田　美代

遠い人想えば雲が動き出す　島根県　板垣　夢酔

不仕合せな話し方が喜ばれ　西宮市　松本　一郎

知識欲孫との散歩疲れます　大阪市　川原　章久

哺乳時の母と児の目にテレパシー　島根県　松本　みをき

句はたのし老いの落書灯があかい　徳島県　八木　芳水

煮込むほど母に近づくカレーの味　鳥取県　林　露杖

古傷が泡をたてる熱帯夜　弘前市　真喜内　實

あっと気がついた時にはお祖父さん　鳥取県　林　瑞枝

曼陀羅に父の似顔をひとつ置く　名古屋市　越村　枯梢

終章のドラマを飾る釘の音　和歌山市　玉井　豊太

ふるさとの団扇に今も子守唄　高槻市　笠嶋　恵美子

名画展話しかけてる裸婦の前　寝屋川市　川口　弘生

お祭へ疼く小指をもっている　今治市　野村　京子

追求の視線下からはい上がり　和泉市　岡井　やすお

大学の野球は高校ほど持てず　守口市　結城　君子

梅雨だから手拭の色変えてみる　米子市　野坂　なみ

前身は問うまい白い蝶だから　尼崎市　春城　武庫坊

腰抜けの風が好かれるしゃぼん玉　羽曳野市　吉川　寿美

連れ添うてこくが出て来た飯茶碗　島根県　福間　芳枝

爆笑の隙間を一人抜けてくる　鳥取県　奥谷　弘朗

シベリヤの話となるとドラマめき　岡山県　岩道　博友

披露宴此処も同じ司会する　尼崎市　春城　年代

ぽっかりとからだを空ける旅に出る　岸和田市　清野　こう

バスツアー嫁に疲れたとは言えず　富田林市　植松　慶子

この汗は輪のつながりを生んでいる　大阪市　西森　花村

眼が覚めりゃ腹が減ってる青年期　岡山市　井上　柳五郎

ため息が史跡残照から洩れる　和歌山県　天満　三千代

自己紹介背伸びの足もみえている　今治市　月原　つくし

北ばかり向いた磁石をそそのかす　豊中市　田中　正坊

梅雨晴間淀川の水満々と　米子市　寺沢　みどり

手作りの籠に活けたい花があり　岡山市　川端　柳子

照る照るぼうず青葉雫に染まりそう　島根県　榊原　秀子

ほたるぶくろと昔をしばらく遊ぶ土手

西宮市　奥田　みつ子
山の家銀河のように虫が鳴く

米子市　沢田　千春
貝の中故郷の海が鳴りやまぬ

寝屋川市　柴田　英壬子
高原の土地売出しを見るあつさ

島根県　堀江　正朗
拭き艶に木目は生いたち語りかけ

島根県　木村　はじめ
なにか一口言いたげそうな睨み鯛

西宮市　山片　紀雄
救急車夜のしじまが動いてる

豊中市　上田　登志実
賛成はしたいが党議無視されず

大阪市　江城　修史
裏切りへ笑顔は別に取ってある

唐津市　田口　虹汀
少年は童話の姫を忘れない

兵庫県　脇田　米朝
自画像の惜しむらくは若き哉

西宮市　草刈　堕駄
夏草の心のままに茂りたる

寝屋川市　平松　かすみ
おしゃべりが拗ねて一日長いこと

羽曳野市　中村　優
死角からライトを当ててくる他人

島根県　佐々木　裕
泰平に七転八起の軸が無い

吹田市　栗谷　春子
夏の日に俯いて咲く花静か

高槻市　梁川　吉子
嫁した娘がのし紙つけてくる土産

大阪市　松尾　柳右子
ふる里でシティ感覚落ち着けず

吹田市　茂見　よ志子
味わいの深い言葉を師にもらう

笠岡市　松本　忠三
ゆさぶりへ浮いてきたのは雑魚ばかり

高知県　山下　登舟
老い先の事の話は夜の床

八尾市　松下　蕉露
サラ金に借りに来る主婦貸した主婦

山口県　高崎　雀声
踏む砂利の音亡き父の声のする

唐津市　仁部　四郎
警官が二人覗けぬ立ち話

唐津市　木塚　素石
旅立ちに励ましくれた空の青

唐津市　山口　高明
怖ろしや神域荒らす管ベビー

尼崎市　鈴木　良征
血統より雑種が占める学者犬

西条市　片上　明水
作法などなし串カツはかぶりつく

奈良市　森田　カズエ
悠々と孫はソファーで漫画よむ

仙台市　川村　映輝
バスの中一万円札がうろうろし

大阪市　上江洌　勝子
夢荷なう笹のたわわに星まつり

大阪市　上田　かつみ
苔寺の苔さまざまな顔を見せ

平田市　久家　代仕男
見え見えのお世辞を逃げるシャボン玉

高知市　北川　竹萌
吸い込まれそうな青空梅雨明ける

大阪市　稲本　凡子
後半生淡いピンクに塗り賛える

鳥取県　松本　文子
干からびた夫婦情けの雨を待つ

岡山県　山本　玉恵
好きな人の中でばあちゃん三番目

寝屋川市　宮尾　あいき
早起きの分を昼寝でカバー

★

投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13—15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題　「計算」選者　**森中恵美子**
締切　**9月10日**
（ハガキに三句以内）

投句先　大阪市東区馬場町3—43NHK
大阪放送局〝さわやか広場〟係

発表　9月23日（日）ラジオ第一放送
午前11時5分から

詩と革命と活山水

—中国吟行の旅に寄せて—

東　野　大　八

蘇　州

月落烏啼霜満天　江楓漁火対愁眠
姑蘇城外寒山寺　夜半鐘声到客船

この詩の題名は「楓橋夜泊」作者は中唐の詩人張継。この詩ほどわが国民に親しまれている中国詩は他にあるまい。同時にこれほど異説のある詩も少ない。つまりこの詩意は、明け方の景色であるか、それとも夜半の景色であるのか。また「烏啼」は山名で、夜半は鐘銘であるとの解釈と、詩文の形容詞であるとの論争もある。

とにかくこの拓本が、麻生路郎先生の万代西五の御宅の座敷に屏風に表装されていたのをよく記憶しているだけに懐しい。

蘇州は春秋時代の昔、呉王夫差が築いた姑蘇台をめぐる呉越興亡のドラマの舞台としてよく知られ、唐の李白の「蘇台覧古」の詩がある。また唐詩選の白眉・白居易が蘇州の刺史として在任し名詩幾篇かをものし、さらに唐詩選の常連常建や王維も世に知られた蘇州賛歌を幾つも詠じている。

われわれにはこの中国詩と別に馴染み深いのは、戦前のヒット曲「支那の夜」に〝夢の蘇州の灯ともしごろは…〟と往時の売れっ子渡辺はま子が気分を出してうたっているのが忘れられない。私がこの蘇州を訪れたのは四十年余も昔で、川柳の花を楊花と教えられたのは風光明媚なこの水郷の苫舟の中であった。

上　海

昭和十五年春、私は月刊満州記者として蘇州・南京・上海方面に特派されて、太平洋戦争前夜の風雲急な国際都市上海のルポを書いたことがある。日中友好の大恩人と戦後まで知られた内山完造先生から、そのルポのエキスを教示され、堂々10頁分の大原稿?を苦心惨胆して仕上げたものの、上海の軍当局の検閲でたった二頁分に削られガックリしたものである。

この窮状を救ってくれたのは南京にいた草野心平先生だった。当時この人は南京政府弘報処にいて、満州国の協和会の制服みたいな青い軍服を着て威張っていられた。この心平先生のアドバイスで、どうやら私のルポ〝上海〟8頁分が出来上ったものだ。ただし8頁分といっても半分が軍検閲のため絵ハガキみたいな風景写真ばかりだった。

この上海といえば、私の川柳の大先輩中野柳陽さんを想い出す。柳陽さんがまだ二十代の美丈夫時代、中国革命の孫文の片腕といわれた陳貴美と肝胆相てらし、内地から亀甲爆弾の搬入を頼まれ、同志数名と必死の運搬作業に当ったものだという。

「軍資金はたんまりある。カネが要るならいつでもいってくれと陳さんがいうので、カネのために働いているんじゃない。中国革命成功のためならこんな生命ぐらい、いつでもタダでさしあげる、といったら陳さん、涙を流して感激してね、その握りあった時の熱い掌を今もわしはハッキリと覚えている」

と柳陽さんが私に語った男らしいその貌を今も私は忘れられない。この柳陽さんもさる六月鬼籍に入られ「川柳人」でのその追悼記にこのことはすでに記した。

この熱血の川柳人柳陽の手を握りしめて泣いた好漢陳貴美は、仲間の裏切りで皮肉にも柳陽さんの運んだ爆弾により上海ガーデンブリッジの橋上で壮烈な死を遂げたのである。

上海・南京には若き私の青春のドラマが幾つもある。しかしこんな挿話は、塔の吟行の際の旅中談にとっておいた方が退屈しないですみそうなので割愛する。

とにかくガーデンブリッジから眺めた、国際埠頭を彩る花籠のような列国の旗・旗・旗の偉観は古希の私の瞼にへんぽんと今もひるがえっている。岡晴夫おはこの〝上海の花売娘〟のその忙しいメロディのなかでも、この万国旗は研を競いつづけている。

桂林

昭和30年ごろ、文芸春秋の講演旅行の一員に加わっていた檀一雄と岐阜の一流旗亭万松館で二十余年ぶりの再会を果した。

双方すし湯呑に冷酒を充たしての豪酒放談の中で、私が片腕を落していることに撫然としたあと彼は、こんな話をした。

「従軍作家でな大八よ、行ったところはどこだと思う？　桂林だよ。このヤケに風景天下一の街を彩っているのが漓江っていう大河でね。まあその凄絶なまでの活山水の天地を眺めているとだね、戦争なんてことがバカらしくって仕様がねえんだ。従軍記者でありながら一行のルポも書かなんだのはオレだけだが、そのイヤ気を起したところが漓江の風というわけよ」

こういって一息ついた彼は、傍らにいた女流作家真杉静枝をジロリと眺めて

「桂林付近の山々ときたらなあ、ありゃ土製の煙突みてえで、太くでっかくて中天に競いあってつっ立ってんだな。おれは咄嗟にこう叫んだものだ、こりゃ勃起した男根の林だとな。男根…わかりますかい真杉さんよ」

まだ色気充分の大年増の真杉静枝、そこは海千山千の女流である。ニタニタする檀へ

「マア素敵！　素裸でとび込みたいワヨ」

少し白けた檀は索然とこうつぶやき、すし湯呑の酒を一気に呷ったものだ。

「ああなると、生臭くっていけねえよ」

その時の白せきの美男子檀も今は亡い。

漓江下りの終点は、陽朔（ようさく）である。伝説によれば秦の始皇帝が天下を統一した際、東海にいた山羊の群れを追いたてたが、陽朔までくるとどうしたことか一歩も進もうとしないので、神のムチを一打ちすると、そのまま山羊はその場で山に変ってしまったという。

川柳人の画家藤原みていにいわせると、こうだ。一言明快つぎの通り。

「北京だって中国旅行のメじゃないね。中国へ行くなら桂林・漓江にとどめを刺すよ」

「漢　詩」

―古い中国詩

田中正坊

新しい中国詩―漢俳を本誌四月号で紹介しましたので、今回は古い中国詩―漢詩についてふれてみたいと思います。というのは、漢詩は古今の日本文学に大きな影響をおよぼしただけではなく、わが国固有の定形詩とされる短歌・俳句・川柳も、文化史的には漢詩を源流としていると考えられるからです。

また、漢詩そのものも古くから日本人に親しまれ、奈良時代にはわが国最初の漢詩集である『懐風藻』が編まれています。それから平安・鎌倉・江戸時代を経て明治・大正にうけつがれ、鷗外・漱石・子規もすぐれた漢詩をつくり、大正天皇も多くの作品をのこされています。

最近では、田中角栄氏が首相在職中、国交回復のため訪中した時、〝漢詩〟をつくって話題となりました。

国交途絶幾星霜　修交再開秋将到
隣人眼温吾人迎　北京空晴秋気深

しかし、これは漢詩ふうに漢字をならべただけのもので、彼自身の無教養をさらけだしたばかりでなく、現代の日本人に漢詩についての知識がうしなわれてしまったことをも示しています。

漢詩とは、中国語の発音にもとづいて、きまった規則にしたがって漢字をならべたもので、五言とか七言とか字数だけを合わせればいいというものではありません。押韻（おういん）、平仄（ひょうそく）をふまえることが絶対条件で、この小文ではとても書きつくせませんので、興味のある方は入谷仙介『漢詩入門』（日中出版）などの解説書をお読みください。

したがって厳密に言えば、その規則をマスターしなければ、漢詩をつくることはもとより、漢詩を正しく理解し、鑑賞することもできないわけですが、日中文化交流二千年の歴史から、漢字・漢語が日本語の中にとけこんでいますし、古代中国語である漢文を読解するために、私たちの先人は「返り点」「送り仮名」という便利なものを発明しています。

これらをフルに活用し、漢和辞典を座右におけば、たいていの漢詩を読みこなすことができますし、多くのすぐれた訳詩もあり、李白・杜甫をはじめすばらしい詩人を輩出した漢詩の黄金時代に編まれた『唐詩選』など、世界的にも貴重で豊富な詩の宝庫の扉をひらくことができるでしょう。

すぐれた訳詩と言うと、佐藤春夫の支那歴朝名媛詩鈔『車塵集』があります。

勧君莫惜金縷衣　勧君須少年時
花開堪折直須折　莫待無花折枝

これは、その巻頭に掲げられた詩ですが、彼はそれをつぎのように訳しています。

綾にしき何をか惜しむ
惜しめただ君若き日を
いざや折れ花よかりせば
ためらはば折りて花なし

全くうなりたくなるような名訳ではありませんか。ついでに九月に川柳塔社の有志が訪れることになっている蘇州の風光を詠んだ張継の「楓橋夜泊」を紹介しておきましょう。

月落烏啼霜満天　江楓漁火対愁眠
姑蘇城外寒山寺　夜半鐘声到客船

有名な詩ですから、あえて訳出するまでもないと思います。手ごろな漢詩の本としては、岩波新書（青版）に吉川幸次郎・三好達治『新唐詩選』『新唐詩選続編』、片山哲『白楽天』がありますからご一読をおすすめします。

十郎ファミリーの温かさ

―句集「みかん船」に寄せて

野村太茂津

真っ先に手にしたときの感触は、十郎ファミリーの「温かい」の一語に尽きる。

そして表紙の深い黒潮の海の彩に浮かぶ金文字「美かん船」は、我が川柳塔社主幹西尾栞先生の麗筆で輝いている。

表紙の裏には、有名な日本画家・坂東青樹画伯が紀南独特のタッチで、黒潮に乗り出す満帆の「蜜柑船」が描かれている。これは割箸を削って画かれたそうである。

序文は我が社主幹西尾栞、同編集長橘高薫風両先生の麗筆で飾られていてうれしい。

著者大矢十郎氏の生れた新宮市は、紀伊半島の潮岬から北東へ約四十粁、熊野川の河口で太平洋に面して発達した町である。

江戸時代には紀州藩の家老水野家三万五千石の城下町として、十代二百五十年にわたって栄えた丹鶴城が、熊野川に臨む小山の上に石塁が残っているが、ここから眺める風光はまさに絶景というより外に言葉がない。

市の中央部には秦の始皇帝の命令で不老不死の霊薬を求めてたどりついた「除福の墓」があり、新宮駅前には有名な小学唱歌「ハトポッポ」の童謡碑がある。当市出身の「東くめ」の日本初の口語体の歌詞である。

〝浮島の森〟は町中央部にあり、文字通り沼地に浮いている。

紀南の人は進取の気性と野望を合わせ持つこんな風土環境で育った十郎である。

橘高薫風編集長から書評を書けとのご指名を受けて〝ハタと困った〟が本音である。

それは、私も十郎ファミリーの中に居るつもりだからだ。第三者の位置で外から見なければ、と自分に言い聞かせながら原稿紙に向かっても、いつの間にか、十郎一家に惹き込まれてしまう。

「跋」も書かせていただいたから、今更なにを書評をという思いが台頭してきて、又々ペンが前に進まない。

そんな思いでこの書評に挑んでいる。

目次にあるとおり、大矢十郎の世界から始まって、巻末の「著者柳歴」に至るまで、どの頁を開いても惹きこまれるほど、川上大輪氏の心の行き届いた編集には感激させられる。

十郎氏が力説しているとおり「句集は読んで貰わねばなりません。読ませる句集でなければなりません」たしかに「みかん船」は読ませる句集であり楽しい句集である。

私をよろこばせる頁は八十八頁だ。六人の子宝を育て上げた、まさ子夫人の「夫・十郎」そして更に二百四十八頁だ。これは並の子賞めではない。長男喜一氏をなんの衒いもなく「男の子は王将」に書いてある。

八十一頁の「私の好きな父の句」、長女富子さんから、五女みち子さんまで、一致して好きな句が重なったであろう。編集の大輪氏がそれを調整するのに苦労されたことと思う。

うれしいことに、それでも重なっている。

その汗を拭けと信号赤となる

道で逢う妻は昔の顔をする

除夜の鐘小さい順に寝てしまい

十郎一家の愛情の団結を表現しているのは

貧しくはないぞ朝昼晩を食べ

国ならば我が家は発展途上国

そして「ファミリー小句集」二百二十七頁

である。羨ましき哉、子宝たちの川柳集。小生などは三人の子があり、孫六人も居ながら誰一人として、川柳に関心はあっても、川柳を学ぼうともしない。これは古稀になる私の愚痴である。十郎さんはまだ還暦、次の古稀の祝の第二句集をまさ子夫人の内助と共に発刊されるよう心待ちにしている。

とまれ我が愛する「みかん船」は読ませる句集である。十郎川柳の鑑賞は読者各位にお委せして私の書評とする。

大矢十郎句集「みかん船」編集に当って

川上大輪

句会追い廻す余生へ夢を持つ　十郎

一生に一度ぐらいは自分の句集を作ってみたい、という夢は柳人なら誰しも持っていることと思う。

父の還暦祝いに子供達で何か記念になる物を贈ろうという事になった時、真っ先に句集上梓の意見が出た。父への贈り物としてはこれが最高のもので、これ以上の物は無いだろうという事で相談がまとまり、企画・編集・構成等すべてを私に一任するという大役が廻ってきた。折角句集にするのだから今までにないユニークなものを……と張り切ってみたが、仲々妙案が浮かばない。とりあえず川柳塔誌他、各柳誌より約三千句を拾い出し、富子と二人でさらにその中から約三百句を抽出した。さてこれらの句をどのように分類していったら良いのか、思いつくままに年代順、五十音順、テーマ別等色々な分類を試みたが、川柳に初めて接する方にも判りやすいようにテーマ別に分類し、各ページの上にもテーマを入れてみた。句割りについても秀句に選ばれたものや、私の好きな句は鑑賞しやすいように一ページに一句とし、他のページについては出来るだけ左右のページが同じ句数になるよう（右の偶数ページが三句なら、左の奇数ページも三句に）揃えてみた。

妻と子の話の外にいる平和

「平和」がよく生かされており、家族の中での父の位置づけがよく現われ、大矢ファミリーの和やかな生活の一面を如実に促えている句であり、

結納へ覚悟は違う父と母

では娘を持つ父親の気持が素直に表現されており、

二度訪えばくず籠にある我が名刺

終りまで聞かず金ならないという

税務署が少し笑えば倍笑い

といった日常生活の中で、ともすれば見逃しやすい一面を鋭く捉え、これらを独特のユーモアで表現している手腕は見事なものであり、敢えて一ページに一句とした。

句の漫画化については柳人の間でも賛否両論があるが、初心者にも馴染みやすいようにまた句集を読んでいただく方々にも中休みの意味で掲載してみた。その他、句集を引き締めるため各ページの天地にラインを入れ、感覚的にスッキリさせたつもりである。

大矢十郎作品はすべてに「ゆとり」が感じられる。このゆとりはすべてのものを包括するあたたかい心と、人や物を見る目の適確さ洗練された表現力によって生み出されるものと思われるが、句集全体を通して大矢十郎の人間像とその周辺の温かさにも触れながら大矢十郎の世界をまとめてみたつもりである。何分にも初めての試みであり、一人よがりな面も多々ある事と思いますが、諸先輩方のご高見を賜わり、第二集への課題としたいと思っております。構成・編集の面でお気付きの点がございましたら何卒よろしくお願い申し上げます。

迷う

野呂鵜汀選

ゆっくりと迷いがさめた団扇風　テルミ
夢多き女へ続く迷い道　達子
迷い犬脅えながらも威嚇する　正之
三面鏡妻のおしゃれがまだ迷う　洛酔
どん底に落ちて迷いがふっきれる　狸村
末席に迷うこと無い苦労人　与呂志
進学へ神を迷わすような絵馬　冬子
バーゲンに心取られて子は迷子　章々
スピーカー迷い児がいる特価市　芳子
産むうまぬ決め兼ねている三人目　軒太楼
再婚に迷う男の子沢山　麻黄
迷わずにアダムは青い実を食べる　雄々
妻の留守迷うた末の茶漬喰う　つくし
方円の器の水に迷わされ　一尚
犬の皿のぞき込んでる迷い猫　八重
もう迷う程の時間はなさ過ぎる　妻子
熟年も大いに迷う時がある　あやめ
雑兵が寄れば本音でまた迷い　優
迷うたあげくに生んだ子と知らず　不二
密偵も迷う祇園の内蔵助　高明
どの辺で切ろうと迷う長電話　佳雲
六道の辻で迷うている亡者　七面山
一瞬の迷い勝負に負けている　裕
迷うだけ迷って元の位置が良い　悟郎
わかれ道戻れぬ方を振りかえる　まさる
結論の出ぬまま座禅刻が過ぎ　右近
実にいい笑顔で心迷わせる　歌子
成るようにしか成らぬと知ってなお迷う　凡太
迷い箸孫の行儀をたしなめる　サワ子
迷子札孫と祖父との胸につけ　よ志子
髪長く区別に迷う露天風呂　みをき
老いらくの恋に迷うた琴の爪　玉恵
魔がさした迷いに親も裁かれる　文子
迷わせておいて他人の顔でいる　笑風
夜の蝶たまには迷うこともある　円女
姑が迷うと仏間に膝を折る　文平
国立か私立か贅沢な迷い　重人
レストラン迷ったわりにうまくない　貴代子
あれこれと迷い夫にだけ保険　寿馬
黙ってる妻の視線へまた迷い　可住
佳
いかんせん弦を離れた矢が迷い　本蔭棒
若い恋迷わず水の輪投げかける　はつ絵
何時何処でどう迷うたか獄の中　七面山
迷うてて後一と押しを待つ女　ゆう也
四ツ角で迷うことなく白い杖　勝美
人
迷いから醒めると妻が美しい　三吉
地
名僧も迷うた果ての緋の衣　正敏
天
子の星よ母が手を打つ方へ来い　久仁於
軸
迷わずに生れた川を鮭のぼる

得意

舟木与根一選

お得意の和裁でひとりの城守り　ひで
ヒロインの得意を叱る視聴率　赤木和子
梅干も漬けて得意の京茶漬　〆女
カラオケとなって寡黙が堰を切り　どんたく
お得意さんを大事に守る小商い　悠泉
ヒット曲無いが物真似得意なり　まさる
手加減と知らず碁盤へ得意顔　正朗
愛嬌で得意が増える嫁貰う　里風
得意先上中下と区分けされ　軒太楼
カンツメの料理得意な短大出　四郎
得意ではない料理だが愛をこめ　たず子
お得意が減るからグリコ隠しとく　耕花
よく似合う服で得意が顔に出る　弘朗
陽のあたる地位にいるのか得意面　良征
得意様係がのぞく胸の底　雄々
米櫃の中を知ってる得意先　三五島
亀を得意がらせた兎の軽い意図　多賀子
肩書をズラリ得意になる名刺　寿美
訃が続き得意のジョーク出てこない　はつ絵
突張りが得意手先となる運命　吟平
数学が得意で虚弱案じられ　仁於
小男が得意の技で背負い投げ　幸一
満面の得意が落ちる穴がある　本蔭棒

学歴と別に得意のわざに生き　晴彦
得意げなピアノ隣をいら立たせ　千秀
培った得意で揺るがぬ老舗の灯　右近
得意技一つ持ってる床柱　可住
にこやかな笑顔が得意悪女です　重人
得意球狙ってエース崩してく　やすお
代役はお酒の方が得意です　はじめ
得意絶頂　鼻も天井向きたがる　枯梢
算数が得意で肥えた聴診器　公一
知恵の輪が抜けて得意な孫の顔　麻黄
お得意が減って過疎地の灯が暗い　妻子
得意顔黙って聞いてやる蛙　規不風
居眠りが得意でバッジ泣いてます　かすみ
英会話と詩吟得意な女秘書　景子
子育てが得意だったと老母笑う　カズエ
得意先出れば笑顔が消えている　堕駄
木登りが得意な猿でよく落ちる　虹汀
佳

虎造が得意でいつも終い風呂　優
綱渡り得意で足が地につかぬ　満津子
雑兵の得意な足は逃げるだけ　与呂志
得意先の犬にご機嫌とられる　武水
眼を入れてダルマ得意にしゃべり出す　京子
人

お得意を回る総理に核の傘　豊太
地

失敗も得意もピエロ同じ顔　宵明
天

負けてやる子供の得意わざだから　寿馬
軸

うっちゃりが得意で強い運を持つ

溝

浦野和子選

倖せな鯉が津和野の溝で跳ね　正敏
風向きで変わる姑との溝の幅　寿美
本能寺の溝越えて来た反逆者　達一郎
余剰米育てる水とは溝知らず　千秀
溝一つへだて仲良いおつき合い　玉恵
口下手の本音が溝を深くする　キミ
行政はここまで来ない泥の溝　笑風
巨人阪神わが家の溝はたわいなし　新一郎
裏話溝の深さを思わせる　静歩
溝に住む鬼へ鼓動は伝えない　雄々
溝一つ境にビルの建つ噂　カズエ
五輪旗へ米ソの溝はまだ続く　美穂
言いわけをするから溝が深くなる　つた子
満点の嫁と姑とで溝が出来　秀峰
枝豆とビールで浅い溝埋める　武庫坊
子育てが終った夫婦溝を掘る　寿馬
日記帖このあたりから溝の跡　規不風
一線の溝を保って嫁姑　道子
正論を吐いて上司とできた溝　山久
ふるさとの溝が恋しい蜆貝　木魚
一本の溝が明暗分ける道　狸村
法律が今の二人に邪魔な溝　克子
溝埋めるムードにさせた星月夜　豊太
掘り返えす溝に田植の水走る　つくし
ふるさとの溝に小蟹が住む安堵　右近
こそこそと耳から耳へ溝を掘る　正朗
境界線ご先祖からの深い溝　芳子
どぶねずみ溝の抜け道知っている　里風
女対女に渡れぬ溝が出来〆　女
裏付けの証拠を捜す溝浚い　代仕男
埋めきれぬ溝に妥協の蓋をする　多賀子
にぎやかにささ蟹さがす溝の声　天彦
溝掘ったその手で握手求められ　宵明
有頂天の足もとにある深い溝　志津
後列に座って溝を意識する　明水
溝を掘るこころ貧しく溝を掘る　枯梢
貴重品落して溝の深さ知り　満津子
佳

跳び越えて見れば案外楽な溝　よし津
生き抜いた女の跨いだ溝の数　与呂志
さしのべた手が届かない溝の中　忠三
ひと粒の砂へ雨戸が焦れている　公子
どぶ板が昔むかしを言いたがる　赤木和子
人

とり返しつかぬ溝だと悔いている　年代
地

跨いだら渡れる溝が邪魔をする　荒介
天

運命にもう逆らわぬ溝の水　重人
軸

節曲げぬ溝に哀しい貌がある

初歩教室

題 ― 追う ―

本田恵二朗

長客も追うにも掃除機間に合わず　正
（長尻を追っぱらう箒が役立たず）
追いかける同じ距離だけ逃げる女　てる
（追っかけると同じ距離だけ女逃げ）
生命がけ夢を追う男を恕す妻　同
（命がけ夢追う夫を許す妻）
とんぼ追う夕焼空を引きのばし　豊太
川さかな追うて机に出る欠伸　同
（川魚を追いくたぶれた勉強部屋）
ランドセルまで偏差値が追うてくる　幸泉
山の日を追いかけながら子が帰る　同
（落ちる陽を追っかけながら子が戻る）
うちの孫勉強そこのけ虫を追う　千代女
（宿題はそこのけ虫追う孫の夏）
追う人の苦労知ってる記録表　山久
幸せを追った昔の夢にあう　同
（幸せを追ったあの頃夢に浮き）

追い追いと出す条件に居直られ　忠広
（追い撃ちのような条件に居直られ）
追い縋り一緒になって知る苦労　同
追っ手さえつかぬ悲しい負け犬で　美津子
（負け犬のあわれ追っ手も振り向かず）
追い風に背いて力む男が好き　同
（追い風に背く男の意気に惚れ）
追い越して仲良し一人敵にする　歌子
輪になってゆかた姿がリズム追う　同
（ゆかたの輪大きくリズムを追って舞う）
レオタード健康食で若さ追い　あや子
（健康食あれやこれやと若さ追い）
追われてる立場になれぬ楽天家　同
大物のあと追うように訃が続き　サワ子
子のあとを追えずジョギング齢を知る　同
（ジョギング子に追いつけずわれも老い）
牡鹿追い山に踏み込み虎に会う　みつる
猟犬のように事件を記者が追う　同
（事件記者猟犬みたいに追い廻す）
とんぼ追う網から洩れる童唄　小愛
年金の暮し追い打つ物価高　同
（物価高に年金暮し追い打たれ）
子の寝顔家業に追いかけられる日々　よし津
（子の寝息家事に追われた今日終る）
逃げてゆく風船追って覚めぬ夢　同
（七色の風船を追う夢を追う）

第18回東大阪市文化祭参加
第12回 市民川柳大会

日時 昭和59年9月30日（日）正午開場
会場 東大阪市立社会教育センター
3階（近鉄布施駅北へ5分）
おはなし 亀山恭太
兼題 ペン　大路美幸選
オンナ　荻田千代三選
逆　久保田寿界選
月　住田英比古選
御曹子　堀江としを選
毬　森中恵美子選
一つ　橘高薫風選
席題 当日一題　井関滋啓選
出句は出席者に限る。
各題2句
賞 各題秀吟賞（賞状・盾）
会費 千円
主催　東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会

去るは追わず黙りこくって老い二人　ちよ
（去る者は追わず黙々老い二人）
空元気二兎三兎追い身を破滅　同
（二兎を追い三兎を追って悔い残り）
逃げる君追えば私の負けになる　克子
トンボ追うああ故郷は遠かりき　同
（トンボ追った里の小径の草いきれ）
坂道を後追う孫に励まされ　梨郷
（六十路坂後追う孫に励まされ）
給料日追われるローンを先ず払い　同
（給料日ローンまっ先きに追ってくる）
デカもまた追われる者も命賭け　芳水
青い鳥求めて追って年を寄せ　同
（青い鳥追っかけ追っかけ老けにけり）
小魚追う童たくまし目がきれい　勝美
（メダカ追うわらべの瞳澄んでいる）
牛を追う牧場たそがれ詩になる　同
（牛を追うたそがれの牧場詩になる）
老い淋しくらしのテンポに追いつけず　照子
花畠追いつ追われつ蝶うたう　同
（花畠追いつ追われつ蝶が縫う）
ワイドショー今日も追ってるロス疑惑　吉子
青い鳥追うてる頃が花でした　同
（青い鳥追ってた頃が花だった）
満ち足りた過去は追わない寡婦の意地　芳枝
追越しをさせて余生はマイペース　同
鶏を追うように幼児についてゆく　やすお
追って来てサッと抜いてくチャンピオン　同
引きはなされてもエリートを追うさだめ　保夫
理性もう失いサラ金には追われ　同
影法師よ追ってくるなよ気ぜわしい　キミ
忘れ物またかとばかり後を追い　同
追う方も元同僚に気が滅入り　章久
新曲を追う大正のハーモニカ　同
二兎を追う苦境へ辛い義理がある　武水
追う人も追われる人も走馬灯　同
追うもよし追われるもよし道果てず　實
人を追う姿勢に人が付いて来る　同
追いかけるように年子の呱々の声　兼次郎
特急に各停どこかで追い抜かれ　同
陽と月が追いかけ合って昼と夜　同
頬つたう涙が背を追いかける　寿子
夢を追うおんなで夢に犯される　同
うるむ瞳で追うむらさきに棲む人よ　同
休暇ごと解禁追って釣三昧　久子
夢だけを追って末っ子楽しそう　同
追うほどでなかったなどと後日談　同
何かに追われ何かを追って生きている　紀久子
追ってくる愛を意識して逃げる　同
化学追い自然のエキス忘れはて　同
過信した自分に追われている焦り　同

題―**好意―9月10日締切**（11月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
〒七一一　**本田恵二朗**

川柳塔社常任理事会（8月1日）

出席者＝栞・薫風・形水・水客・太茂津・敏紫香・与呂志・鬼遊・万的・柳宏子・重人・凡九郎・庸佑・岳人・笛生・寿馬・史好

〈議事並に報告事項〉

▽10月7日の同人総会は昨年同様、会計報告は鬼遊氏、事業経過報告は寿馬氏が担当。本年は役員改選の年に当り、9月の常任理事会において検討する。
▽弓削川柳大会（9月2日）、川柳まつえ復刊15年記念川柳大会（10月14日）本社から応援の件。
▽新家まさる氏（鳥取県）の同人推薦を承認。

■**9月**の常任理事会は**3日**（月）

柳界展望

集録・板尾岳人

★西尾栞主幹を団長に東野大八氏をはじめ男性12名、八木千代さんをはじめ女性12名、計24名の一行は9月24日から29日まで中国吟行旅行を楽しむわけだが、川柳塔還暦記念行事の一環なので、多大の収獲のあるよう期待されている。

★川柳わかやま吟行（一泊）
日・9月8日（土）2時半
和歌山市駅前集合
所・加太国民休暇村深山荘
兼題
読　書　妹尾　春江選
泡　伊藤　春子選
インテリ　寺田　裕美選
9月9日（日）AM9時出発
淡島神社参拝後自由解散
投句・申込み野村太茂津宛

★ふあうすと川柳社名誉会長・増井不二也氏は入院加療中でありましたが、7月14日午後9時25分逝去されました。行年七十九歳。薫風副主幹が川柳塔本社代表として霊前に合掌された。

★全盲作家の湊　繁治氏がこのたび句集「白い杖」を発刊された。氏は富山県氷見市に在し昭和53年より氷見川柳会に入会、現在各数社の会員として名を連ね川柳活動に活躍され、天性の明るさに作品も好感の持てる句が多く、感性の豊かさ、語らいの豊かさが沁み出る句集だ。

★宮口笛生氏（奈良県）は59年9月号より国鉄川柳の川柳教室を担当されることになった。

★定金冬二作品集〈無双〉
発刊川柳大会
日・12月2日（日）
所・大阪府立労働センター
六階大会議室（京阪・地下鉄天満橋駅西へ）
題と選者は10月号にて

▽**お便り**△

■河村日満氏の追悼句会は11月18日と決定準備に取り組んでおります。
（小林由多香）

■第26回全国郵政川柳大会に参加、大会後長良川の鵜飼観光をして帰り、途中京都の柳友にユウワクされました。
鵜飼待ち文句言わせぬ風が吹き　（越智一水）

■水客・紫香・潮花の喜寿と萬的を加えた柳歴50年を記念して7月16日、西尾栞主幹を迎えて参加58名にて近江八幡吟行を開催、小雨の中水郷めぐり村雲御所での元宝塚スター英法尼さんの法話を聞き楽しく帰阪した。
（黒川紫香）

■川柳塔還暦記念句集頂戴いたしました。立派な句集を手にして諸先輩に少しでも近づけますよう努力するつもりです。（宇野昭代）

■博多の大会に参加休みのたびの大会続きでいささかグロッキー気味、日満さんの追悼大会よろしく。
（両川洋々）

■川柳塔記念句集に参加させて頂き恥ずかしいのですが、生涯のほこりにもっと勉強させて頂きます。
（赤沢周子）

■増井不二也氏死去、弔電を打っておきました。佐度の汚い民宿の部屋へ爽介さんと二人で寝ましたが中村富二や堀口塊人両氏も泊った部屋の由なつかしさひとしお。
（東野大八）

■八月は又NHKのよめやうたえや川柳天国御苦労様

残暑お見舞い申し上げます

サークル
檸　檬

です。遙かに東京から大きな旗を振る積りです。

（藤島茶六）

■全国川柳米子大会地元の女性グループが主柱として効果を挙げたと思います。

（尼　緑之助）

■全国川柳大会には塔の皆様にお力添えを頂きました。お蔭で一同鼻高々でございます。ありがとうございました。

（石垣花子）

■過日三泊にて山陽方面へ旅行し竹原市に入り山内静水先生に御多忙のところを旧家やお寺・史跡を御案内して頂きました。篠山句会も満三十年をむかえ、今更乍ら無鬼先先生の御遺徳をしのび川柳の灯は末永くと感じております。

（平野百合子）

■先日吉野瑛二さんより不二也さんの急逝を知らせて頂きビックリ仰天いたしました。東京人もさること乍ら、旧い人達が次ぎ次ぎと亡くなり、いよいよ淋しくなるばかりです。

（藤島茶六）

▽句会案内△

■**菜の花句会**

時・9月10日（月）夕6時
所・八尾神社内　西郷会館
兼題＝芝居・悪友・月・欲

■**南大阪川柳会**

時・9月19日（水）夕6時
所・寺田町・高松会館
兼題＝長続き・賑やか・ぬか・熱心

■**駒つなぎ川柳会**

時・9月24日（月）夕6時
所・寺田町・高松会館
兼題＝財産・困る・男・ゆっくり

■**南海電鉄川柳会**

時・9月20日（木）夕6時
所・南海会館・地下食堂
兼題＝傍系・秘訣・味覚

■**卯の花句会**

時・9月19日（水）13時
所・高槻市民会館3階
兼題＝性格・敵・自由吟

■**富柳会**

時・9月20日（木）13時
所・中央公民館和室
兼題＝台風・カメラ・美人

■**豊中もくせい句会**

時・9月17日（月）13時
所・豊中市立公民館
兼題＝新・雲・自由吟

新同人紹介

新家（しんけ）　まさる

―栞・薫風・由多香・独歩・千代推薦

社告

水煙抄の野田君枝さんの作品は新聞柳壇の掲載句のままと判明しましたので、過去に遡り総て取消し致します。

川柳塔社

句集「川柳塔」正誤表

★索引に細呂木魯木氏が、さの項に掲載あるは誤りに付き、ほの項に訂正、お詫びします。

ページ	句目	誤	正
11	4	藤・花	落・花
49	3	副・社論	福・社論
83	2	すこしづ・つ	すこしず・つ
83	7	疫・れ	疲・れ
96	1	渇・捲き	渦・掻き
96	2	手作りか・	手作りが・
96	10	菊・	藁・
118	10	如・る	居・る
135	1	こ・の世の放・	あ・の世の旅・
164	8	愚知・	愚痴・
284	2	馬鹿なる俺にはば	馬鹿になる俺はば
350	5	倒算・	倒産・
367	6	棚・	柵・

悼　草深酔升さん／児島与呂志

静かに静かに逝く川柳を信じてて　与呂志

お家族の方の悲しみのまま静かに忘れた頃柳人に伝わる、それは酔升さんらしいと私は思う。おとなしいお人柄だったから。

川柳大阪に三十年十月の句会から翠唱としての投句がある。昭和三十一年一月十八日句会の投句に

飲みすぎるつもりネストン持っており　翠唱

飲みすぎぬ様に子供をつけてやり　〃

昭和三十二年五月の句会から「酔升」と改号されたのである。その句会で彼は春巣先生選の天の句に

古狸ただ月給はとっていず　酔升

の句に私は酔升さんを思い浮べるのです。

私たち市電の運転手と違う事務所吏員の差があったから、物事は如何に違うとも人は同じであると人は言うけれども、そこにやはり違いはあると私は思う。それが日々柳人同士の心の疎遠になるのだと信じている。悪いことだけれども、酔升さんは私がそんな心を持ってなかったのに私には知らされなかったのだ。

昭和三十九年九月二十一日に北川春巣先生が交通局病院副院長に就任された時、酔升さんが私の家で「祝賀月見の会」をやろうと言われたのには驚いた。生駒の酔升宅で十二名の柳友が飲めや唄えの句会を思い出すのです。

静かな柳友であり静かな先輩だったと、しみじみ思い返すのみです。

足もとに火がつく思い訃報聞く
風まかせ打つ手は打ってあるつもり
立ち蕎麦の思い出残る里の駅
錆び付いた釘の持ってる底力

同じ職場で川柳をたのしもうとすすめた人も、やはりそれぞれの考え方で作句しながらどこかで思いを残されてたのだと私は思うしかない。

君思う日があり句会をまだつづけ　与呂志

草深酔升句抄

親馬鹿は瓜になすびを生らせる気
伝説を読まねばただの土産もの
胸中を洩らしなみなみ酌いでくれ
人柄をすっかり変えた廻り椅子
働きに出たのに悲運蟻踏まれ
楽しみにやってまんねと儲けとり
釣貰う料金箱のあじけなさ
やりくりがついたか又も法螺を吹き
ふるさとの雨に遇うさえ懐しく
無事だった子へ大声で叱りつけ
そろばんをおいても小銭たかが知れ
浴びるほど薬をのんで痩せ細り
おがみ屋も或る日易者に観て貰い
費うためのお金ですよと妻も老い
貫禄は広い机がつけてくれ

大矢十郎還暦記念句集

「みかん船」出版記念本社八月句会

八月七日（火）・なにわ会館

日中三十五度を越す猛暑、夜は大矢ファミリーを囲み盛大な句会、八月七日は文字どおり熱い一日であった。

セレモニーは著者のお孫さん智子ちゃんの花束贈呈で一気に盛り上る。地元和歌山から西山幸さんが花束を、宮尾あいきさんからはお祝いの色紙、斉藤三十四氏から木彫のループタイが贈られ、祝電が遠く稚内から届けられた。栞主幹が祝辞を述べ、〝絵に書いたような御家族美かん船〟の一句を贈られた。

月間賞は和歌山の内芝登志代さんの頭上に輝き、めでたしめでたしの記念句会であった。

（受付—与呂志・重人）

（進行—天笑）（記録—健司・重人）

出席者—与呂志・太茂津・幸・薫風・英子・寿子・勇太・武雄・登志代・光代・白光子・〆女・狂虎・正博・稚代・三男・鬼遊・喜一・敏・紫香・春蘭・柳伸・景子・蕉露・重人・笛生・千寿子・桂香・豊太・正子・輝子・只士・隆二・白渓子・水客・健司・武庫坊・年代・春江・栞・章久・大輪・富子・十郎・まさ子・覚然坊・三十四・英壬子・勝美・凡九郎・頂留子・冬葉・正坊・千秀・悦郎・岳人・規不風・山久・喜風・形水・奈々・天笑・月子・狸村・白兎・みつ子・寿美・勝晴・吉加・泰子・楓楽・雀踊子・藻介・藤子・史好・赤木和子・よしほ・柳宏子・智子・節子・あいき・金太・緑良・美代子・みつる・萬的・美房・吸江・度・白水・幸生・文秋

席題「船」　黒川紫香選

乗る人に波へだてなく揺れる船　悦郎

船が好き港の丘で追うロマン　光代

船出の日別れ言葉は波に乗る　富子

小さきちさきさざ舟がゆくゆめのせて　よしほ

愛半分積んで去りゆく白い船　武庫坊

くたびれたポンポン船の国訛り　与呂志

父となる船出は向い風になる　悦郎

人情を乗せた小さい船が着く　正子

島の宿テープで送ってくれる船　萬的

漁火のまたたくあたり夫の舟　あいき

貧乏な人は買えない宝船　狂虎

何もかも忘れたいので船にのる　天笑

泥船にプラスチックの芯がある　武庫坊

子の画いた船に父が乗り母が乗り　太茂津

だまし船今夜も素直に騙される　白兎

迷い船かぜを信じているゆとり　寿子

定期船学校行きを少し待ち　千寿子

笹舟を流す川あり母の町　武庫坊

戦後まだ終わらぬ船が沈んでる　美房

父さんが先ず酔うて来た船の旅　十郎

クインメリー号へ乗る積立を始めてる　英子

定期船新聞載せて来た初発　白渓子

九州なら船にしようかと老夫婦　吸江

アメリカにみかんの船をおくりたい　みつる

船乗りの妻で孤独に強い性　稚代

出港を待ちかねていたみかん船　智子

豪華船にも胸を張ってるタグボート　柳宏子

船見ると世界一周したくなる　重人

一そうの船が思案してる朝　勝晴

模型船作り男の孤独にじませて　みつ子

造船の腕があくびをして不況　美房

島の子が先生迎える船を待ち　〆女

船頭の唄はいまだに枯すすき　年代

あっという間に着く渡し船で酔い　形水

船首いま朝日の当る方へ向く　水客

戦争の話をしない貨物船　与呂志

宝船梅をいっぱい積んでくる　天笑

たらい船恋の女が海へ出る　〆女
難破船りんごが一つ海に出る　岳人
霧の中から大きな船が現われる　形水
船足に合わせてイルカ人を恋う　紫香

兼題「富」　川上大輪選

一代の富をかこんで遺族の眼　どんたく
人間の富子宝に尽きている　静歩
富む程に人情薄くなる世相　綾珠
富豪だと言われる人の小遣い帳　富子
富捨ててからの男の広い肩　月子
富国強兵澄んだ子供の眼がうかぶ　水客
善良な市民で富にまだ逢わぬ　緑良
名声も富も掴んでいるあせり　柳伸
富豪には遠い表札掛けている　智子
岩風呂で富豪と背中流しあい　英子
富み過ぎて女難の相が顔に出る　只士
汗に汗積んで私の富にする　狂虎
些かの富パチンコで勝ってくる　太茂津
ポケットに富む錯覚のCカード　泰子
裕福なころの話が愚痴になる　智子
吉相墓建てて富豪になるつもり　稚代
富豪に嫁ぎ金が自由にならぬとは　年代
富めるものなくお茶漬のうまい朝　節子
頓智にもジョークにも富み人気者　景子
千金に勝る句帳を書き溜める　寿美
富ばかり追って砂漠へ迷い込む　楓楽
トラブルを後に残して富豪の死　文秋
マンションがようやく買えただけの富　紫香
あの世まで持っては行けぬ富を追う　寿美
寄附をして富豪またもや名を残し　桂香
富めば富む程にだんだん欲が出る　庸佑
浜に出て貧富の差なき月仰ぐ　〆女
富者の名が鳥居にずらり残ってる　奈々
愛情が富より大事と知る老後　蕉露
富には遠くピエロは今日も笑ってる　寿子
争いが嫌いで富と縁遠い　英子
ご先祖の富を切り売りして生きる　正子
心富む日の微笑みは美しい　紫香
何もかも他所から買うて富める国　金太
脱税の苦労は富を持って知り　勇太
富豪から一夜で堕ちたルーレット　月子
正義感捨てると富にめぐり逢う　緑良
千金の富からさめた抽籤日　十郎
米びつに米あり今日の心富む　〆女
砂山に富のもろさを積んでいる　滋雀
何もかも豊富心は飢えている　大輪

兼題「喜」　岩本雀踊子選

喜んだ顔はしられぬ葬式屋　耕花
喜んでいるからソッとしておこう　滋雀
振りむいてくれる喜ばしいことだ　白兎
千羽鶴千の喜び待ちこがれ　緑良
よろこんだふりしてくれるだけでよい　藻介
道たずねたずねてよろこびの座にすわる　よしほ
喜劇かも知れぬ地球儀だけ回り　悦郎
喜びがあるから人間生きている　覚然坊
喜びの深さ笑顔を通りすぎ　泰子
喜びを分つ祖国の天皇旗　喜風
喜びはなにも知らない兵の墓　健司
喜びがあふれてコップ酒あふれ　岳人
喜びのテーマに達者な父の酒がある　太茂津
貧乏ゆすりで喜んでいる父の私語　まさ子
喜びを他人様からもらってくる　柳宏子
喜びが独りになってこみあげる　寿子
輪の中で喜びかくし切れず居る　只士
喜びの酒が誤解を溶かしきる　幸
素晴らしい喜劇を妻と演じきる　白光子
再婚の母を素直に喜べぬ　楓楽
喜びは花屋に花が満ちている　凡九郎
手放しで喜こんでたのは昨日　幸生
本物の喜び涙を連れてくる　智子
友達が来て喜びを倍にする　月子
ほめられて又おっちょこちょいをしてしまい　寿子
喜びがつづいて帯を締め替える

『夜市川柳』募集

第四回　「気合い」　遠山　可住選
締切　9月末日

第五回　「　薬　」　藤岡　花梢選
締切　10月末日

失敗を喜ぶ敵の目が光り　正博
喜びが一直線に走り出す　白兎
喜びを抱きしめられる乳房持つ　美房
喜んで喜んで逆立ちして見せる　勝晴
喜びは今朝もパッチリ眼が覚める　〆女
現実となる喜びにこわくなる　年代
地獄耳いつも喜び聞きもらす　藤子
喜んでくれる母は泣き虫で　雀踊子

兼題「豊」　野村　太茂津　選

子のために豊かな笑みは残しとく　緑良
衣食住豊かになって道忘れ　勇太
豊かさに馴れた心が冷えてくる　美代子
義理詫びて心豊かな目に出逢う　規不風
一節の聖書で豊かになれますか　幸生
オッパイが豊かなほかは何もなし　天笑
馬上豊かに妥協許さぬ顔になる　水客
愛情が豊かで何時もすねて見せ　柳伸
豊満をほめれば私は粗食です　吸江
六人を育てた豊かなる乳房　雀踊子
葡萄棚の下で豊かになっている　智子
使い捨て出来る豊かさ怖くなる　柳宏子
豊かさに慣れすぎてきた迷い箸　英子
貧しさも笑える心豊かな日　緑良
化野へ来ても豊かでいられるか　藻介
豊かさに馴れて時々頬を打つ　規不風
譲られた豊かな愛を子に残す　輝子
少し豊かに風鈴を聞いている　智子
豊かさの故に心のふしあわせ　よしほ
人情の豊かな国に住み替える　狸村
宿命が豊かな髪にまといつき　武雄
心まで豊かになれぬ金を蓄め　文秋
別荘の犬は豊かな欠伸する　紫香
表情の豊かさ負けたなと思い　大輪
パチンコはじく豊かさを見失い　度
飢餓の民豊饒の民世界地図　正坊
手に余る髪を束ねるふしあわせ　年代
こころの眼開けて豊かな海に逢う　幸
豊かとは腹いっぱいに飯が食え　紫香
掌中の珠は豊かに今日船出　英子
老人ホームに豊かな未来と書いてあり　天笑
一杯がとても豊かなビール飲む　紫香
窓際で豊富なキャリア埋もらせ　柳宏子
土の香の豊かな中に父います　藤子
金ばかり貯めて豊かになれますか　正博
豊かとや冬にきゅうりも茄子も生る　楓楽
どん底で豊かな笑みを持ちつづけ　月子
一日一善こころ豊かに夕焼ける　幸
片棒をかつぐ豊かな話題持つ　水客
雑巾が五枚豊かな城になる　滋雀
心豊かで欠伸している素寒貧　太茂津

兼題「栄」　橘高　薫風　選

繁栄の礎我が家の子沢山　あいき
栄転のそれから長い道をゆく　白兎
栄転はお昼の新幹線で発ち　三十四
栄転のレールに乗って止れない　美房
栄転へ投げたい石を持っている　健司

岸和田市文化祭参加
第34回市民川柳大会

日　時　昭和59年10月28日（日）正午
会　場　岸和田市民会館地下会議室
おはなし　西田　柳宏子
兼　題　「絞　る」　梶川雄次郎選
「手探り」　野村太茂津選
「曲り角」　榎本　聡夢選
「透　明」　橘高　薫風選
「忘れる」　西尾　栞　選
席　題　当日2題　各題2句　締切2時
会　費　五百円（大会誌呈）
賞　市長賞、市会議長賞、教育委員賞、文化協会賞、操子賞、きしせん賞

主催　岸和田川柳会

栄転を喜ぶべきか独り住む　幸一
弥栄へ祈る祝詞の無表情　千秀
栄転の息子段々遠く住む　美房
方角の通り動いて栄えてる　形水
栄光の蔭でひっそりエピソード　みつる
栄光の地位を支える無私無欲　狸村
栄枯盛衰女の影がつきまとう　三男
栄転の辞令に妙な噂聞く　白光子
栄光に遠く夫婦で作るバラ　みつ子
栄枯盛衰半世紀は長し　妻子
栄えてた頃は似合った鬼瓦　耕花
国栄えて百姓は田を荒らす　よしほ
天平の栄えを語る鴟尾の金　萬的
国家繁栄兵者共はうさぎ小屋　狂虎
栄えてた過去を長男振り返り　月子
栄冠の重みマイクへ偽らず　白渓子
栄転の胸にたたんだ片思い　滋雀
栄光の通知呉服屋呼び寄せる　赤木和子
栄光が何より暑中御見舞　白兎
栄耀栄華糖尿病になりました　鬼遊
国栄えコップの水がまずくなり　藻介
栄枯盛衰墓の話を子に残す　規不風
栄転へ大阪弁が気易そう　三十四
栄光のゆめさめロスの街暑し　よしほ
栄光の影は静かに去ってゆく　幸泉
栄冠がポツリポツリとしゃべる過去　幸生
観光の名所となった栄華の地　蕉露
イエスマンがとっても好きな虚栄心　楓楽
栄えてた頃を弔辞の一節に　吸江
悪人の栄えた例にされている　水客
栄達のボロボロ欠けてゆく刃　赤木和子
金で買う栄誉は額に入れてある　蕉露
栄光の座で七人の敵を恋う　重人
核持たぬ国の栄えをふと思う　静歩
貧乏に残った栄誉系図だけ　蕉露
還暦に栄の一字のうれしさよ　薫風

特別課題「みかん」　大矢十郎選

子宝の風を学んでみかん船　静歩
みかんから昔巨万の富もらう　水客
先ずみかん出して紀の国座がまるい　富子
手持ち無沙汰の女がみかん剝いている　大輪
熱下がりみかんの筋をとっている　幸生
いろいろな理由で届くみかん函　節子
みかん山を捨てた意地あり負けられぬ　史好
和歌山で生れてみかん好きでない　英子
お鏡にみかんが乗って春になる　文秋
みかん持つ手が遊んでるパパの膝　白渓子
姉妹都市みかんとりんごが手を握り　正博
誰にでも馴染むみかんの色と味　武雄
みかん箱有田有田の大きい字　三十四
出来不出来みかん気になる南風　重人
ひとり居のせめてみかんを贅に積む　楓楽
ふる里のみかん届いたおすそ分け　山久
みかんむいてくれる女のまるいひざ　雀踊子
みかん咲く頃に帰ると言う便り　稚代
みかん剝きかけて用事を思い出し　大輪
北海道に待ち人のありみかん船　弘生
自由化の波にみかんが焦りだす　文秋
八月のみかん仏によろこばれ　冬葉
アメリカの出方を待っているみかん　赤木和子
子等巣立ち夫婦の対話みかんむく　柳宏子
半分を隣に廻す夏みかん　紫香
木枯らしが吹いてみかんは主役の座　桂香
雰囲気に慣れてみかんに手を伸ばす　正子
病人にみかんばかりをねだられる　柳伸
みかん狩食べ放題というけれど　英壬子
鏡餅オレンジなどで初春は来ぬ　幸生
文左衛門紀州みかんの名を残し　覚然坊
みかん剝く四畳半には二人きり　規不風
片仮名のミカン日本へ攻めて来る　美房
早合点した新妻の夏みかん　白光子
置炬燵みかんは話をまるくする　萬的
夏みかん女の味方かも知れず　悦郎
ひっそりと悪女が喰べる夏みかん　英壬子
団欒の真ん中にある盛りみかん　隆二
夕映えに灯をともす様みかん山　泰子
どん底の暮らし知ってるみかん箱　隆二
ひたすらに蜜柑みかんと生きた父　登志代
みかんむく手付きも母に似て二十歳　十郎

（清記・楓楽）

◇

〈**8月号訂正**〉

■86P下段2行目「うっとりとさせたその日に」は「……その**目に**」の誤り。

■81P中段最終行「一歩の幅へ……査を蒔く」は「……**種**を蒔く」の誤り。

締切毎月末。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
整理・板尾岳人

川柳しんぐう　川上　渓水報

贈物をするのも内助の功のうち　平和
贈り物選び選んだ心みる　八千代
贈られる側に立ってる品選び　正子
贈り合う愛が結んでゆく絆　緑良
たくらみをもつ法外な贈り物　武雄
さりげない顔で吉報待つ疲れ　里美
吉報を待たずに出来た祝膳　昌子
吉報を待つ母親へ来る訃報　潮花
吉報に次々変ってゆく受話器　花泉
吉報を待てと詐欺師それっきり　正博
七色の夢を白無垢包んでる　富子
奔放な夢若者の白い画布　英子
黒白を争う世相のうとましさ　三千代
長い物に巻かれて白さ見失う　輝子
余白まだ塗りたい彩のある六十路　三男
無理をして買えば流行もう終り　十郎
流行にエリマキトカゲにげ廻り　国彰
流行へアホなやっちゃという視線　大輪
流行に左右されない楽な服　まさ子
流行を追えば邪魔する皮下脂肪　渓水

YFC川柳会　人見　翠記報

大自然神の摂理の春が来る　翠記
悔見兼ねお礼まいりの家族連　たき子
最後の最後神にたよった絵馬の数　たず子
しめ縄をかけて神木拝まれる　絹子
多い目に包んだ神楽もう仕舞　よし津
神詣りそれから山陰出湯の旅　節子
陽炎にうつらうつらの道祖神　忍

川柳高知　川竹

肩の荷をおろすとどっとくる疲れ　佳風
初恋の人に保険をすすめられ　節子
ウインドの夏へ吐息をおいてくる　幸泉
くったくのない笑い声土曜の夜　弘生
救急車患者を乗せた音になる　春枝
安心へ安いと見るか保険料　岩男
溜息をもらす女の罪一つ　登舟
旅に出て朝寝の出来ぬプランたて　千鳥
減量へあと一息をサウナ風呂　菊野
飲み込んだ言葉が溜るのど仏　和興
傾けたグラスに過去のつのる夜　竹萌
母の愛過去の事にはこだわらず　三吉
出雲さま過去を恨んでいる私　松風
蝶でさえ移り気のする花の彩

岸和田川柳会　植山　武助報

食扶持は年金がある粗大ゴミ　世界人
なにげない言葉も時には人を射す　こう
古本屋主人も何か読んでいる　楽天
火の鳥になっても飛べぬ古い女　礼子
接待が火種疑獄の幕開く　浪速子
火と燃える恋を夢見る青春譜　武助
火のついた話を提げた里帰り　甘平

松風報

康子

巨体からダンスもゆれて高見山　加代子
小石積み水子供養に泣く女　ひで
渓谷の萌える緑と日本晴れ　さよ子
働き蜂だったあの頃なつかしみ　白光子
善積んで神に近づく道つくる　冨志子
ひとつずつ積む倖せに明日がある　狸村
涙壺封をして積む父の貨車　射月芳
期待したグリコの株を下げる犯人　操子

倉吉川柳会　渡辺　菩句報

釣書には書いてなかったお酒の量　とめ子
釣るまではきれいな餌をまきつづけ　松女
釣り合いの取れぬ夫婦がうまくゆき　秋人
訳のある女の強気黙秘権　寿朗
時事放談名士が揃った裏酒場　満春
バッターを呑んで強気で攻めて行き　かつみ
尺鯉を釣った小川がまだ残り　弘朗
道づれをハモる夫婦にやっとなり　宗光
酒場には縁がうすくてはずされる　みなと
ロートレック酒場女の艶やかさ　千佐子
酒場では女狐俺を誑し　碧水
妻の吹くラッパへだまってついて行く　民子
釣人に泳ぐ人魚のネオン川　律子
大物も小物も釣れる金の餌　ゆり子
釣れそうで愛の言葉を用意する　雄々
輪の中に強気の魔女がいて困る　御前
恋人の番号だけは暗記する　観洋
一が抜け二が抜け三の世話になる　やえ
番号で呼ばないでくれ人間だから　柳風
老いの旅番号忘れ部屋忘れ　しづ江
弱虫を釣って広場の陽に当てる　瑞枝
大物を釣る日の竿はしゃべらない　秋女

神だけに見える番号打ってある　まさる
大切な道づれひとり野に還す　荒介
どこでどう梯子をしたか時計がない　石花菜
火の鳥が羽根を磨いている酒場　独歩
酒場には蜉蝣ばかりくるらしい　菩句

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

ふっくらと胸へかぶさる入道雲　亜成
威勢よく引き受けたのを悔む判　春秋
決算に企業努力の差が光る　秀泉
追加注文入り勢いづく現場　有一
胸のキズ子供に話す余裕でき　安竹
勢いが過ぎて悔しい勇み足　聖地
ゴム長をはいて威勢のいい女　登
ぐんぐんと伸びるグラフへ軽いロ　博泉
肉薄き胸をはだけて心電図　入仙
二代目に足枷ともなる七光り　形水

川柳化粧櫓　植村客遊子報

商才が法に触れない悪事組む　岳詩
夏草の中でレールが泣いている　紅月
落ちそうな吊橋二人なら渡る　大鷹
靴底に男の意地が秘めてある　葉香
母の味ギッシリ詰めたにぎりめし　実男
十字架の柱にされた樹のなやみ　越山
美食したD五一線路から外し　礎石
野心家の腕組みボトル並べとく　奮水
燃えた日もあったと腕を組んでみる　悲子
張り紙が窓口となる無人駅　秋信
地獄での窓口に居る鬼二人　哲子
古稀すぎて健康自慢に陰がさす　永楽
旧姓で呼び合う友がいる温み　みね子
好きという殺し文句に泣かされる　輝月
玉砂利にきざむ神への願いごと　サワ子
思い出のみかんの花が咲く香り　みつ子
王朝の夢が聞ゆる牛車の音　とし
照るてる坊主孫は明日を疑わず　まさ子
結局は金できるだけさからわず　客遊子

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

世界中何ともならぬ高金利　素石
犠打ばかり打たされ死球にあこがれる　四郎
入院の朝の仏前念入りに　ちよ
病床へ句友の便りの温かさ　義美
ハイミスのナルシシズムを視る鏡　高明
源平の池にも花は競い合い　あき
意気込んで行って話はせず帰り　虹汀
良心の医者に番付表がない　多々子
恋の出会い愛の終りもこの浜辺　勝一
風鈴に誘いをかける浜の風　盛雄
停電に女房が愚痴を取り戻す　正敏

うみなり川柳会　小林由多香報

強かった父よあなたもぼけ初め　一止
父ちゃんが負けて家庭が丸くゆき　正
病人が立ち転た寝の妻へ掛け　芳泉
転寝をしてても檻には餌がある　葉士人
蟻地獄鍵っ子崩し夕焼ける　華子
親の愛積み木崩しの子をさとし　富美湖
身を崩す訳は女にある遺産　希満子
振袖の下で泣き泣きくずす足　宣子
腐れ縁やがては虹の橋渡る　豊生
納豆の腐ったにおいなじめない　由多香
腐る日の晩酌にがく腹にしむ　静生
嗅いで嗅いで結局捨てることにする　三歩
豪快に脱げる男の夏が好き　草人

川柳塔まつえ
復刊15周年記念川柳大会

日　時　昭和59年10月14日(日)
午前10時開場

会　場　松江市殿町　むらくも会館

宿　題　「丸」　橘高　薫風選
「与党」　大森風来子選
「美人」　中尾　藻介選
「小咄」　河内　天笑選
「鈴」　八木　千代選
「吉報」　津川　紫吻選
「紅白」　尼　緑之助選
各題二句。当日席題3題

会　費　二、五〇〇円(小宴を含む)
欠席投句は投句料五〇〇円を添え10月7日(必着)までに左記へお送り下さい。

投句先　〒690　松江市雑賀町一六八六
恒松町紅方
川柳塔まつえ

子は脱皮操り返しつつジャンプする　雅女
脱いだとて恥ずかしがらぬ年となり　君女
諸肌を脱いで自腹を切らされる　舟宏
だまってる父が解決策を練る　熊生

西宮北口川柳会　妹尾　春江報

フルーツをすくう力士に小さい匙　眉水
さくらんぼ構図の中に二つ入れ　春子
話尽きずフルーツパーラー昏れかかる　よし津
冷蔵庫の隅でリンゴが震えてる　春江
デザートに未練をつなぐ明日の風　春蘭
髭の手前フルーツポンチがたべられぬ　舟二
通夜の膳味見ばかりでのど乾く　すみれ
硯の池乾いたままに恩師病む　杜的
意地張ればすぐ乾き出す老い二人　紀雄
トンネルを抜ければ涙乾いてた　婦美子
人間が乾かされてるロボットに　いわゑ
雑巾が乾いたままの共稼ぎ　礼子
あれこれと乾して一日主婦終わる　隆子
打ち水も心の乾きに効めなし　勝紀
旅帰り乾いた喉へ妻のお茶　きよ子
口笛を吹かぬ男の曲がり角　歌子
口笛が帰る良い事あったらし　弘生
嬉しさが口笛となる散歩道　右近
満ち足りた日の口笛が軽くなる　幸
口笛が合図に窓の灯がともり　半歩
口笛を吹いて巣箱ができあがり　幽香
口笛がきこえる軍歌口ずさむ　美津枝
英虞湾の海女が口笛吹き上げる　好江
漫画閉じて口笛の子が塾へ駆け　千世子
口笛を吹くと入歯が踊り出す　武庫坊
新世帯口笛の出るきゅうりもみ　堕駄

幸せだなあ口笛を吹いている　伊三郎
口笛と帰る夕焼けすばらしい　はつ絵
口笛が行きつ戻りつしてる外　紫香
ホイホイにごきぶり両脚つっぱって　泰世
咲き終えた花の哀れを実は知るか　照子
孤独には慣れてひっそり結ぶ夢　文平
拾われぬ抗議一円玉光る　求芽
白靴に変えたその日を御堂筋　まさを
タイガース勝ったその夜のかけ布団　日の出
恋拾いましたか浜のお嬢さん　光代
短かめにパーマをあてて梅雨に入る　静子
山上で澄んだ空気を瓶につめ　保蔵
忘れたい事だけ忘れぬ年かいな　花村
母ちゃんの西瓜尖らす子沢山　冬子
敗北の背なへ聞こえてくる演歌　かすみ
また嘘をつきたくなった空模様　園歩
熱帯夜月も歪んで見えてくる　きよ子
旗を振るとても気の合うライバルと　年代
良い妻でなかった女も遺族扶助　てる
人の計を小耳にはさむ朝の混み　笑女
父の日に自分で買ったループタイ　一郎

サークル檸檬　田形　美緒報

生きるため蜘蛛は黙って動かない　美房
いつ来てもこの四つ辻で迷う癖　登美子
まな板で死ぬ前の魚濡れている　雅子
醜と美を消すこと出来ぬ生臭さ　和弘
生き甲斐は修羅場へ向う男の血　清之
生きているその一瞬にメスの音　森子
生き下手の割箸までも割りそこね　章子
梅雨空に紫陽花しかと生きている　千代女
もう一人の私が生きるみんな留守　今日子

もう一つの生き方をするペンネーム　美緒
生きている証にときめく胸がある　泰子
再会に強く生きてる友を見る　千万子
信じたい心に言葉多すぎる　美代
生きているよろこびに哀しみがある　花梢
人間がまだ分らずに残る生　薫風

ハワイウイロー社　市岡　暁舟報

旅日記苔むす墓も写しおき　公女
古里へ持つ土産に迷う旅支度　張賀
旅をして気分転換若がえり　拝山
世界一富士山眺むバスの窓　虹宵
ハワイ旅英語字引も入れ合せ　万里歩
旅の空天気予報後や先き　三十四
チェックインチェックアウトフロント忙しさ　暁舟

佳句地10選（前月号から）

赤木和子選

人生はいろいろ七味唐がらし　鬼遊
過信すると空は怒りの顔を出す　正子
幸せが恐いと思う日の枕　浩一郎
ぐみの木の行方をだれか知らないか　すゑ
無位無冠私にわたしの朝がある　ただし
公認にならない時に出る記録　渓水
鯉と鮒君と僕との違いです　花村
初志貫徹大分変色してますが　武庫坊
丸腰になって男の値が決まり　草風
時として謀反をおこす飯の芯　幸子

旅館泊り並んだ膳の物凄さ　秀山
古里の姿嬉しや山や川　十吉
老人夫婦桜便りへ又も旅　蒼生
旅立つ日古老も喜々と若返えり　香夢
佐渡ヶ島おけさ踊りも習うか　一牛
国鉄のレールパス客を喜ばせ　紅渓
汽車の中地方訛りが浮び来る　高原子

川柳大阪　井上喜酔報

前掛けの匂い恋しい堺筋　喜楽
こいさんも単車で走る堺筋　天舟
堺筋庶民の家が見当らず　みつる
ここ一発打てぬ掛布に手を合せ　キミ
パートまでグリコ事件にいじめられ　君枝
安住を求めてか蛾の派手に舞う　洛酔
錆ついた登山ナイフにある誇り　伸子
核の傘切りさくナイフなら使う　金太
リンゴむくだけのナイフにある平和　本蔭棒
ビフテキの踊りにナイフ操られ　覚然坊
愛のムチ時々本気で叩きはる　天平
白砂へ愛の足跡一直線　喜酔
両親に叛く小さな愛を抱く　比呂志
愛薄き結晶医者に始末され　しげお
少年の愛は小鳥も生き返す　笑風
ファインダー美女の被写体手が震え　晃山
カメラ熱もうさめたのか部屋の隅　謙翠
写真館でとったポーズは若かった　鉄心
胃カメラへ鋭い医者の目に不安　重人
カメラから離れて意地を見せた奴　与呂志
南北の句碑がカメラにポーズする　敏
湯煙に妻が浮いてるフルムーン　司

川柳たけはら　森井菁居報

さんすうセットでべんきょうしたよ　小一　あきみ
おっちょこちょいはるみたんこぶができ　小一　はるみ
二重とびちょうせんおなかすいちゃった　小四　純平
誕生日お気持だけどプレゼント　小五　亜貴子
本当のことを言っても誤解され　中一　恵子
ふねはきもちいいあさひです　五歳　ふみこ
きすついた野うさぎの目がないて見え　小三　方昭
クワガタをとってはおれない中学生　中一　仁昭
この道を二年も走って来た自信　中三　紀
早くしておけばよかった小さな悔い　高三　愛
Uターンが出来ない坂で敵に遭う　菁居
ドキュメントそれぞれ生きて来たあかし　こうじ
胎動へ子の手妻の手ぼくの掌よ　白狐
手を合わす子等の幸せ見守ろう　鈍舟
たあいない話題に姑と豆をむく　比呂子
百点の重みを知った中学生　令子
単身も好いですなあと無責任　節夫
無器用な女で一人背負いこみ　淑子
ふと我にかえれば浅間しいこころ　房子
ビール一本ほどの幸せなら続く　蘭幸
父の日や妻が子がいて孫もいて　静水
六十路までよくぞ歩いた膝を撫で　勲
子の免許また心配が一つ増え　満子
企業家のしわ寄せばかり海は受け　美佐雄
空振りへ女ひそかに策を練る　笑子
片ちびの靴は暖簾がお気に入り　一路
故郷便初夏が一杯詰めてある　貞子
遊歩道支えてくれる杖がある　シゲヨ

三幸川柳教室　桜井千秀報

あの噂もしかしたらで眠られず　隆行
焼け棒杭罪なうわさが火をつける　静

同窓会噂にされた人と会い　重次
裏切りを今も噂と信じたい　みね
針の穴程の噂に変える道　孝子
死ぬほどの仲へ噂がつきまとう　ふく代
何時か翔ぶ夢あり妻の昼下り　文子
心まで翔ぶにはまだ荷重すぎる　三千子
つばめ飛ぶダウ上ろうと下がろうと　桂香
単身赴任今朝はきれいな飛行雲　愛子
大正のロマン低空飛行する　智水庵
ハワイまでそれが言いたい土産くる　靖子
週末のおみやげ汗の作業服　由梨
手土産の軽さ気になる娘のくらし　かなめ
旅ごころ土産話がそそのかす　敏子
星祭りする子もなくて笹を切る　つゆ子
笹竹へそっと悩みを書いておく　美子
宇宙論飛ばした後の星まつり　千秀
ふとよぎる空しさ天の川冴える　千香子

城北川柳会　神夏磯道子報

育児には迷う事無く自信持ち　茂樹
方向音痴いつも迷うて恥ずかしく　すみれ
悟り切った筈が迷いを断ち切れず　千世子
庭の木々濡れて爽か梅雨晴間　炉斉
夢さめて夢で無かった掌を合わせ　満津子
吹っ飛んだ迷い男の朝を出る　笑風
裏話溝の深さを思わせる　静歩
雨空に溝の蛙が遠出する　悟郎
芹生える小溝嬉しい山の道　節子
易の灯が心の迷い呼んで居る　テルミ
披露宴皆な秀才と才援で　晴子
母からの便りの仮名が温かい　公一
初孫の顔が嫁との溝を埋め　麻黄

溝板を踏んで育った口達者　ふみ
堂守の昼寝がさめぬ蟬しぐれ　星斗
髭の男に買物篭は似合わない　綾珠
犬の皿のぞき込んでる迷い猫　八重
風鈴と花火で飛ばす梅雨のうつ　達子
オギャアからやり直したい健康法　繁子
結論の出ぬまま座禅刻が過ぎ　右近
葱坊主六十路の心争わず　新一郎
一歩ずつ数える様にプラカード　静子
建前の虚像星座に見すかされ　ただし
生甲斐は愛と倫理に支えられ　重彦
土産物本家本舗と迷わされ　道子
梅田地下出口に迷いうろうろし　午郎
迷い犬脅えながらも威嚇する　正之
自己主張変えない同士で溝が出来　泰世
神様も渡れぬ米ソの深い溝　倫子
手洗いは大きく作るビヤホール　弘生
迷わずに勤めて早し三十年　達一郎
コケシの目団体さんのその一人　三和

うみなり川柳会　小林由多香報

北方の叫び流氷とは悲し　芳泉
抜けがらの過去も虫干ししておこう　草人
子が病めば騒ぐ元気を親祈る　よし子
検査日の夫の電話に胸騒ぐ　希満子
駅前の騒ぎを諭す花時計　宣子
襖にも爪跡残して孫が去に　華子
騒ぐなと言えば幼な子なお騒ぎ　貞山
餌を貰うこつを覚えて籠を出ぬ　静生
落選を重ね撒餌も長けてくる　舟宏
餌になる魚もあって海青い　熊生
撒餌だけ食って貧しく細く生き　一止
芸仕込む餌は足りない程にやり　豊生
好物の餌へするどい爪かくす　由多香

川柳ねやがわ　高田博泉報

ジンクスの意味おだまき草の花ことば　定子
ジンクスに勝てず雨傘つれて旅　司
ボタン寺花のジンクス金がよる　松庄
ニンニクの口が隣でよくしゃべり　一鬼
地下鉄に想い出のある二人です　三郎
おしゃべりなインコに悪声真似られる　幹子
五月晴至る所に蟻動く　春子
お陽さまと握手がしたいバラのつる　君子
最後までトイレ決らぬ設計図　敏夫
老姉妹しゃべればオチは死ぬ話　あやめ
旅立ちの荷物一日先に出る　かすみ
ジーパンに体の線をみせた初夏　まさお
猫に鈴つける気のない旗を振る　光子
若い町虫がつかないバラが燃え　静江
地下鉄に蝶が一匹迷いこみ　シマ子
芸のない犬で主人によう仕え　博泉
サイコロを振ればジンクス又生まれ　一念
敵ながらあっぱれ声がでか過ぎる　野生
握りしめても所詮こぼれ落ちる砂　亜成
地下鉄の終点でたこ焼きを買う　冬葉
地下鉄とバスに分かれて共稼ぎ　一途
地下鉄に生活を運ぶ顔と顔　淳朗
話し中話し中まだ話し中　光子
ジンクスが二度と通さぬ橋がある　晴風
ジンクスを朝の鏡に聞いてみる　亜也子
ジンクスの髭でバットを握りしめ　亜鈍
地下鉄に急行ほしく思う日も　三千子
嫁った娘の電話で気づく誕生日　敬山
地下鉄に勤めて鰯雲を恋う　英壬子
おしゃべりがしばらく来ない何かある　英比古
野良犬の尻尾が通す自己主張　尚子
前向きの唄そよ風に乗ってくる　双舟
ぬすみ撮りほんまの顔を届けられ　小路
春の闇こんな静かな時もある　麗水
聞いている時は判っているつもり　柳宏子
おしゃべりの妻がだまると雨になる　あいき
釣り人が動かぬ渓が美しい　紫香

豊中もくせい川柳会　田中正坊報

四つ上の兄より老けていたなんて　房子
盆供養カセットよお経たのみます　賀代
雑踏が戻れば虹が消えている　英子
減反は汗をかかない人がきめ　富子
フェミニズム大きくなった婦人傘　正坊
ためろうて葬儀の家へ郵便夫　勝
笑いつつちゃんと計算できている　しず
笑ったと店先にまで抱いてくる　隆
何となく妻の微笑がおそろしい　寿美子
僕は水妻はビールで乾杯　博史

激しくも静かにもなる水の精　登志実
振り上げる拳に父の愛がある　よし子
リハビリへ愛と力を持って行く　美祢子
愛失せて小さな嘘も許せない　きく子
軽い愛女の傘をさしている　薫風

日中川柳教室　田中正坊報

あきらめと逢いたさ疼く蛇の目傘　玉子
夢で逢う亡夫は若くハンサムで　吉子
三代の愛情光る尾瀬の沼　正坊
誘われてついうっかりと五十年　紀雄
裏切はしない一人の傘をさす　礼子
折たたむ傘をたたんでひとり言　恵美子

川柳後楽　井上柳五郎報

胃袋でうなぎ生肝微動する　博友
胃袋の満足許さぬ医者でよし　番茶
胃袋がいつも笑ってる八分目　悟洋
侵略の文字教科書が口閉ざす　敏昭
火葬場の扉冷めたい音で閉じ　哲郎
瞳閉じ亡父のドラマ懐しむ　幸好
ピシャリ戸を閉めた私の負けになる　健一
瞼閉じ裁断を待つ被告席　紫峰
妬心いま閉じる女の数珠拾う　照路
何も彼も包まず言える母の胸　吟平
愛の手に包まれ非行の芽がつまれ　桃風
母親の愛に包まれ素直な子　弘隆
マンネリに包まれ父のちびた靴　柳五郎
政治家の本音包んでいる笑顔　進
友情に包まれ逆境乗り越える　玉水
童謡に包まれ野道たそがれる　佐加恵
夜の蝶手相に弱い過去をもつ　青銅
占いに秘め事が多い顔が寄り　葵丘
占えば不吉なことに負けそうで　たけ志
迷うたら来いと瞬く易者の灯　秋月
花占いの少女を夜叉の指にする　草風

駒つなぎ川柳会　里　小路報

躰から先に目醒めた非行歴　甘平
蛇の目傘どちらも半分ずつぬれて　春蘭
切手マニア郵政省を喜ばせ　善信
政治家の濁りを隠す札の束　覚然坊
区切りつき世間の平和な音に溶け　悟郎
マニアぶる男にハナを持たせとく　凡子
死ぬ程に恋して見たし濁り酒　柳影
区切られてみると上には上があり　弘生
傘さして花屋で花を買いそびれ　育園
赤ちゃんは醒めると母を眼でさがす　綾珠
釣りマニアだけに聞える海の私語　翠公
毎日を濁るに委せ耐えた過去　円女
思想まで区切る三十八度線　邦晴
目醒める日来ると確信するも母　頂留子
ひと区切り煙草がうまい茶がうまい　恒明
生活費きっちり入れているマニア　天笑
愛憎に醒めて羅漢を彫りにゆく　規不風
蛇の目傘さすと絵になる母でした　千代三
えらいことしたトラ箱で目を醒まし　文秋
泥絵具がはげてる人形買うマニア　萬的
濁り酒濁り心の灰で澄み　柳右子
ふり向かぬ男の背にある区切り　雀踊子
マニアから貰ったひとつ徽びてくる　冬葉
苦労人とても区切りを大切に　美幸
アイデアのある傘手品のように開き　芳川
夢醒めて首のあたりを撫でてみる　勝美
濁り水に私の過去がゆれて居る　真砂
区切りつくまでは来るなと高いびき　柳宏子
とても広い視角をもったマニアの眼　浩一郎
濁音を入れると女上品に　東雲
父の日に娘のえらぶ折りたたみ　美津枝
ひと区切りつかぬ居職の窓あかり　柳伸
生一本濁りは持たぬ道具箱　寿美
どしゃ降りの傘でノルマに負けられぬ　重人
白藤の白もにごって倦怠期　美代
引き金をひくから醒めてゆく情　白兎
ある日からマニア戻れぬ橋渡る　度
濁流の中の小石となるラッシュ　美房
一区切りつくまでご飯待たされる　小路

岸和田川柳会　植山武助報

漁火に寄る習性へ運不運　加代子
山鉾が暑い京都に見せる汗　浪速子
サロンパスも匂うラッシュの通勤車　世界人
六十路過ぎ血液の寄附断られ　楽天
六月の萩が目をひく大覚寺　礼子
帯とけば式の疲れがどっと出る　さよ子
大の字に夢を追ってる夏座敷　狸村
夏休み待って帰省の旅に立つ　こう

雨の日の参道神様に会えそうで　ひで
酒にみな罪をかぶせて二日酔　希久志
念入りのよそおい妬むにわか雨　冨志子
それぞれの主張へ会議又延びる　武助
大島の対で見直す子の育ち　甘平
チャンス待つ身に落日のあっけなし　射月芳
字引きにも生き残ってるハッタイ粉　白光子
エリマキトカゲどしな男に似ておかし　操子

尾浜川柳会　上田佳秋報

半分は気持おさえて飲む話　歌子
もう一本打てばよく効く釘さがす　良征
自分だけ知ってる釘があるこわさ　江美
大工さん口から釘の隠し芸　新吉
一か八か打ってみました嘘の釘　夢之助
八卦見は人には迷わずずばり言い　いわを
迷わない信じた歩幅でついてゆく　光重
迷わずについて来ました影法師　礼子
くちなしの今年も匂う散歩道　すゑ
そうめんが美味しくなって夏ですね　すみ
大小屋を仰向けに干す梅雨晴間　貞男
内証ごと二人で箱につめておこ　寅之助
下駄箱に赤い鼻緒が眠ってる　牧郎
だしぬけに誘う男に裏がある　よしつぐ
誘った娘余計な友を連れて来る　佳秋
誘われる靴は素直に履かれない　弘治
人妻を誘うとついてくる怖さ　紫香
その気なら一泊旅行に誘てみる　清太
梵鐘を打てば心が洗われる　貞吉
釘打って釘の痛さが跳ね返る　よしを
ビルの上月と話してビール飲む　武庫坊
八十の母と毎日口喧嘩　昌子
百合の花くちなしの香に負けている　保

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

目の前に見る国後島は祖先の地　三十四
返還を迫ると寒い風に遇う　度
返還のない島銃口向けている　雀踊子
返還を促している渡り鳥　白屯
父さんの呑み代になる還付金　柳影
返還の沖縄基地はそのままに　くに子
割勘がすむと別れが近くなる　孤舟
会費制温みがこもる披露宴　公一
割勘で不運な話などはせぬ　浩一郎
衣食住足りて不満の癖を持ち　喜風
繋がれた犬の不満も聞くゆとり　千代子
相槌をうって不満をきいてやる　慶三
不満だらけの中に生甲斐見付け出し　柳宏子
出番前落ちつくまじないしたけれど　綾珠
福沢がじっと出番を待つ金庫　律子
出番待つ袖の空気が張りつめる　美子
地球から核の出番は阻止しよう　頂留子
親父から娘に変る味の店　覚然坊
華やかな街看板が生きている　湖風
書道塾さすが楷書の鮮かさ　滋啓

尼崎いくしま川柳会　角野かず子報

不実だとわかっているのに庇いたい　きよみ
投かんのあとで気づいた書き不足　美智子
梅雨晴間輝く白は主婦のもの　正一
わしやがナ声かけられて顔忘れ　元吉
父の日も西を向いてる鬼瓦　牧郎
ふるさとの目高影まで澄んでいる　水声
一人だけ間をおいて掏摸狙う　紫香
反省の水は静かに澄んでいる　礼子
バラの棘枯れても自己を主張する　晴子
長寿国エンマの口からさそい受け　美代子
葬列の後は他人でよくしゃべり　かすみ
欠伸するとき本当の顔をする　定人
なに不足なくて無いものねだりする　年代
太陽の笑顔が世界包んでる　伊三郎
紫陽花が大好き梅雨は大きらい　すえ
七人の敵もときには欠伸する　かず子
売れっ子の芸者小さなあくびする　一利
薄情な男の下着を蔭に干す　郁栄
絽のころも色気無くしていない尼　歌子
御破算にしても出て来ぬ不足分　玉子
約束をたばこの灰が覚えてる　保蔵
無精髭孫が痛がり逃げて行く　よしを
村捨てた男貯めたという噂　はじ芽
サラ金で借りて大穴狙ってる　幸子
虚勢淋しい後姿を狙われる　静江
ライラック祭点字の文届く　貞子
妻の矢が私を狙うときがある　一郎
毎日が日曜となり夜が昼　正秀
待たされて笑顔がくもる町の角　君子
金不足もうなれっこの世帯ぐり　堕駄
年金に子が足してくれまだ不足　佳秀
紅燈の笑顔に負けた運のつき　春子
それほどに長寿願うた訳でなし　良征
一匹の蚊に責められて眠れない　ミツ
梅雨晴れに親子でのぼる滝のまち　常子
口はさむ隙ゆっくりと待っている　誠一郎
リン一つ打って仏へ言う不足　玲
寝不足へ母の叱言がつきまとい　伊升
米不足田圃に家が建っている　弘生

翠洋会　　**中西兼次郎報**

鱧と蛸祭は暑い方がよい　楓　楽
賛成の誤算奥歯に鯖の骨　いつを
ギャル御輿外人も入り若い顔　綾　子
遊びたい盛りを今日も塾通い　光　子
暑気あたりスマート過ぎて秋を待つ　照　子
時刻表心を旅に遊ばせる　みつ子
遊んでる様だが社長の眼の配り　景　子
ぶらぶらと遊び無職と言う怖さ　兼治郎
塾などは行かせず夏を遊ばせる　風　童
若人の負担が増える長寿国　登志実
賛成をして何故悪いのか平和論　鬼　遊
星か灯か山紫に変る頃　薫　風

南大阪川柳会　　**中川　滋雀報**

再起する子へ星空が美しい　冬　葉
敢えて手は貸さぬ再起の車椅子　楓　楽
ふり向けば再起を信じる妻の目だ　雀踊子
新しい湯飲み再起へ面映ゆい　藤　子
前歴を秘して二度めの職につき　慶　三
再起してまだ落ちつけぬ固い椅子　春　蘭
七転び再起の砂を握りしめ　勝　美
再起した匂い露店でさざえ焼く　千代三
大口を叩く再起に背を向ける　晴　風
どんな目に合うても惚れた仲でんが　柳　伸
気に入らぬ仕打ちジョッキの泡にまぜ　柳右子
一拍置くと愛の仕打ちと気がついた　重　人
頭から怒鳴られた方がよい仕打ち　恒　明
夫への仕打ちは誰も居ない時　久　子
母は子のどんな仕打ちも怒れない　芙佐女
嫉妬ですよひどい仕打ちも吹っ飛ばし　千　梢
肩すかしの手も考えておく仕打ち　洋　子
釣った魚に餌はいらんという仕打ち　章　久
スリムなどどっちでもよい満腹感　凡　子
スリムにはなれぬというている秤　智　子
その脚に総て喋らしてるスリム　凡九郎
スタイルブックを私に置きかえる　白　兎
高度成長お礼はスリムになっていく　秋　子
グラマーとスリム相性よい夫婦　文　秋
やせたとはいわずスリムになりはった　頂留子
スリムな指先にもう騙されぬ　千　里
スリムには遠い妻あり田が肥える　雅　風
スリムな男で何か物足らぬ　三　久
スリムになる夢すて切れぬジャズダンス　真　砂
浪費癖なりに節約しっている　柳宏子
節約のはじまり水の一しずく　眉　水
終い湯で洗濯をする母の風呂　公　一
節約をキャッシュカードは喜ばぬ　善　信
節約の財布に愚痴も詰まってる　滋　雀
節約の妻が惜しまぬ化粧品　寿　美
つもり貯金これも節約かも知れぬ　蘭
節約をして貯ったら旅行する　綾　珠
昼食を節約夜はテキにする　喜美子
生きてゆく勇気が沸いた空の青　浩一郎
悪人も善人もなし青い空　節　子
寝ころべば空からヒント落ちてくる　度
大空で汚染空気を吸う緋鯉　覚然坊
ジャンケンで決めた夫婦の空の旅　只　士

川柳わかやま　堀端　三男報

心まで濡れてはいない貰い泣き　白光子
豆腐やのおつりはいつも濡れている　鬼　遊
唇が濡れたネオンに包囲され　豊　太
皿濡らし河童彼女を追うて行き　武庫坊

第19回大陸川柳人同窓会

期　日　**昭和59年9月29日(土)・30日(日)**

会　場　河内長野市天見温泉「南天苑」
（電話〇七二一―六八―八〇八一）
南海高野線「天見」下車、駅前

会　費　一万八千円（宴会費、宿泊、句会費、観光バス等一切を含む）

宿　題　「庭」　藤島　茶六選
「遍路」　小田二十貫選
「友達」　野村太茂津選
「さようなら（再見）」　東野　大八選
各題2句

第一日　9月29日（土）午後6時より南天苑大宴会場で前夜祭。

第二日　9月30日（日）午前8時朝食と同時に句会。10時終了。貸切観光バスで高野山参詣。
午後7時頃新大阪着の予定。

■お問合せは左記へ
〒183東京都府中市新町2―47―26
渡　辺　蓮　夫方
第19回大陸川柳人同窓会事務所
電話（0423）63―7854

気配りが過ぎて濡れ衣被せられる　太茂津
濡れ衣の干し場に夫の愛があり　三千代
梅干しを夜露に濡らしている仕上げ　裕美
迎え傘なくてとび込む赤のれん　公子
肩書を脱ぐと痩せてる影法師　幸
本当の私を生きるベール脱ぐ　克子
父の脱ぐ服に火の粉の痕がある　狂虎
マネキンを脱がす手馴れた無表情　正子
母さんにだけは兜を脱がされる　紀久子
金策に疲れた重い靴を脱ぐ　正博
裃を脱げば社長も好々爺　秀雄
恥ずかしがりやをあっさり脱がす聴診器　照子
殻を脱ぎおんな一人の幕が開く　寿子
これ以上脱ぐと軽犯罪になる　和子
弥陀の掌で塗っても消えぬ傷がある　信秋
子に画いた夢はだんだん塗り変り　紀美女
ラジカセのリズムに乗って塗る左官　稚代
塗り込めた隙から嘘が覗いてる　凡太
貴方色に画布塗り込める愛一途　緑良
碧く塗るそれで良かった頃の空　凡九郎
塗りたての壁へ落書きはじめよう　芳朗
塗り下駄と浴衣で孫が待つ祭り　登志代
塗り替えて新入生を待つ下宿　萬的
くやし涙を塗り潰してる男の掌　武雄
二人だけの人生絵図を塗り続け　光代
塵一つ恐い塗師の刷毛が冴え　天彦
一枚のはがきに夢を塗り込める　桂香
黒髪の濡れて爪弾く三下り　きみ
大人には浮かばぬ知恵の子の遊び　三男

卯の花句会　辻　白渓子報

一仕事済むまで農夫汗ふかず　伊三郎
汗臭さ気にして部屋の隅に居る　武
背すじから汗流れてる参観日　冬葉
これしきの坂に汗出る年になり　よしえ
土に汗流し農家の姑になる　あき子
釣書にも書き度い程の汗男　杜的
赤ちゃんの鼻に可愛い汗が浮く　眉水
汗ひとつかかぬ男を嫌いぬく　千歩
自画像も少うし汗をかいている　水客
汗ひいた頃においしいお茶が出る　求芽
若やいでおれど背中が齢を言う　芳子
流す背に愚痴は言うまい手がゆるい　房子
背の丸い陛下は父とおない歳　秀男
背を見せて寝てる女にある謀反　規不風
栄転へライバルの目が背に刺さる　種子
温かいライバルの手が背を撫でる　年代
父の背を越した息子の浴衣縫う　よ志子
十字路に進路きびしい男の背　栄
遍歴の女が背負う国なまり　武庫坊
米をとぐ母の背中に詩がある　如州
汗かいてかいてパートの五百円　康子
このダイヤパートで買った妻の指　梅風
服や靴パートへ出るのも高くつき　美幸
パートより帰ってほっと水を打つ　里子
静けさは皆んなパートでお留守なり　礼子
非課税の範囲で励むパートです　一郎
親のすねだけは噛らぬ気のパート　潮花
仕送りと塾でパートはみんな消え　泉山
レジにいる母はいつもの顔でない　柳影
幼稚園パートの母が迎えに来　花代子
税金をにらみ合せてパートに出　久子
母親のようなパートをこき使い　鬼遊
夕食を気にしてパートペダル踏む　如水
旅帰り思いがけない訃報待つ　繭女
思い出を語るコップが泣いている　春子
思い出をたしかめたくて旅に出る　静子
思い出に並んだ親は若々し　暢子
思い出がピンクに染まる新生姜　作子
忘れたい思い出ばかり流れ星　〆女
思い出は村の学校の遠い道　逸
どん底の思い出自叙伝いつわらず　白渓子
思い出は美しいとこだけ覚えてる　もも子
遠廻りした思い出がある月夜　鐐太郎
別々の思い出を持ちいい夫婦　とおる
思い出は亡妻と唄った流行歌　紫香

川柳塔まつえ　恒松　町紅報

子を叱る心はきっと温くかろう　早苗
不詳事を叱る下達の順送り　代仕男
叱るくせ直せぬままに夏休み　三和
手抜きした工事を叱るきつい雨　由郎
叱られて夕焼けカラスに笑われる　満江
叱っても磁針はやはり北を向く　正江
輪の中で叱ると風が吹きぬける　昭二
葱坊主ひとり叱ると一斉に　瑞枝
叱る訳他人が聞いても腹が立ち　舞吉
柚子の木に叱りつかれた顔がある　荒介
耳鳴りへ鬼面が少しずれてくる　雄々
なまはげが歩けば母の背にかくれ　雪美
肩書をはずすと落ちた父の面　鳳人
仮面つけて七人の敵のひとりです　きみえ
グリコぼけ十面相は今どこに　翠星
善人の面でころりと嘘をつき　芳子
父の日は画布一面に父の顔　孝華

一面のすいか畑よ私小説　嘉寿子
人間みな臍下に鬼面秘めている　運児
裏町で年金ぐらしささやかに　みつこ
裏町に育ってディック・ミネが好き　鶴丸
裏町に育ちゆかたの好き嫌い　春梢
裏町の人生論に魅せられる　愚童
裏町はとても悲しい響きもつ　秀子
裏町でなければ飲めぬうまい酒　正朗
裏町は三味の音色がよく似合い　渡
裏町につましく生きる鰯焼く　多賀子
裏町に住んで人情心得る　巡歩
裏町へ好かれぬ顔を売りに行く　紫吻
持ち味が出せず二軍生活なり　孤呂二
ほどほどの持ち味老舗の名にはじず　寿美子
持ち味を生かさぬまんま押し出され　壮樹
口下手の弔辞遺族の胸をつく　与根一
口下手でいつも眼鏡の度が合わず　叮紅

菜の花句会　高杉　鬼遊報

頭振る振らぬで揉める扇風機　三男
高校がかしらボーナスすぐ消える　雅風
不揃いの皿も集めてなごむ膳　春蘭
方舟よ地球が消える日が近い　章
遊びなら二つ返事という仲間　勝美
頭良いばかりで話まとまらず　蕉露
日々新た今朝の皿には今日の糧　柳宏子
写経して小さな罪を消すつもり　右近
扇風機あてると嘘が飛び出した　武庫坊
返事一つ親の躾が匂ってくる　昭子
うち消してみても眠れぬ日が続く　柳伸
熱帯夜の愚痴をきいてる扇風機　雀踊子
もぐら叩きのもぐらにされている頭　度
戦前派いまも元気な扇風機　みつる
頭から叱られている井戸の底　鬼遊
丸ビルで色よい返事待っている　冬葉
カタカタと小言の多い扇風機　年代
割り切れぬ数字が頭の隅にある　美幸
扇風機八方美人の風で良し　糸葉
泣き言は言わない妻の皿料理　悦郎
弔問の客に届かぬ扇風機　弥生
割勘の料理で小皿配られる　射月芳
目には目を無理したらしい頭数　頂留子
美女からの返事は聞かぬ方がよい　幸生
若嫁のいつまで続くよい返事　シマ子
首ふらぬ扇風機があり鮎の宿　栞

川柳藤井寺　赤木　和子報

背伸びして男の心を取り逃がし　与呂志
法則へアルキメデスの湯が溢れ　喜代志
建売りが増えて谷間をうめる苗　つや
戦友会熱海お宮の松で撮る　一香
皮肉言う人とも笑顔で話し合う　律子
うわさにも何処吹く風と酒の席　作秀
時々は自分を嫌う自分見る　伴子
鈍角を描くしか能のない老後　吸江
大物になるには恥を気にしない　昭子
まじないが効けばノルマが笑うだろう　美代子
ほおずきの赤さにも似た過去の恋　治子
過保護などいない軒下みな巣立つ　比呂志
長男の背骨が軋む旧い家　本蔭棒
騒音と異臭のなかの安全旗　哲郎
零一つ見落しとんだ恥をかく　正人
天主閣屋根の緑青浮彫に　秋園
毎日が趣味に追われて年取らず　清心
土用干し狐の襟巻ある農家　繁男
恥一つかいてプラスにする若さ　美房
補聴器の雑音低く妥協する　末一
もう一度聞きたし亡妻夢の声　和美
揚げ雲雀わたしもつれて昇ってよ　雅美
出土した古墳はかなき王子とか　うめ
顔かくしながらサラ金へカネを貸し　一屯
恥じらえぬ稼ぎ寡婦の束ね髪　ふさ
般若経護ってほしい欲もこめ　かな女
人の世に厚顔無恥も生きる道　義一
皮肉ると褒めごととる人のよさ　稔
嬉し涙を拭う胸借る恋なかば　和子

京都塔の会　松川　杜的報

西行の心にならんと桜みる　孝江
身だしなみ揃えるように水芭蕉　和友
励ましに義足鳴らして友が来る　潮花
子供への供養が墓の鯉のぼり　花代子
吊り橋へ女が消えた朝の霧　紫香
愛宕さん弥次喜多麓で失礼し　花村
勝負の無いゲーム日日繰りかえす　武庫坊
薔薇の絵の棘を鋭く描いておく　年代
美しく老いていく日のプログラム　春江
花菖蒲のほほえみにある誇り　美穂
息子の帰省暮しのリズム狂わされ　芳子
フライパンたたけば春の音がして　杜的
花にあき蜜蜂若葉求め舞う　巨詩
蜂の巣をつつく怖さを子に教え　千世子
蜜蜂の女王分離を企てる　冬子
明日開く蕾を蜂が肌で知り　白渓子
分封のミツバチ夏をうたがわぬ　水客
遊んでるようで遊んでいない蜂　飛鳥

紅椿ひっそり古寺の庭で咲く　笛珠
心ゆくまでクリーム食べて紅をひく　葉子
持つ人も来そう嬉しい紅の色　英子
寡婦の部屋花器にあふれる初夏の彩　紅陽
ガラス越し須恵器の私語が聞こえない　求芽
養蜂家蜂と対話の旅つづく　楓楽

わかあゆ川柳会　小砂　白汀報

雨好きで六月に咲くことにする　三和
米とソの息づかいなら気がもめる　秀穂
山肌の傷を緑が縫いはじめ　敏明
緑風と太陽浴びて牛が寝る　ヒデ子
若みどりどれも生きんとする姿　世似
従いてゆく足跡があり老いの坂　英子
正座した足に甘えるすきがない　鈴江
頭だけ進んで足のない児童　輝水
余震なお去らず地球の息づかい　清泉
仮面つけ登った坂の息づかい　民子
打ち寄せる波大海の息づかい　歳栄
すかんぽが聞いてた蝶の息づかい　美栄
足跡が残るきれいに歩かねば　はるみ
たじろがぬ踏ん張る足のある限り　白汀

川柳ささやま　河原みのる報

伸び盛り過保護で軋むランドセル　和子
両親の見栄も纏っている過保護　正純
ゆき過ぎの愛が子供を狂わせる　(円)貞子
菊さして文化の秋が見えてくる　エキオ
文盲という姑さんの記憶力　さかえ
大学出かいなと文章読み直し　可住
気まぐれな風にねらいを外される　笑女
頂点を狙う小指が疼き出す　正子
狙いなど捨ててゆったり春鏡　テル
順はよし順を願うて日々写経　百合子
順番へ一番乗りの夜が明ける　房子
髪型を変えても順番横にそれ　とみ子
筋道を辿ると母の背に還る　文平
筋道を通しつづけて出世せず　みのる
本当の筋道がない米作り　法斉

川柳はびきの　塩満　敏報

鳥居から女の道を通りゃんせ　阿衣
招かれてお喋り上手顔が寄り　末一
世界一の長寿日本に不安ある　隅谷義一
夏の風と契ってダリヤ炎える虹　寿美
ベニスからゴンドラ招いた夕涼み　喜代子
マネキンのスーツに見とれる五等身　司
神様に誓った二人もう別れ　昭子
鏡から図ぼしされている謀反　憲太郎
疲れ出てそうかそうかと生返事　忠宏
わたし夏主人南アで冬本番　伴子
三歩五歩揺れて吊橋足すくむ　一屯
攻めるのが得手で六法全書読む　隆
肚の砂吐いておしまい岩清水　美代子
真直に焼けぬするめに腹を立て　隆二
海汚す都会の心許せない　只士
除草剤蟻もミミズも抵抗す　白水
初盆の切符がとれぬ親不孝　敏
窓際ででっかい花火上げている　吐来
指切りの孫が覚えていた西瓜　与呂志
右に左に転げ熱帯夜も育つ　胡村
腰を踏む孫に百円せびられる　繁男
腰ひもが凶器となる日ないように　和子
あっと言う目立つ川柳出来んかいな　淑子
律儀にも腰痛梅雨に舞い戻り　キミ

第36回　西日本川柳大会

日　時　9月2日（日）8時30分
会　場　岡山県久米南町中央公民館
兼　題　習う　去来川巨城選
構える　卜部晴美選
靴　遠藤枯葉選
還る　片山巷雨選
怖い　橘高薫風選
カメラ　小林由多香選
彼女　寺尾俊平選
席　題　2題と特別課題
投句は各題2句、縦20糎、横4糎の句箋に一句ずつ明記の上、裏に雅号を記し、8月28日までに弓削川柳社宛へ。投句料1000円。
会　費　1500円（発表誌・記念品麻生路郎色紙・昼食呈）
賞　岡山県知事賞ほか

岡山県久米郡久米南町下弓削
弓削川柳社

本社９月句会

日時 九月七日（金）午後六時

会場 なにわ会館
天王寺区石ヶ辻町19－12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話 06・772・1441番

兼題 おはなし　西田柳宏子
「屋根」　西出楓楽選
「そこそこ」　塩満敏選
「腰」　高杉鬼遊選
「位置」　阿萬萬的選

席題 二題　当日発表　各題三句以内厳守

会費 五百円

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川柳塔社

10月の兼題は表紙裏に掲載

10月の本社句会は７日（日）

本社へのご送金について

同人費、誌代、広告料その他本社へのご送金は必ず左記会計室へお願い致します。

★郵便振替（大阪8－33368川柳塔社宛）をご利用下さるのが安くて便利です。用紙は郵便局にあります。

〒581 八尾市中田二－三〇二　高杉鬼遊方
川柳塔社会計室

●募　集●

十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「情」　辻白渓子選
「許す」　小野克枝選
「注文」　越智一水選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「感謝」　渡辺独歩選
「捨てる」　竹中綾珠選
「欲」　川上渓水選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

９月の常任理事会は３日（月）

定価 五百円（送料50円）
半年分 三千二百円（送料共）
一年分 六千三百円（送料共）
昭和五十九年八月二十五日印刷
昭和五十九年九月一日発行
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
〒545 大阪市阿倍野区三明町二－一〇－一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六三九－六九一四番
振替口座大阪8－三三三六八番

＝編集後記＝

☆九月になると、不二田一三夫さんが病に倒れられたので、史好さんと一緒に編集の一切を引き継ぎに、不二田家へ行った日を思い出す。あれから早くも四年、酔々さんの死をはじめいろいろの難関に出会ったものの、何とはなしに凌いで来られたのは、スクラムの和以外の何物でもなかろう。

☆ロサンゼルスのオリンピックの体操で総合優勝した具志堅選手の言葉のように神仏の加護があったに違いない。個人競技と団体競技に拘らず優劣を争う競技にすら目に見えぬ力が強く作用するのだから、伝統的な短詩文芸に、ご先祖の力が大いに預るのも当然の事であろう。

☆東京オリンピックの女子体操競技の優勝者、チェコのチャスラフスカ選手の演技の風格、マラソンの優勝者、エチオピアのアベベ選手の貫禄に匹敵するのは、アメリカ短距離界の王者のカール・ルイス選手ぐらいであろうか。百米の後半のダッシュは神技としか思えなかった。

☆そして、神様は常に最高にさわやかなのである。

☆今度のオリンピックでの中国の活躍はすばらしかった。中国は老大国どころか底知れぬ可能性を秘めた若若しい大国の印象を与えた

☆東野大八さんと田中正坊さんに、中国吟行旅行に関連した随想をお願いした。

☆上海・蘇州・桂林の観光に先立ち、参加者はそれぞれ旅情を高めておられることだろう。無事な旅、収獲の多い旅になるよう祈っている。

☆八月に入って枝豆と玉蜀黍とビールが災いしてダウン、前歯は欠けるしいい所なしだった。好きなものには今だにコントロール出来ぬ自分が情けない。八日の高島屋ローズカレッジの後駅で平衡感覚を失い昏倒寸前だった。36・9度の猛暑もさることながら90～60の低血圧が原因らしい。

☆「養命酒汚辱のいのち養えり」と盆休みを前に夏籠を決め込んだ。（薫）

▼今年の八月六日は第三十九回目の原爆記念日であった。広島平和記念公園の慰霊碑の石室に奉納される原爆死没者名簿は計三十四冊。総数十一万三千二百七十一人とある。この数は確認された数であり、未確認者は含まれていない。国と国との戦により、武器を持たない多くの人々が、一個の核爆弾によって殺戮されたのである。世界は今、その一発よりも強力な核の保有に狂奔している。かかる脅威は人として容さるべきでないが、現実は怒りを超えて悲しいばかりである。

▼井伏鱒二作「黒い雨」や中沢啓治作「はだしのゲン」などによって、生き残った被災者の悲惨さは誰もが知っている。原爆体験国である日本にありながら、核反対の署名や平和運動に対してのある種のうしろめたさは何なのであろう。核反対や平和運動が間違った行為であるなら、平和憲法を変えようとしたり核かくしをする為政者は堂々と論評を述べればよい。シェルターを持ち方舟に乗れる用意のあるなしに関わらず、わが身が、肉親が、同胞が、無惨な死を迎えようとしている状況を何故見ようとしないのだろうか。

▼平和に慣らされて、いつしか川柳も小さくなった。抒情だけの時代もそう永くはないと思う。川柳にどれほどの力があるものか。そろそろ笑いを武器に立ち上がる時ではないか。（き）

☆下五終止形の句の増加について嘗てこの欄で触れたことがあるが、中でもとりわけ目立つのは「る」止めの句である。この傾向はいつの頃から顕著になったのか、ぼくはごく最近のことかと考えていたが、既に本誌52年5月号に直原七面山氏が指摘しておられる。

☆それによると、51年10月号の本誌作品欄における「る」止めの句の比率が本社句会24・6％、川柳塔14・7％、水煙抄14・3％、愛染帖15％、各地柳壇17・2％に及ぶとし、このような大氾濫がなお続くならば川柳はますます面白味がなくなり、堕落の一途をたどって行くに違いないと警鐘を鳴らしておられる。

☆以来8年を経過し前記の数値がどう変ったか興味があり調べてみた。その結果は次のとおり（59年七月号）本社句会21・6％、川柳塔15・8％、水煙抄21・8％愛染帖18・9％、各地柳壇18・8％。

☆いつだったか質問してみたことがある〃どうして、「る」止めの句ばかり作るの〃、すると即座に答えが返ってきた。〃だって新しい句は皆「る」止めでしょう。連用形なんて、もう古いのよ〃。かくて「る止め」症候群は今や川柳界の体内深く蔓延しつつある。

☆〃量の増大は一定段階において質に変化する〃と、たしかマルクスが言った。銘記すべきことである。（史）

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十九年八月二十五日印刷
昭和五十九年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六八八号　川柳塔　九月号

日刊
電波新聞

投稿欄案内

川柳　選者・橘高薫風
（掲載日）毎週水・土曜日

俳句　選者・小寺正三
（掲載日）毎週火・金曜日

短歌　選者・佐々木信夫
（掲載日）毎週月・木曜日

〈投稿規定〉
はがき一枚に三句（首）以内（川柳・俳句・短歌と明示すること）。投稿随時。
自由課題・秀句には掲載紙贈呈。
〈投稿先〉
〒五三〇・大阪市北区中之島三丁目二・朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

この夏、おいしさひとりじめ……
アイスキャンデー
宇治金時・あずき・チョコ・ミルク・パイン
高島屋　そごう　松坂屋　阪神　ドージカ店
近鉄（アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店）
サン・ストア（中之島・淀屋橋各店）
京阪モール　新川売店　虹のまち店
泉北高島屋　南海難波駅構店
国鉄大阪駅店
大阪・なんば
551 HORAI
蓬莱
TEL (641) 0551

雑誌 05703－9